

# 研究紀要 2

---

山梨県下の先土器時代資料の検討－I－

保坂 康夫

所謂円錐形土偶に就て

小野 正文

石劍考

—中部・関東を中心とした出土状況から—

新津 健

甲斐における弥生文化の成立

中山 誠二

辻金具・雲珠考

坂本 美夫

---

1985

山梨県立考古博物館  
山梨県埋蔵文化財センター

## 序

このたび、当博物館・埋蔵文化財センター職員の研究成果の一端を盛った『研究紀要』第2号を公刊することとなりました。

本号には次の5篇を収載いたしました。まず保坂康夫「山梨県下の先土器時代資料の検討－1－」は、從来先上器時代のものとされてきた各資料について、厳密な再検討を加え、山梨県における今後の先土器研究に必須の基礎資料を提供しようというものであり、小野正文「所謂円錐形土偶に就て」は、横原形態土偶と呼ばれる縄文中期の、胴腹部が中空の、いわゆる円錐形土偶について、その分布圏・時期・意味等を考察したものであります。次に新津健「石劍考－中部・関東を中心とした出土状況から－」は、縄文時代後晩期文化に特有な石劍について、研究史を概観したのち、中部地方や関東地方を中心に、出土状態を詳細に考察整理し、その性格や成因を検討したものであります。また中山誠二「甲斐における弥生文化の成立」は、山梨県における縄文時代晩期後半から弥生時代中期初頭に至る土器様相の変化を明らかにし、弥生文化の波及の実態に迫ろうというのですが、まず研究史を概観したのち、各遺跡出土の土器群を詳細に分類・編年し、さらに遺跡の分布状況や立地条件、弥生文化の移入経路等重要な問題に取組んでおります。最後に坂本美夫「辻金具・雲珠考」は、辻金具・雲珠について、詳細な形態分類と編年とを試みたもので、筆者の年来の研究課題である古墳時代の馬具研究の一環であります。

以上長短5篇、いずれも中間的・予察的研究で、なお今後の研究にまつべき点が多くあります。学界にいささかでも貢献できれば幸甚です。各位の忌憚のないご批判・ご叱正を賜わりたいと存じます。

1985年12月2日

山梨県立考古博物館館長

山梨県埋蔵文化財センター所長

磯貝正義

## 目 次

序

磯貝正義

山梨県下の先土器時代資料の検討－1－ ..... 1

保坂康夫

所謂円錐土偶に就て ..... 13

小野正文

石劍考－中部・関東を中心とした出土状況から－ ..... 23

新津健

甲斐における弥生文化の成立 ..... 43

中山誠二

辻金具・雲珠考 ..... 79

板本美夫

# 山梨県下の先土器時代資料の検討 - 1 -

保坂 康夫

1. はじめに
2. 資料の検討
3. おわりに

## 1 はじめに

山梨県内の先土器時代研究は、1953年の米倉山（こめくらやま）遺跡の発掘以来、30余年の歴史をもつ。この間、50カ所ほどの遺跡が報告されているが、これらの報告をみると遺物の観察が不十分であったり、正確な実測図も不備で、遺跡の位置さえ明示されていないものが多い。これらの多くは表探資料であり、十分に注意して扱わねばならない性格のものであるにもかかわらず、慎重に欠け、直感的な判断とも思える報告が目立つ。また、発掘資料は非常に少ないが、確実に先土器時代の生活面を調査し、十分な質と量の資料を得た調査は、天神堂遺跡、権現堂遺跡<sup>(1)</sup>、御迎堂遺跡<sup>(2)</sup>、立石遺跡、杯窓遺跡、丘の公園14番ホール遺跡があげられる程度である。しかし、こうした遺跡も、十分な調査報告書が提示されたものはほとんどない。

こうした研究の現状から起る問題は非常に深刻なものがある。いうまでもなく、考古学は歴史叙述のための学問であるが、そのための確実な資料が十分提示できないのである。山梨県周辺の先土器時代遺跡の分布をみると、八ヶ岳山麓周辺の高原地城にあるいくつかの遺跡群、愛鷹山南麓、箱根山南西麓の遺跡群、相模野台地や武藏野台地の遺跡群などがある。これらの遺跡群には石器材料の黒曜石や石器型式など同一のものがみられ、一つの大きな文化圏を形成している。当然、人間の行き来があったはずであるが、山梨県はこれらの遺跡群を結ぶ地域として重視されても着目されるべき地城と考える。

また、当博物館の活動に大きな障害となっている。いまだに、十分な資料提示、解説、遺跡分布図の提示さえできない状況にある。さらに、資料の不鮮明さから、県内研究者の中から先土器時代研究ばかりか先土器時代そのものに対する不当な評価さえ惹起している。こうした不当な評価は、先土器時代研究を行なおうとする意志さえ阻害している。新たな研究者がいっこうに現われないのである。

しかし、これまでの不鮮明な資料は、無視するにはあまりにも多いのである。しかも、1970年代末以来の大規模な開発事業に伴う発掘調査においても、数点の資料を表探同然のかたちで得たものがいくつかあるものの、十分な資料を得た発掘が少ない現状がある。また、大規模な遺跡分布調査がいくつか行なわれながら先土器時代遺跡の発見が少ないと鑑みると、今後飛躍的

な資料增加は悲観的な感さえある。

そこで、過去に報告された資料をもう一度ありうべき方法で客観的に提示したうえで評価し、現状における基礎資料を確保しておく必要がある。この作業の一環として、今回は山本寿々雄氏所蔵の資料の検討を行なった。

氏は、山梨県の先土器時代研究の先駆者である。岩宿遺跡が発掘されると、先土器時代遺跡の発見、発掘が相次いだが、その中で矢出川遺跡の調査がなされたことで、同じ八ヶ岳山麓の本県側にも遺跡があるのではないかと氏は考えた。野辺山原に隣接する高根町清里に遺跡を探したが発見できず、目を転じて八ヶ岳山麓から広がる韭崎泥流の存在する甲府盆地南縁の曾根丘陵上にも遺跡があるのではないかと考えた。こうして、米倉山遺跡を発見し発掘することとなる。以後、1966年の大月市宮谷遺跡や1968年の豊富村浅利遺跡の発掘を手がけられた。また、都留文科大学考古学研究会を指導し、県内の先土器時代遺跡の分布調査を実施され、この成果の一冊<sup>(8)</sup>は1968年森本圭一氏によって公表されている。さらに、1970年の富沢町天神堂遺跡の発見・発掘も氏の努力によるものである。山梨県の先土器時代研究は、まさに氏の指導のもとに開始されたのである。

ここに提示する資料は、米倉山遺跡、浅利遺跡、鶴の島遺跡の発掘資料と、上石田遺跡、信州峰遺跡、込山遺跡付近の表探資料の30点である。

## 2. 資料の検討

### (1) 東八代郡中道町米倉山遺跡の資料

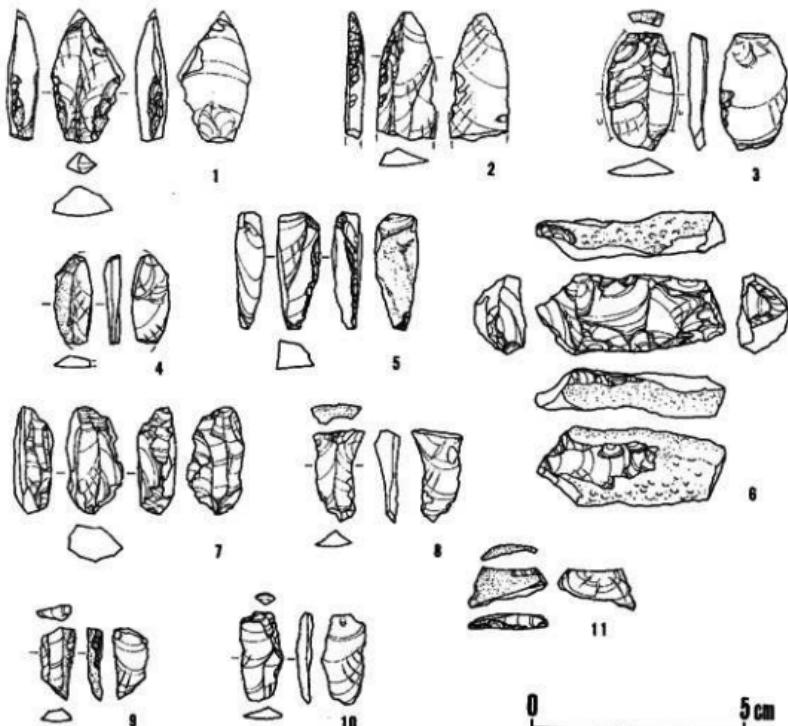
本遺跡は曾根丘陵上にある。洪積世の扇状地性砂礫層や湖成層、八ヶ岳起源の韭崎泥流などで構成される曾根層群、それをおおう厚いローム層によりなる。曾根丘陵の前・後面に大規模な断層がみられ、この運動により形成された丘陵である。ローム層は、Pm-1以後のものが一般的にみられる。本遺跡の所在する米倉山は、曾根丘陵前面に独立丘状に並ぶ丘陵の1つで、周辺の平坦面とくらべて高位にある。

1953年12月から翌年3月にかけ8本のトレンチを入れて調査したが、そのうちの1本から石器6点がローム層中より出土したという。土層は、第一層の黒褐色有機質土層、第二層のローム層、第三層の砂礫層である。ローム層は40cmの厚さであったという。<sup>(12)</sup>

ここに報告する資料は、1955年に報告された発掘資料と、1966年に報告された表探資料である。発掘資料は、ナイフ形石器2点、使用痕ある剥片2点、剥片1点、石核1点である（第1図1～6）。

1は、基部調整の小型のナイフ形石器である。寸ばかりで小型の縦長剥片を用い、打面を残して基部のみに荒い調整がなされている。素材の打面は調整打面である。先端部や刃部、打面の一端に新しい剥離の欠損がみられる。2は、部分調整のナイフ形石器である。打面側を先端にし、

打面部を細かな調整で除去している。下半部は欠損しているが、欠損の剥離面は古い。素材は、1と異なり長い石刃であったと思われる。3は、使用痕ある剥片である。両縁部に連続した微小剥離がみられる。背面は打面側からの剥離のみみられる。打面には自然面が残るが、打面調整や頭部調整もみられる。4の剥片は、打面を含む右側縁側半分を大きく欠損している。欠損の剥離面は古い。背面には打面側からの大きな剥離がみられる。打面部には背面の剥離を打面とする小剥離があるが、背面との角度が鈍角であり、打面を形成するような性格のものではない。5は、使用痕ある剥片である。正面の使用痕の小剥離群に切られる大きな剥離は、この剥片の主剥離面である。この他の剥離は、いずれも風化の度合いが弱い。裏面の打面側から的小剥離、正面の打面側からの剥離、左側の折れ風の剥離で、いずれも相互に風化の度合いが違い、この順で弱い。6は、石核である。細長い黒曜石原石を横に使っている。自然面を打面として、明確な打面調整はない。剥離作業は主に正面で行なわれ、上下両方向から、小型の横長剥片を剥離したものと思われる。右側面や背面にも剥離作業がなされた形跡がある。左側面の大きな剥離は、折れによるもの



第1図 米倉山遺跡の資料

と思われる。打面の頭部などに潰れによる小剥離が多くみられ、おそらく台石を用いて剥離を行なったものと思われる。剥離面の風化が他の資料より弱い。

上記の石器のうち、1・2は先土器時代のものと思われる。3についても、大きさや剥離技術、風化の度合いなど、1と共に通する点が多く、前者に加えるべきかもしれない。4~6については、技術的な面や風化の度合いなどから、前3者と同様に扱うのには難点があろう。6の石核については、石鐵素材の石核とみると可能かもしれない。これらの出土したローム層は、本地域が曾根丘陵の最高位面であり、少なくともPm-1以上のローム層の堆積はあったであろうと考えると、厚さ40cmで直接砂礫層に乗る状況からして、縄文時代のものも含む二次堆積上層であるとも想起できる。早急に結論をくだすことは危険があろう。なお、資料は全て黒曜石。

7から11は、1966年に細石刃や細石核として報告された表記資料である。7は細石核とされたものであるが、打面がなく、上下両方向からの剥離がみられ、両端に破碎痕がある。上下両方向からの剥離で、切り合ひ関係が不明で、同時に剥離したと思われるような剥離もみられる。いわゆる楔形石器と思われる。8の剥片は自然面を打面とする。打面部が他の部分より幅広く、肥厚している。9も8と同様な特徴がある。打面の剥離はポジティブバルブを残す。10の剥片は打面調整や頭部調整風の剥離がみられる。背面の剥離は末端まで剥離していないものや、かなり幅広の剥離であり、細石刃を剥離した形跡はない。11は、横長剥片である。9と11に使用痕らしき小剥離がみられる。

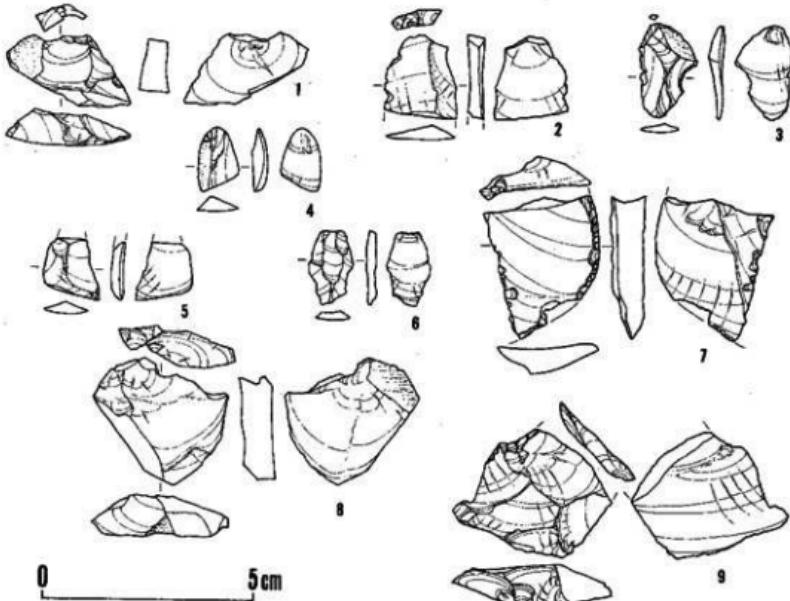
細石刃は、幅がおよそ1cm以内で長さが幅の2倍以上のものというのが一般的な定義である。その他、幅の狭い同方向の剥離が連続する背面、微小な打面、厚さが均一で薄く、両側縁が直線的で平行しているなどの特徴がある。8から10では、打面部が大きくまた肥厚し、厚みがあり、背面にみられる剥離は幅広で、両側縁がふぞろいである。また、7は、風化の度合いが強いものの、縄文時代にも広くみられる器種である。11の横長剥片も含め、上記の資料だけで細石刃文化の存在を考えるにはやや危険があると思われる。なお、上記の資料はいずれも黒曜石製である。

## (2) 東八代郡豊富村浅利遺跡の資料

本遺跡は曾根丘陵上にあり、米倉山の西方にある曾根丘陵前面の平坦面上にある。1956年に「チヨツバー又はそれに類する石核」が3点出土したことから発掘が計画され、1968年12月14日から4日間、8m×4mのトレンチ1本を設定して発掘が行なわれた。その結果、先述と同様な石器3点がまとめて出土し、その他ナイフ形石器を含む剥片が得られたと報告されている。土層は、I層が耕作土で、有機質混りの黒色をおびている褐色土層、II層が黒味の少ない層、III層が軟質ロームで、II層下部に縄文土器片、III層上部10~18cmにかけて石器の出土がみられたと<sup>(14)</sup>いう。

ここに報告する資料は、発掘資料の一部であり、他は地元にあることである。剥片8点、削器1点である(第2図)。

1は、横長剥片である。打面の剥離は大きい。背面では打面側からの剥離のみみられる。下面には、本剥片剥離以前の、左右両側縁側からの剥離がみられる。一部に使用痕もある。2の剥片は、打面部に細部調整風の剥離がみられる。しかし、この剥離は左側縁側にもまわり込んでおり、打面が平坦でなかったことを窺わせる。背面には、上下両方向からの大規模な剥離がみられる。剥離面の風化が非常に弱い。3の剥片は、背面に左右両側縁方向からの剥離がみられる。打面は小さい剥離面である。4は碎片である。打面は破碎している。背面の左半分は自然面、右半分は右側縁側からの剥離面である。5の剥片は、打面を欠損する。背面には、打面側からの剥離のみみられる。中央の小剥離は欠損時のものである。6の剥片は、打面部が破碎している。背面には、打面側からの剥離のみみられる。7は、削器である。打面部と左側縁側を大きく欠損する。欠損面は古い。右側縁に連続する小規模な剥離があり、刃部を形成している。背面には、打面側からの1枚の大きな剥離面があるのである。風化の度合いが他より強い。9と同一個体と思われる。8は、チャートの剥片である。打面には、背面の剥離を切って、大きく抉るような剥離がある。背面には、左側縁方向からの大きな剥離のみみられ、その打点部分に破碎痕がある。下縁部には、背面剥離以前で、背面を打面とする大きな剥離がある。腹面の主剥離面は、バルブの高まりがなく平坦である。打点部は破碎している。打面に筋理面を残すが、主剥離面との角度は $180^\circ$ に近く、打点部の破碎と同時に剥離したものと思われる。9の剥片は、打面側を大きく欠損する。欠損面



第2図 淩利遺跡の資料

は古い。欠損部の剥離は彫器風であるが、2枚の剥離があり、いずれも背面側に打点があることから、背面を何かに打ちつけて折った跡と考えた。背面の剥離は多方向である。下縁部には主剥離面を打面とする剥離がみられるが、二次加工といえるほど執拗ではない。左側縁上部に若干の二次加工がある。これらの資料は、8のチャート以外全て黒曜石である。

これらの資料は、横長・縦長の剥片を含み、背面の剥離の方向や大きさ、打面の剥離のあり方など相互に違いがみられる。それぞれ違った剥離技術により得られたものか、あるいは統一性のない剥離技術によって得られたものと思われる。7と9については、風化の度合いが強く、大型であり、他と区別する必要があるが、先土器時代に限定するにはやや難点があろう。定形的な石器は7の削器があるが、他にチヨッパー風の石器6点が報告されている。今回は報告できなかつたが、写真から判断するかぎりでは、黒曜石原石かその荒割りとも思える。一ヵ所からまとまって出土した状況も考えると、縄文時代に多い石器原材のデボであるかもしれない。しかし、小範囲の発掘でもあり、これらの資料から早急に結論するのは危険と思われる。

#### (3) 南都留郡河口湖町鶴の島遺跡の資料

鶴の島遺跡は、河口湖の中にある鶴の島にある遺跡である。1969年に発掘され、縄文早期から弥生時代の土器片が発見されたが、最近発刊された概説書の中で、先土器時代遺物があること<sup>(15)</sup>が述べられている。今回報告する資料がそれである(第3図)。

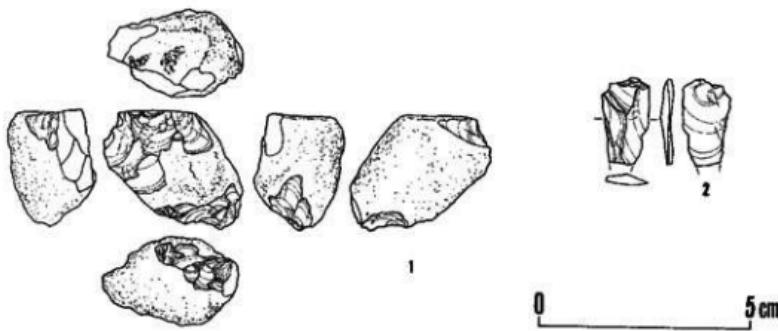
1は、正面に2・3の剥片剥離の跡がみられるものの、全体に破碎痕が目立つ。上面の平坦な自然面には打撃痕が顕著である。おそらく、台石を用いて黒曜石原石を打撃し、剥片を得ようとしたものと思われる。2の剥片は、打面部が破碎して存在しない。左右両側縁側からの剥離がみられる。発掘面積も少なく、これらの資料だけから先土器時代遺跡の存在を考えるにはかなり危険性があると思われる。

#### (4) 甲府市上石田遺跡の資料

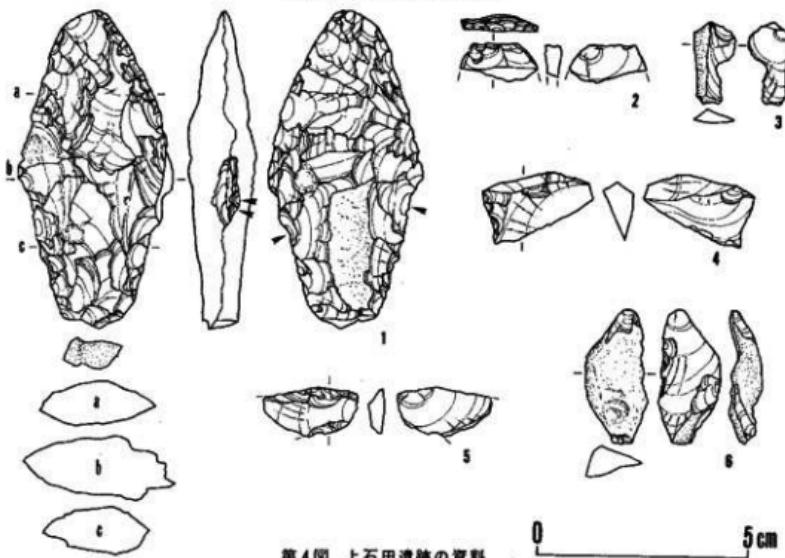
本資料は、1969年の甲府市の土地区画整理事業の工事の際に発見されたものである。同じ場所から、縄文時代中期の土器片や石臼<sup>(16)</sup>も発見されている。本遺跡は、釜無川扇状地上に位置する。高木勇夫・中山正民の両氏は、1983年に甲府盆地西部地域の地形について論じているが、この中で釜無川扇状地について、「その北半部においては御動使川の強い勢によって釜無川が盆地内沖積低地に流入し、おもに河床に堆積した流路堆積物によって形成されたもの」であるとした。<sup>(17)</sup>これにしたがえば、本遺跡は冲積地に立地することになる。

今回報告する資料は、1970年に報告された資料である。石槍1点、剥片5点である(第4図)。

1は石槍である。両縁部中央が突出し、先端は丸く、基部端は自然面が残され平坦である。両面のほぼ全面に調整がみられるが、そのあり方で3つの部分に分けられる。1つは突出部から先端に至る部分の先端側半分である。器体中央に至る平坦で大きな剥離で丁寧に調整され、断面a



第3図 稲の島遺跡の資料



第4図 上石田遺跡の資料

にみるように他の部分より薄く仕上げられている。突出部側半分では、非常に荒い調整がみられる。剥離は大きいが、断面bにみるようにいずれも階段状に波うっている。コブ状の高まりを除去し、薄くしようとした意図の剥離と思われ、先端部側半分と同様に仕上げられるべき部分であったのだろう。突出部より下方の基部の調整は、前2者とは大きく異なる。断面cにみるように、剥離が前者にくらべて小さく、角度が急である。中央部には、自然面や素材の剥離面が大きく残存する。先端部と基部とを意図的に別々の調整技術で作り出しているものと思われる。先端部の両縁がなす角度は、基部の両縁がなす角度より大きく、両者の接する部分には必然的に稜が形成

される。また、突出部の基部側に抉るような剥離がみられる（矢印）。これらの剥離は、他にくらべて急角度で、縫合に対して $90^{\circ}$ 近い。したがって、中央部に逆東状の突出部を作り出そうとしたことは十分考えられる。山本氏や石黒氏の報告では新潟県中林遺跡の石器に対比しているが、こうした形態や製作技術は、さらに新しい時期の石槍や石鎧などに近いと思われる。類似例は、近くでは長野県和田遺跡などがあげられる。<sup>(19)</sup><sup>(20)</sup>

2は剥片の打面部である。打面細部調整風の剥離がみられるが、両側縁側に広がり、さらに自然面が残存する。背面には打面側からの剥離のみみられる。3の剥片は、打面が破碎している。背面には打面側からの剥離のみみられる。4の剥片は、左側縁部に若干の二次加工がみられる。打面部、背面には多方向からの剥離がみられる。5の剥片は、打面が破碎している。背面には、打面側からの小剥離と右側縁方向からの大きな剥離がある。剥片剥離後の小剥離がいくつかあるが、二次加工と言えるほど執拗ではない。6の剥片は、上下両端部に破碎痕がある。台石を用いた剥離技法で得られた剥片と思われる。これらの石器は、全て黒曜石であり、風化の度合いはいずれも弱い。

これらの剥片は、背面の剥離の方向や大きさ、打面の剥離のあり方など相互に違い、まったく異った技術、あるいは統一性のない1つの剥離技術によるものと思われる。風化が弱い点や遺跡の立地も考えると、先土器時代のものと考えるにはやや難点がある。

#### (5) 北巨摩郡須玉町信州峰表採の資料

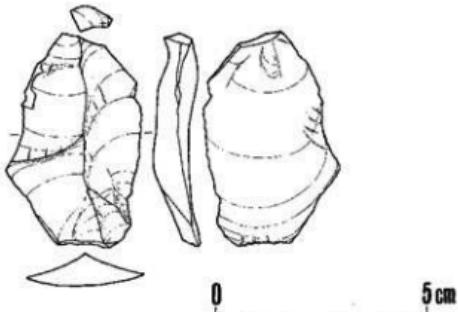
信州峰は、秩父山塊西端の山梨と長野の県境の峰である。馬場平遺跡などの先土器時代遺跡群のある長野県川上村が眼下にある。1974年、道路拡張工事の際に剥片が何点か表採され、最近発行された概説書の中で、ポイントや石刃が存在していることが報じられている。ここに報告する資料は、表採された資料のうちの1点である（第5図）。

第5図は、チャートの縦長剥片である。打面は比較的大きな剥離の調整打面である。右肩部の剥離は、非常に大きな剥離面か節理面である。背面には、上下両方向からの剥離がみられる。両

設打面の石刃技法により剥離さ

れた剥片である可能性がある。

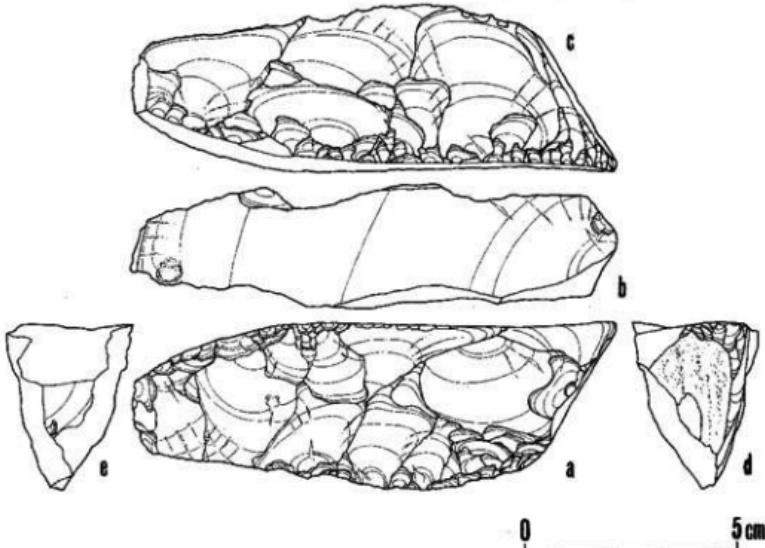
この他、水晶やメノーの原石、剥片・碎片など数点が表採されている。定形的な石器がないので即断はできないが、川上村の遺跡群の広がりを考えるうえで考慮すべき資料であろう。



第5図 信州峰表採資料

(6) 東山梨郡牧丘町込山遺跡付近での表探資料

東山梨郡牧丘町畠原にある込山遺跡付近で1975年に表探された資料である。この地域は段丘がよく発達し、ローム層の堆積も厚く、多摩ロームに対比されるものから、Pm-1以後のローム層まで存在する。表探地点は、最高位の倉科おし出し面の頂点近くに位置し、かなり傾斜しているが、ローム層はよく発達している。なお、込山遺跡は縄文時代中期末から後期初頭の土器片を出土する遺跡である。本資料は、今回初めて報告するものである。



第6図　込山遺跡付近表探資料

第6図は、舟底形細石核のブランクと思われる。大きな非調整のネガティブな剥離面と上下両方向から大小の連続的な剥離面2面により、断面三角形で全体にいわゆる舟底形の形態を呈する。d面には大きく自然面が残るが、b面との角度が鋭角で、あたかも舟の舳先のような形状を呈す。a面の剥離は、b面側と下縁側より剥離された連続的な小規模剥離群と、同方向の大規模剥離群よりなる。小規模のものより大規模のものの方が占いが、いずれもb面より新しい。c面では、b面縁部全体にみられる小剥離群と、b面側からの大規模剥離群よりなる。大規模剥離群は、a面の大規模剥離群の一つを切るが、大半はa面の下縁側からの小規模剥離に切られている。c面の小剥離群は、d面の自然面にまでまわり込む。この中に長いものも1枚みられるが、打面部側で幅がかなりあると思われ、細石刃とは思われない。b面は、ネガティブな剥離面である。バルブは、a面下縁部からの古い大規模剥離によって一部が取られている。e面は、b面に切られる

唯一の剥離面である。b面が非常に広い剥離面と思われること、a・c面にみられる素材の幅を減じる剥離作業が相当な量行なわれていることと思われる事、b面とその打面のa面との角度がかなり鋭角なことから、素材は大型剥片を剥離した核の側であると思われる。素材剥離以前の調整状況が不明であるが、いわゆるホロカ技法による細石刃核ブランクと理解したい。

本資料のように北日本に類例がもとめられるものは、近くでは長野県野辺山原の柏垂遺跡、東京都瑞穂町狭山遺跡B地点などがあり、静岡県芝川町駿河小塚遺跡も同様なものとする考え方もある。<sup>(25)</sup> <sup>(26)</sup> <sup>(27)</sup> 舟底形細石刃核の遺跡が牧丘段丘上にあっても、決して不思議ではない。また、石材の黒曜石についても、和田峠の御訪側鉱脈のものであるとの御教示を森山公一氏より得た。

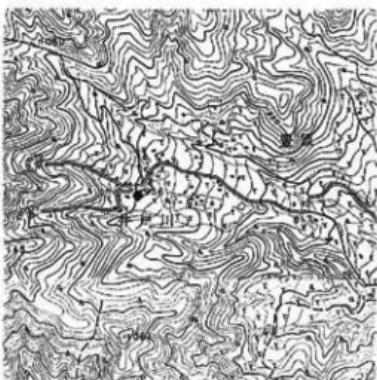
### 3. おわりに

今回報告した資料から、早急に結論をくだすのは危険であり、今後も十分な注意が必要と思われる。しかし、米倉山遺跡のナイフ形石器、込山遺跡付近表探の舟底形細石刃核ブランクが確認できたことの意義は非常に大きいと考える。米倉山遺跡のナイフ形石器のうち基部調整のものは、釈迦堂遺跡や天神堂遺跡の中には見い出されていない。別時期あるいは別集団の所産と見るべきものかもしれない。また、込山遺跡付近表探の資料は、いまのところ県内唯一の細石刃文化の遺物と思われる。しかも、中部地方南部には稀な舟底形細石刃核である。今後、当該期の研究に重要な資料となろう。

最後に、このような至らない報告にもかかわらず、快く資料を提供して下さった山本寿々雄先生に衷心より御礼申し上げる次第である。



第7図 米倉山遺跡位置図



第8図 込山遺跡付近表探地點位置図  
(いずれも 25000 分の 1)

註

- 1 山本寿々雄 1955 「山梨県下に於ける無土器文化の調査（予報）—米倉山の例—」『石器時代』第一号
- 2 富沢町教育委員会 1971 「天神堂遺跡発掘調査報告書（旧石器時代）」伊藤恒彦 1979 「天神堂石器群の再検討」『甲斐考古』16の2
- 3 小林広和、藤本丑雄、里村晃一 1976 「山梨県権現堂石器文化の調査（第1次）」『信濃』第28巻第4号
- 4 保坂康夫 1985 「山梨県の先土器時代遺跡」『歴史手帖』第13巻1号
- 5 山梨県立考古博物館 1982 『展示概説』
- 6 小林広和、上杉陽、里村晃一 1982 「桂川支流音野川杯窪で発見された旧石器とその火山灰層序」『日本第四紀学会講演要旨集』12
- 7 山梨県教育委員会 1985 「丘の公園14番ホール遺跡範囲確認調査報告書」
- 8 山梨県教育委員会 1966 「中央自動車道東京・富士吉田線の新設に伴う発掘調査報告書（概報）」
- 9 山本寿々雄 1969 「東八代郡豊富村浅利宮の下A地点1区出土の石器について（略報）」『甲斐考古』6の2
- 10 森本圭一 1968 「山梨県内出土の石器について（先土器～縄文文化発生期）—表探一」『甲斐考古』5の4
- 11 山梨県地質図編纂委員 1970 『山梨県地質誌』
- 12 註1と同じ
- 13 谷口一夫、川崎昌宏 1966 「山梨県米倉山出土の細石核と細石器」『甲斐考古』1
- 14 註9と同じ
- 15 山本寿々雄 1984 「日本の古代遺跡14 山梨」 P. 62
- 16 石黒良行 1970 「甲府盆地底部出土のポイントについて」『甲斐考古』7の1  
山本寿々雄 1970 「甲府盆地底部出土の旧石器文化ならびに縄文文化中期の遺跡について」『甲斐考古』7-3
- 17 高木勇夫、中山正民 1983 「甲府盆地西部地域の地形」『日本大学文理学部自然科学研究所研究紀要』 P. 36
- 18 註16と同じ
- 19 鈴木道之助 1981 「図録 石器の基礎知識Ⅲ 縄文」 P.55
- 20 茅野市教育委員会 1976 「尖石考古館図録」 P.142
- 21 註15と同じ

- 22 甲府盆地第四紀研究グループ 1969 「甲府盆地の第四系」地学団体研究会専報15号『日本の第四系』P.P. 254~257
- 23 手塚光彰、大村昭三、小笠原幸夫、佐野昭男 1984 「牧丘段丘の地形と地質」『山梨の自然をめぐって』
- 24 信藤祐仁氏の御教示による。
- 25 川上村教育委員会 1984 「川上村遺跡詳細分布調査報告書」 P. 86
- 26 瑞穂町教育委員会 1970 「狭山・六道山・浅間谷遺跡」 P. 39
- 27 芝川町教育委員会 1972 「駿河小堺-静岡県における先土器文化の研究-』 P.P. 29~31
- 28 鶴丸俊明 1979 「北海道地方の細石刃文化」『駿台史学』第47号PP. 37~38

# 所謂円錐形土偶に就て

小野正文

## 1.はじめに

## 2.資料の紹介

## 3.勝坂式土偶の多様性

## 4.まとめ

## 1.はじめに

当博物館では毎年夏、開放講座として「土器作り」を実施している。1984年のこの講座に参加された甲府市の今村伸太郎君は、敷島町松島団地付近で、ある土製品を採集されており、博物館に持参された。これを観察した筆者は、これが繩文中期の所謂円錐形土偶であることと、重要な遺物である趣旨を同君に伝えた。そこで今村君と御家族は、この土偶を当博物館に寄贈してもよいとの申し出があり、現在当博物館の特別収蔵庫にて保管している。

ここに今村伸太郎君と御家族の御厚意に深謝し、合せてこの円錐形土偶の持つ意味について、類例と共に若干の考察をしてみたいと思う。

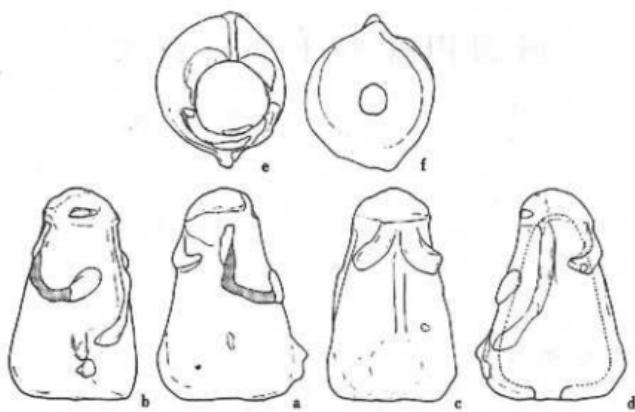
## 2.資料の紹介

第1図1. 敷島町松島団地出土土偶

円錐形をした中空土偶で、色調は黒灰色を呈し、磨耗が著しく、長期にわたり水中などでローリングを受けたのではないかと思われる。ほぼ完形品であるが、頭部の形状から、さらに大きくなるか否か判断に迷う所がある。円錐形の胴部はほとんど中空となっており、底に16mmほどの穴があいている。右手を胸部に、左手を腹部に置いている。そしてその左手の下に二つの隆起がある。背面は肩部にハの字状の隆帯が見られ、これは黒駒の土偶の肩部と類似しているので、同時期の所産と思われる。そしてハの字状隆帯の中央部から垂下する半隆起帯が見られ、その下部もわずかながら隆起している。全体を隆帯で表現し、時期的な特徴である施文具は使っていない。この土偶は輪積法で製作されたと思われ、粘土の厚さは約6mm程度と薄い。

第1図2. 勝沼町宮の上遺跡出土土偶

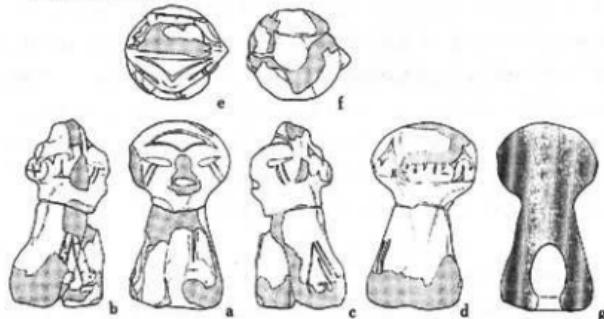
頸部を失った胴部が円錐形をした土偶である。胸部には乳房が表現され、右手を乳房の下にあて、左手を腹部にあてている。いずれの手も四本指である。下腹部には勝坂式土偶の特徴である対称弧



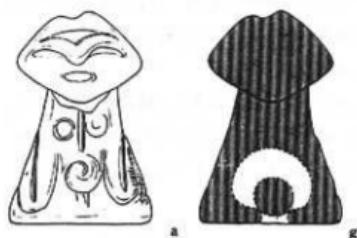
1. 敷島町松島団地



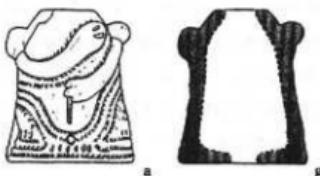
2. 勝沼町宮之上遺跡



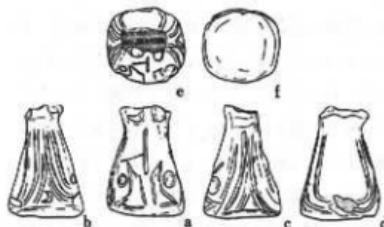
3. 一宮町国分寺遺跡 第1図 楠原形態土偶 (1 / 3)



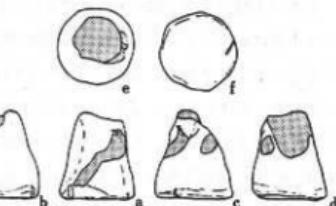
4. 東京都八王子市檜原遺跡



5. 小淵沢町出土



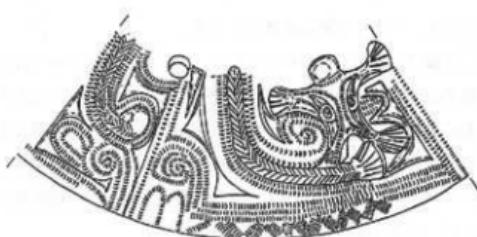
6. 一宮町积迦堂塚越北A地区



7. 一宮町积迦堂塚越北A地区



8. 藤崎市坂井南遺跡



9. 石川県上山田貝塚



第2図 檜原形態土偶 (1/3)

刻文が陰刻されている。左手の下縁と左手の両縁にそって、三角押文が施されている。背中と両脇腹には三角押文と陰刻三叉文を施している。この三角押文と三叉文と対称弧刻文がこの土偶の時期的特徴である。おそらく新道式期に属するものであろう。

頭部との接合部に分割塊製作法の痕跡を認めることができる。ここは木芯で接合しており、木芯痕が中空となっている。土偶は厚手で作られており、中空部の空間もそれ程広いものではないが、底の部分に貫通した穴は、約8mmと小さい。横原の土偶のように土玉が入って、鳴る土偶であった可能性もある。

#### 第1図3. 一宮町国分寺遺跡出土

横原の土偶に極めて類似した形態を持つ土偶である。横原の土偶が両手を省略しているのに対して、この土偶は両手が付けられていた痕跡が窺える。このように欠損部分もあるが、ほぼ全体の形状の判明する土偶である。頭部に半月形の陰刻文を有し、目の下にダブルハの字文を施している。後頭部も一部欠損しているが、双接環の両脇に陰刻三叉文を施し、全体として、玉抱き三叉文をなしていたと思われる。その下に交互刺突による連続コの字文を施している。腹部には正中線が半隆起の中に沈線を施すことによって、表現されている。両脇腹部には玉抱き三叉文が沈線と交互瓦刺突によって表わされている。底部の小さな穴と脚部のやや広い空間によって、中空土偶となっている。この空間もまた、鳴子を入れるためにあったかもしれない。

#### 第2図4. 八王子市横原遺跡出土土偶

この土偶は円錐形土偶の典型として、また鳴る土偶あるいは鈴形土偶また土偶形鉢とも呼ばれる土偶である。胸部の中空部に直径10mmを越えると思われる土玉（石ともいう）が一個入っており、振ると鳴る。額部に半月形陰刻文を施し、目も口も陰刻するという単純な表現である。胸には両乳房が隆起し、その間に正中線が施されている。腰と思われる部分は半隆起状の渦となっている。その下の対称弧刻文は深い陰刻となっている。両脇腹部の三角形の構図の中に交互刺突による連続コの字文などが施されている。

#### 第2図5. 出土地不詳

1969年のサントリー美術館の「土偶と土面」では、山梨県小瀬沢町出土とあり、他の「古代史発掘3—土偶藝術と信仰」等では長野県尖石遺跡出土となっている土偶である。この点に関して尖石考古館の守矢昌文氏にお尋ねしたところ、尖石遺跡では出土した記録がないということである。

実物の存在地も出土地も不詳の土偶であるが、まさしく円錐形をした中空土偶であり、頭部の形状より、頭部は別個に作って、組み合せた土偶であると考えられる。

右手を胸部に左手を腹にあてており、腕部の縁には三角押文（？）を施している。指は三本である。左手を載せている腹部は膨み、妊娠状態を示している。腹部の中央に沈線により正中線が施され

ている。膨んだ腹部に下に円孔がある。脇腹部には角押文が充填されている。

#### 第2図6. 一宮町积迦堂遺跡群塚越北A地区出土土偶

円錐形土偶の頭部を欠くもので、円錐というより方錐というような形状である。両乳房が隆起し、正中線が沈線で表現されている。下腹部の対称弧刻文はやや大きく陰刻している。脇腹部に円文と三角形文が沈線で施されている。底部に貫通孔はないが、胴部は空洞で中に土玉か小石が数個入っていると思われ、振ると、カラカラと音を発する。

#### 第2図7. 同 上

これも円錐形土偶の頭部を欠損するものである。また胴部に両腕の剥離痕があるので、先述した土偶のように右手を胸、左手を腹にあてたものであろうか。この土偶も胴部が空洞であるらしく、振るとカラカラと音を発したことあったが、現在は音は発しない。

#### 第2図8. 坂井南遺跡出土土偶<sup>(3)</sup>

典型的な円錐形土偶である。目は三角押文が施されている。口は大きく開き、この空洞は円錐の底まで貫通している。この空洞は胴部で広くなるわけでもなく、同じ大きさである。脇腹部に三角押文で玉抱き三叉文を施している。ところが一般に土偶の文様がシンメトリーなのにに対して、右脇腹部のみに文様が施されるという特異な文様構成である。なお当博物館の第1回特別展では「笛形土偶」として展示された。

#### 第2図9. 石川県上山田貝塚出土土偶<sup>(4)</sup>

子を背負う土偶としてあまりに著名な土偶である。左手は前、右手は後にまわしている。手の指は三本指である。子供の脇腹部に玉抱き三叉文が陰刻されている。全体に空白部がないように角押文と三叉文および玉抱き三叉文で充填している。上山田式期の土偶であるが、筆者はこの土偶が中部地方の「新造式土器文化」の影響下に製作されたものではないかと考えている。

この土偶は輪積法で製作されたもので、中は完全な空洞となり、底部の貫通孔は小さい。また頭部の部分に欠損が見られるが、頭部は別個に作られた組み合せ式の土偶であったと思われる。

#### 第3図10. 東京都神谷原遺跡出土土偶<sup>(5)</sup>

横座のポーズをした土偶である。円錐形土偶とするには、いくつかの疑問もあるが、胴部が中空となり、底に穴があいている。この胴部を中空とする点において、円錐形土偶のカタゴリーに入れておきたいと思う。

### 3. 勝坂式土偶の多様性

勝坂式土偶は縄文時代の土偶の中でも最も形態的な種類に富んでいる。具体的な事例として、

東京都神谷原遺跡の土偶の分析を通じて、有脚立像形土偶の典型である坂井形態土偶、坂井形態の変形で両腕の下った神谷原形態土偶、出産状態を表わした広畠形態土偶、小形粗製の小形土偶、何らかのポーズを示した中形動作形態土偶があることを知った。この他にも勝坂式土偶には黒駒<sup>(6)</sup>の土偶のようなものもあるが、類例に乏しいので、言及は避けておきたいと思う。

今回、ここに紹介した所謂円錐形土偶もようやく資料が増加したので、これについても樋原形態土偶として、勝坂式土偶の一形態に加えたいと思う。円錐形土偶については、野口義麿氏の考察がある。氏はこの土偶の形態的特徴から、堀之内式期の筒形土偶の祖形とみなしている。<sup>(7)</sup>確かに坂井南遺跡の土偶は筒形土偶と極めて類似している。しかし中期の後半にこのような土偶がないことから、この两者はまったく関連性のないまま、それぞれの時期に独自に発想・製作されたものと思われる。

奥山和久氏もまた、この円錐形土偶の特徴を7項目にまとめ、その時期と分布を明らかにしている。<sup>(8)</sup>氏のいうように円錐形土偶には中空のものと中実のものとがある。筆者のいう樋原形態の土偶は、この中実のものを含まないが、中空の内部に鳴子が存在してもしなくとも、中空である



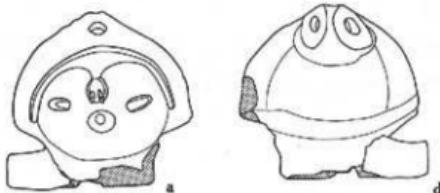
10. 東京都八王子市神谷原遺跡



11. 畠崎市坂井遺跡



12. 岐阜市岩堂遺跡



13. 勝沼町沢瀉三口神平地区



14. 長野県茅野市尖石遺跡

第3図 樋原形態土偶ほか(1/3)

ことが重要であると考えている。また製作法も二通りあるが、これは含めて考えている。

この土偶の特徴はまず第一に胴腹部が中空であることである。中空の内部には土玉や小石が入っており、鈴のように鳴る樺原の土偶や駅廻堂の土偶（第2図6、7）がある。また駅廻堂例のように、中空部が閉塞されているものと、他の図示した土偶のように開口しているものとがある。製作法にも二種類ある。松島団地付近出土土偶、伝小淵沢町出土土偶、上山田貝塚出土土偶のような土器と同じ輪積法で製作されるものと、宮の上遺跡出土土偶のように頭部に分割焼製作法の痕跡を留めるものもある。また伝小淵沢町出土土偶や上山田貝塚出土土偶は所謂組み合せ式土偶で、頭部は別個に作られたのであろう。

時期的には広義の勝坂式期の所産であろう。松島団地付近出土土偶は肩部の隆起から、おおよそ新道式期に、宮の上遺跡出土土偶は三角押文が明瞭にあることから新道式期に、国分寺遺跡出土土偶、樺原の土偶はおおよそ藤内式期に、伝小淵沢町出土土偶は洛沢式～新道式期、駅廻堂の土偶は藤内式期に、坂井南の土偶は三角押文から新道式期に、上山田貝塚出土土偶も新道式期に、比定され、神谷原の土偶の下限は井戸尻式期である。

以上のように、すべて広義の勝坂式期に所属し、その中でもより古い部分に集中する傾向にある。

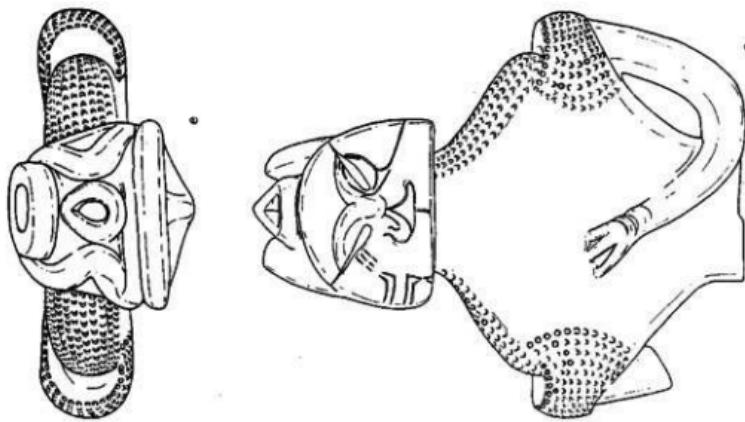
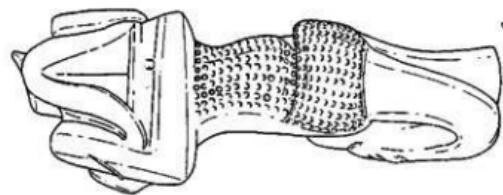
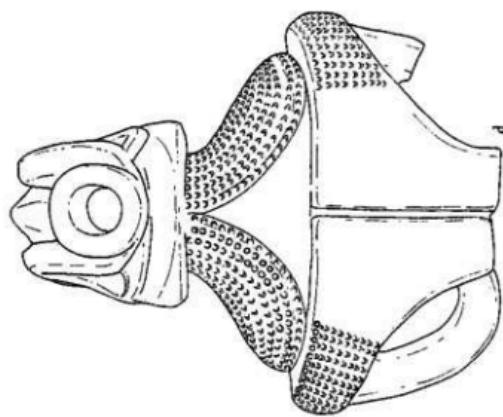
分布に関してみれば、長野県中山遺跡の例を加えれば、山梨県を中心とした中部高地に分布し、勝坂式土器の分布圏と一致する。上山田貝塚出土土偶のみが、逸脱しているが、この上山田式期には中部地方の「新道式土器文化」が北陸地方へ強く影響を与えた時期であり、縄文時代の交流を象徴するような資料である。

樺原形態土偶的一大特色は胴腹部が中空であることである。土偶のはほとんどが女性像である中で、この形態の土偶が容器のように中空であることは、ユングを引用するまでもなく、女性像としてより強く認識されるのである。しかもその中空部分に鳴子が入っていれば、まさに自からの胎内で子を育む妊娠した女性像であることは疑う余地のない所である。

妊娠した女性像より一步進んだ土偶として、出産状態や授乳状態を表わした土偶がある。当博物館の第1回特別展では、これら妊娠・出産・授乳の状態を表わした土偶を人の誕生の過程を語る土偶として一括して「誕生土偶」として展示した。この中で、男性土偶と考えられていた坂井の土偶（第3図11）についても、これは出産状態を表わした土偶として、新しい解釈を試みているのである。そしてこの土偶もわずかではあるが、底面を抉り込んで中空としているのである。これも樺原形態の土偶の系譜を引くものとして理解されるのである。また子供を抱く土偶として著名的な東京都宮田遺跡の土偶もわずかに底部の下を抉っているのである。

胴腹部を中空として、中に鳴子を入れて音を発することは、まさに胎内で子を育む女性像としての土偶であることは先に述べた。しかし、同じ時期同じように音を発する土偶がある。古い例では塙山市岩堂崎出土例（第3図12）があり、最近では駅廻堂の三口神平地区から一点出土（第3図13）している。これらの土偶は頭部が中空となり、中に鳴子が入っているものである。頭部から音を発するものと胴腹部から音を発するのでは、まったく意味が異なるのである。鳴る土偶

第4図 痘病の土偶 (1/3)



として同義的には考えられない。この頭部が鳴る土偶にはまた別な用途が存在したのであろう。

中期後半以降に出現する土鈴については長崎元廣氏の考察があり、土鈴の最古のものとして、長野県焼町遺跡4号住居址の遺物が井戸尻Ⅲ式～曾利Ⅰ式に比定されることから、井戸尻式期まで遡るものがあるかもしれないと述べている。こうした過渡的な例があったとしても、土鈴が盛行するのは中期後半である。

中期の前半と後半では社会的にも文化的にも大きな断絶が存在したのではないかと考える研究者も少なくない。<sup>(11)</sup> 土鈴に関してもまったく同様ではなかろうか。鳴る土偶から土鈴へとは系統的な発展は現在のところ認められないのである。両者は別個に発想・製作されたものであり、土鈴は土偶に比べて破壊されることも少ないである。

右手を胸部、左手で腹部をおさえるポーズは、松島墳地付近出土例、宮の上遺跡出土土偶、伝小淵沢町出土土偶に通有に見られるポーズである。また国分寺遺跡土偶や駅迎堂土偶（第2図7）も両腕は剥離しているが、やはり同様なポーズをしていたのではないかと思われる。いずれもやや膨んだ腹をおさえているので、妊娠のポーズであろうか。

同じようなポーズをしている土偶が、宮坂英式によつて袖珍抱壺押腹座像と呼ばれた壺を抱える土偶（第3図14）である。これは右手で壺を抱え、左手で腹部をおさえるものである。類例は駅迎堂遺跡群にある。これとまったく左右逆なのが九兵衛尾根一号住居址出土土偶である。これらはいずれも腹部が膨み、妊娠状態を示している。そうすると、両腕をひろげて、胸部と腹部をおさえた土偶は妊娠と深い関係のあるポーズではないかと思われる。

ただし、黒駒の土偶のように左手は不明だが、右手を胸部にあてた土偶（第4図）は、腹部は欠損していて、妊娠の兆候はみあたらない。仮面を付けた土偶はことさら性的表現を避けるのであろうか。

#### 4 ま と め

所謂円錐形土偶の中の胸腹部が中空である土偶を楕原形態土偶と呼び、その時期・分布特徴・意味について考えてみた。この楕原形態土偶は広義の勝坂式期の所産であり、上山田貝塚土偶を除いては、勝坂式土器の主要分布圏内に分布する。胸腹部が中空で中に鳴子を入れたものがある点から、この土偶は女性のもつ子供を孕み、生み、育むという能力を直截的に表現した土偶で、一種の妊娠呪具として、まことから連想される豊穣を祈る呪具として製作されたものであろう。そしてまたこの土偶も毀たれることが定めであったと思われる。わずかに中山遺跡出土例のみが完形である。

なお、勝沼町教育委員会の室伏徹氏と一宮町教育委員会の猪股善彦氏には、未発表資料の提供と種々御教示をいただいた。記して感謝申しあげる。また、楕原・黒駒・岩堂崎・伝小淵沢町出土土偶など図化されていないものについては、写真と計測値をもとに図化した。図化にあたっては、古屋香代子さんの手をわざらわした。

註

- 1 サントリー美術館 1968 1968 春季号 「土偶と土面」
- 2 江坂輝彌 1972 『古代史発掘3——上偶藝術と信仰』
- 3 山下孝司 1983 『坂井南遺跡』 墓崎市教育委員会
- 4 小島俊彰 1979 『繩文土器・土製品』 『上山田貝塚』PP.34~60
- 5 沼崎陽 1982 『土製品』 『神谷原』PP.438~464
- 6 抽寫 1984 『土偶の分割塊製作法資料研究(1)』 『丘陵』11 PP.26~34
- 7 野口義應 1972 『古代史発掘3——土偶藝術と信仰』
- 8 奥山和久 1984 『中部山岳地帯における繩文中期土偶の基礎的研究』 『中部高地の考古学』III PP.168~236
- 9 新津 健 1983 『金生遺跡発見の中空土偶と2号配石』  
『研究紀要』1 PP.25~40
- 10 長崎元廣 1976 『繩文の土鈴』 『信濃』28-2 PP.63~73
- 11 桐原 健 1964 「南信・八ヶ岳山麓における繩文中期集落の構造」・『古代学研究』38  
桐原健氏・宮坂光昭氏がこのような考え方を発表している。筆者もまた住居構造・炉形態、  
土偶の製作法・遺棄行為等について、この格差について述べたことがある。
- 12 宮坂英式 1953 「八ヶ岳西南麓出土土偶の新資料四例」 『信濃』5-8
- 13 山梨県立考古博物館 1983 『土偶』 図71, 72, 73, 74

# 石 剣 考

## ——中部、関東を中心とした出土状況から——

新 津 健

- |            |          |
|------------|----------|
| 1. はじめに    | 4. 石劍の性格 |
| 2. 研究史     | 5. 石劍の流れ |
| 3. 石劍の出土状況 | 6. おわりに  |

### 1. はじめに

石劍・石刀を含めた、いわゆる石棒類は、その特異な形状から古くより注目され、明治以降多くの先学により資料の蓄積・分類・機能の検討が行なわれてきた。その意味するところは、武器・生産具という実用品説を経て、現在では祭祀にかかるものとしてとらえられるのが一般である。石棒類とした場合、それらの形態は時期的にも地域的にも一様ではなく、それらの形成過程にはいくつかの問題が含まれているようでもある。また、石棒類は、特にその断面形状から、石棒・石刀・石劍に分類されるが、それらの中間形態もあり、不明瞭な場合も多い。ただし、後期後半から晩期にかけて、石棒は小形化する傾向が生じてくるとともに、石劍・石刀と称される扁平な形状を呈するようになる、というのが1つの見方である。つまり石棒の小形化、扁平化したもののが石劍・石刀というとらえ方である。いずれにせよ石劍は石棒研究の流れの中に位置づけられるものである。

ところで、昭和55年に調査の行なわれた金生遺跡からも、石劍に分類される石製品がいくつか出土している。これらは現在整理中であるが、他遺跡における類例をいくつか集めたところ、出土状態にいくつかの類型が見い出せそうな様子である。そこで、主に出土状態から石劍の性格に触れてみようとした訳である。ここでは、従来より分類されている断面形状「菱形」「横円」のもので両刃状の側面をなす形態のものを「石劍」とし、中部、関東を中心に取り扱うこととする。

### 2. 研究史

「石劍」という名称は、すでに江戸末期、慶応2年の栗田寛「葬礼私考附録」なる書物にしるされている。<sup>(1)</sup>もっとも、越後、常陸などから出土したとされるこれらは、図からみる限り「石棒」と見なされるものであり、所謂「劍の形」をしたものではない。その後、明治17年、神田孝平氏による「Notes of Ancient Stone Implements &c of Japan」<sup>(2)</sup>には劍の形をした石製品が2点程図示されているが、繩文時代の遺物かどうか疑わしい。むしろ4つのタイプに分類された雷槌（石

棒) 中に、本稿で扱うような「石劍」が含まれているようである。

その後、明治19年、20年と若林勝邦氏による石棒に関する集収、分類作業が続き、これらの中(3)に「石劍」なる名称が用いられているが、その具体例は不明である。しかし石棒と並び称されていることから、それぞれを分類する特徴はあったはずである。これについて、それらを一定の規準のもとに分類したのは、明治29年佐藤伝蔵氏である。氏は、断面形状から楔形・椿円形のものを石劍、円形に近いものを石棒とし、亀ヶ岡出土の石棒、石劍類の分類を行なったが、実際は区別の困難なものが多いとされた。元来、断面形状に注目されたのは羽柴雄輔氏で、明治21年のこと(4)である。ここでは、石劍という名称は用いられていないが、精製・粗製に分類された石棒のうち、前者には断面形状円あるいは楕円、更には扁平のものがあり、片刃・両刃の刃形のものも認められるとした。現在言うところの石棒、石劍、石刀を含んでいることになる。このように、明治の中頃、石棒の研究の中で断面形状から石棒と区別され得る「石劍」という石製品の存在が注目され始めたことになる。

(5) その後、大野雲外氏、鳥居龍藏氏による地域性に立った石縄の分類の中で、一層石劍の位置づけが明確になる。特に鳥居氏は「歴史」中で、かつて羽柴氏により行なわれた石棒の粗製、精製分類を更に具体的にし、両者の石材の違いも含め精製石棒の1つたる石劍の分布域をも問題視され、更に用途の検討まで行なっている。かような過程を経て、昭和8年、八幡一郎氏は石棒系統の石製品の3つの分類を行なった。(6) ①断面正円乃至楕円形の棒状石器……石棒、②断面楕円或は菱形にして、先端尖るか或は両側縁に鈍い刃の附く劍状石器……石劍、③断面卵形或は扁平板状で一側縁に刃の附く刀様石器……石刀、という分類である。弥生時代の「石劍」が明らかに金属器を模倣しているのに対して、縄文時代の「石劍」は、機能にもとづいた名称ではなく、むしろ劍の形状をした石製品という意味合いのものである。以後、大略かのような分類基準で検討が行なわれているが、これらの石製品の展開については、いくつかの意見が出された。

小林行雄氏は、「日本考古学概説」で、「精巧な石棒を扁平にした単頭の石劍…(中略)…として発達」というように、石棒から石劍、石刀へと変化していくとされ、むしろ石棒の意義を(7)それらへの発展過程に求められた。吉田格氏もまた同様に、石劍とは小形石棒の扁平化したもので、後期後半から出現、晩期にかけて盛行したものととらえられた。また金子裕之氏も、後期以降小形化する石棒は端部に彫刻が加えられ、晩期には内反りの形をした石刀あるいは石劍と呼ぶ石製品に分化し、亀ヶ岡式では多様な展開をみる、というように同じく石棒からの展開を認められた。<sup>(8)</sup> 以上のように、石劍、石刀は、石棒からの発展過程の中でとらえられているが、同じ石棒からの発達としながらも、山本輝久氏のように、後期後半から晩期に分化した石棒機能の1つが、<sup>(9)</sup> 石劍として表出するという見方もある。

また、石刀に関しては、野村崇氏や福野裕介氏の詳細な研究がある。これらの研究から野村氏の分類するA型、B型については、北日本の晩期中葉を中心として盛行するという性格が把えられているが、その起源については、柏倉亮吉氏による三崎山出土の青銅刀子の検討に代表される大陸起源説や、北海道の前期磨製石器からの系譜等の検討もあり、重要な問題提起がなされて

いる現状である。

次に、石剣の機能に関する研究史を追ってみよう。これについても、やはり石棒研究の中で検討されて来ている。明治41年大野雲外氏は、1号～5号まで分類した石棒石剣のうち、石剣については武器あるいは護身用という実用品、大きな石棒については墓標あるいは宗教上のものと考えられた。<sup>(16)</sup> もとより、粗製石棒のうち軽いものは武器、獵器、威を示す具、重いものは祭器宝物としたのは若林氏であり、精製石棒を武器、粗製石棒を杵とした羽柴氏の意見もあり、これらをもとに、大野氏は石棒、石剣の用途を検討したのであろう。

一方、武器の可能性を残しながらも、「形態華奢」で石質も剥げ易いような片岩が多く用いらされているという性質に注目された鳥居氏は「武器が形式化したり、装飾されたりする過程」から「特殊な階級の人々がこれを誇らかに横たえた」と、象徴としての石剣のあり方を指摘されたのである。<sup>(17)</sup> 以後、小林行雄氏による「集団の統率者のシンボル」「儀礼的な宝器」、吉田格氏による「信仰あるいは儀仗」といった非実用的な石製品という機能に収束するようである。<sup>(18)</sup>

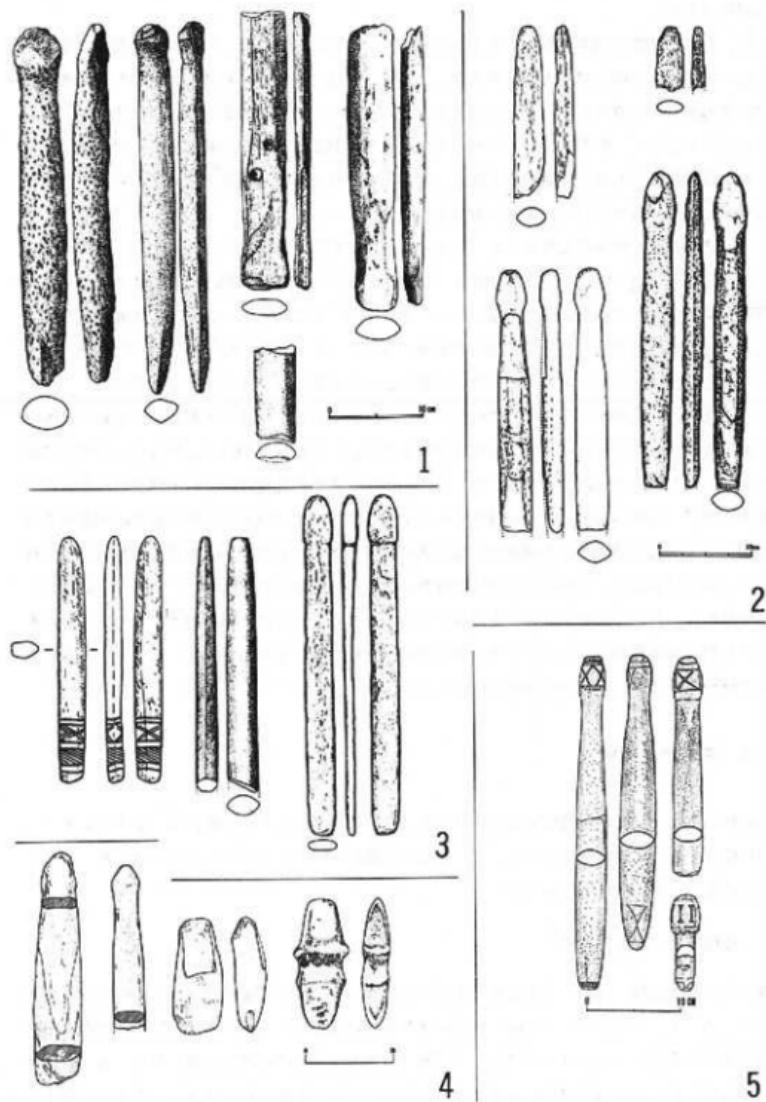
以上のように、石棒研究の流れの中に位置づけられ、それなりに注目されて来た石剣ではあるが、出土状況から検討されるといった例は意外と少ない。それは、やはり、明確な出土状況の記録が少ないとによるものであろう。但し、小山市乙女不動原北浦遺跡での土壙墓とみなされる遺構から完形の石剣が出土している例にもみるように、徐々にではあるが出土状況の明確な資料も増加しつつある。特にこの北浦遺跡では住居や遺跡全体からも出土しており、それらの出土状況から、福田定信氏は、①所有者と同時に埋葬、②欠損、不要品の集落内への廻棄、③破壊あるいは焼かれる、といった重要な観察を行なっている。このような近年の蓄積されつつある資料を中心に石剣の性格を検討するとともに、研究史にあらわれた、石棒が小形化、扁平化する背景の一端に触れてみたいというのが小稿の目的である。

### 3. 石剣の出土状況

これについては、特定の遺構にはかわらず、包含層中から出土する例が多いようであるが、住居に伴うと見なされる例を始めとして、配石や土壙から出土する場合も知られている。ここでは、このような例を整理してみたい。

#### (1) 住居内から出土する例

権川市高井東遺跡では、安行Ⅱ式期とされる13号住居及び安行Ⅲa式期の10号住居Aから石剣が出土している。<sup>(20)</sup> まず13号住居では、断面形状が橢円に近い小形石棒の完形品2点とともに石剣破損品3点が出土している(第1図1)。石剣は扁平で、2点には柄を意識したかのような基部が作られている。いずれも緑泥片岩製である。これらは住居床面からではなく、覆土の3層中から一定レベルの水平状態で出土しているとのことである。10号住居Aでは、やはり覆土の1層から3点、2層から1点出土している。いずれも破片で、1点が雲母片岩、他は緑泥片岩である。



第1図 住居址出土の石剣  
 (1. 高井東遺跡13号、2. なすな原遺跡158・159号、3. なすな原遺跡123号、  
 4. 奈良縣戸遺跡3号、5. 貝の花貝塚12号)

安行Ⅱ式、Ⅲa式期ともに3軒ずつの住居が発見されているが、それぞれ1軒ずつから石剣、石棒がまとまって出土したことになる。このことから笠森健一氏は、集落内における特定の住居内覆土に配置された「一定の石剣と石棒の同一な祭式」を想定している。<sup>(34)</sup>同時に、各グリッド中の包含層や各構造内から多くの破片が出土していることに関して、別の「祭式」も示唆され、出土状態にもとづく重要な指摘を行った。

このほか、東京都下沼部貝塚2号住居址や桐生市千綱谷戸遺跡4号住居址などからも覆土中から出土している。下沼部2号は晚期前半の住居で、石剣破片2、片岩製の石剣状石製品（長さ40cm）<sup>(25)</sup>1点がみられる。千綱谷戸4号からは、写真図版に石剣とみられる完形品が1点載せられているが詳細は不明である。尚、この住居からは、シカ及びイノシシの焼けた獸骨が多量に出土しており、注目すべきである。そのほか、出土状況は不明であるが、小山市乙女不動原北浦遺跡のJ-9号住居からは、断面菱形を呈する石剣と見なされる長さ39.8cmのやや大形の完形品1点が<sup>(26)</sup>出土している。

以上は、住居内でも覆土を中心とした例であるが、床面から出土する例も比較的多い。松戸市貝の花貝塚では、<sup>(27)</sup>晚期前半の12号住居内から完形3、破片1の合計4点（第1図5）が出土している。小形の1点を除き他の3本は扁平両刃で、線刻のある有頭のものである点が類似している。出土位置については、完形の2本が床面、小形石棒様のものと破損品とがその上の2層とされる。同一タイプのものが3点も出土していることは、この住居の性格の一端をあらわしていると見なされよう。

大宮市東北原遺跡からは、晚期前葉と見なされる住居の床面から完形品1点が出土している。<sup>(28)</sup>緑泥片岩製の扁平両刃で、柄部が明瞭に作り出されているものである。同じく床面からは、著名な亀形土製品も出土している。他に覆土中から石剣片2点が出土している。同じ大宮市内には奈良瀬戸遺跡があり、この安行Ⅲc式期の3号住居内からは、独鉛石の完形品1点とともに（第1図4）石剣の破損品2点が出土している。他に土製勾玉、土製円盤、耳飾等もみられる。住居全体に獸骨片が散在するが、特に北西コーナーからは鹿角、獸骨が顕著であったとされている。<sup>(29)</sup>

町田市なすな原遺跡123号住居では、石刀1、石剣2が床面直上から出土している。石剣の1点が破損品であるが、他は完形である（第1図3）。硬玉1、香炉型土器などの特徴的な遺物がみられるほか、石鐵も7点と多い。本址は晚期前半期に属し、発見された10数軒のはば同時期の住居のうちでは最も南西の端に位置している。これとは対称的に、北東端に位置する120号住居からは完形の石刀1点が出土しており、両住居の集落内における位置関係も問題になるところである。また、158・159号住居は切り合った住居であり明確に分離することは出来ないが、ここからも4点の石剣が出土している（第1図2）。内1点は有頭で断面楔円を呈する石棒に近い形状のもので、ピット際の床面から出土している。石質は1点を除き、緑泥片岩である。他に玉2、岩版1、石鐵11、耳飾4、磨製石斧5などがみられる。焼けた獸骨片も多い。晚期前半の住居である。<sup>(30)</sup>

以上、関東地方を中心とした出土例ではあるが、いくつかの特徴を導き出すことが出来る。ま

す出土位置に関しては 3 つの状況が認められた。

- ①床面あるいは床面直上から出土
  - ②覆土中の一定のレベルにいくつかまとめて出土
  - ③②以外の状況で覆土中から出土
- ①に関しては、東北原遺跡の亀形土製品、なすな原123号の香炉型土器や硬玉製小玉、奈良瀬戸3号の独鉛石、土製勾玉など特殊な伴出遺物もあり、石劍の意味もこれらの遺物とのかかわりから検討する必要もある。同時に、貝の花12号では完形2点、なすな原123号では石刀1、石劍1、などにみるよう、完形品がセットで出土する場合もある。また1点にしても、東北原例のように完形品が中心となり、たとえ破損品にしても奈良瀬戸例にみるような、小破片ではなく比較的原形をとどめた個体であることも注目すべきであろう。

②については、高井東13号がその代表である。ここでも完形及びそれに近い大破片が水平状態で出土したもので、やはり一種のセットと見なされよう。覆土中だからといって単に廃棄されたものではなく、笹森氏の言うように特定の意味を考えるべきであろう。高井東10号Aも同様の例であろうし、千鶴谷戸4号、下沼部2号も、このような状況なのかもしれない。

③については、小破片が出土しているなすな原134号・150号・154号等が該当すると思われ、実際には晩期の住居に関する最も一般的な出土のし方なのかもしれない。後述するが、晩期包含層中から出土する状況同様、廃棄されたものである可能性が高いものである。

以上の石劍の出土に関する3つのあり方は、それぞれ石劍機能のあり方にかかる大きな要素と考えられるものである。ところで、以上のような出土例のみられる住居の時期は、高井東13号の安行Ⅱ式期が最も古く、奈良瀬戸3号の安行Ⅲc式、乙女不動原北浦J-9号の安行Ⅲd式期等が新しい部類に入るものである。こうしてみると、大きく後期後葉から晩期前半の時期が中心となるのであろうか。また、石劍のタイプについては、東北原例のような柄部が意識される形状のものと、貝の花12号例のような、石棒頭部が残る形状のものとが認められ、石劍の発達過程に関して検討すべき問題があると言える。

## (2) 土壙から出土する例

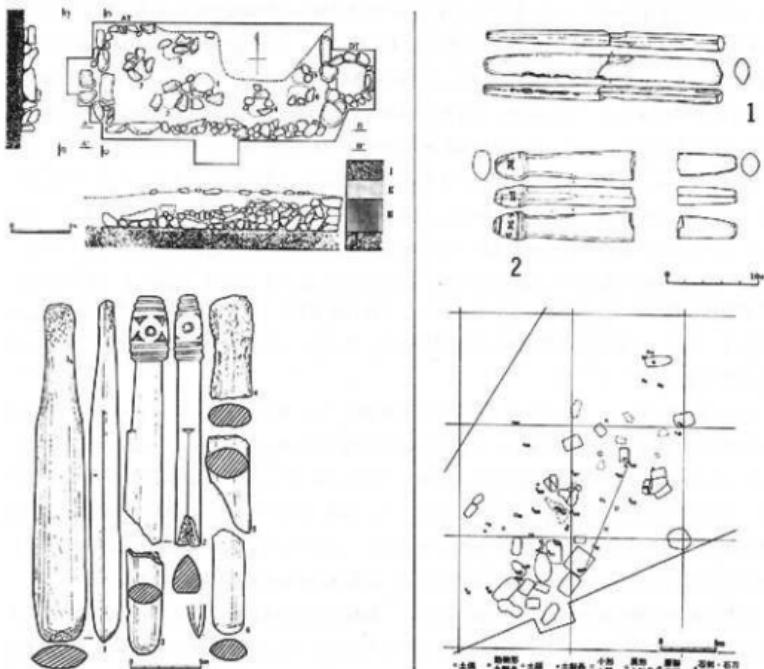
小山市乙女不動原北浦遺跡からは住居や包含層中から石劍が出土している。このうち、No.2土壙墓と称される長軸200cm、短軸88cm、深さ30cmの長方形を呈する土壙中から出土した例は注目すべきである。石劍は長さ25cm程の完形品で、先端に線刻、基部が柄状につくられた縁泥片岩製のものである。長軸上の北西壁寄りの底面から出土したもので、副葬品と見なされるものである。長軸上、石劍とは反対側の位置に掘り込みがあり、そこからは、小形瘤形土器の入る深鉢形土器も出土している。この小形の壺中からは骨粉が検出されている。この石劍例は、墓壙に伴う数少ない例とも言えよう。似たような状況は、石刀に関してではあるが、北海道札苅遺跡の42号土壙に認められる<sup>(32)</sup>。また、乙女不動原北浦のNo.11号土壙墓では石棒の破損品が出土している。No.2号の時期は晩期前半であろう。

なすな原遺跡413号土壤では、上面に配石があり、この配石中から石棒とともに石劍片が出土している。但し、これらは土壤と時期が異なるとされており、乙女不動原北浦例とは様相が異なるものである。

いずれにせよ、乙女不動原北浦例のように、完形の石劍が配石を伴わない墓壙と見なされる遺構から出土する例は少なく貴重な資料である。

### (3) 配石遺構から出土する例

配石遺構の機能は決して単純ではないが、そのうちの墓とみられる施設から石劍の出土する例がいくつか報告されている。まず、伊那市野口遺跡では、 $4.6\text{ m} \times 2.5\text{ m}$ の堅穴式石積と称される遺構とその上部を覆う7基ないし9基の配石とが発見されている(第2図1)。各配石下からは7個体以上の焼けた人骨が出土しており、林茂樹氏は「石櫛合葬」と表現されている。<sup>(35)</sup> 遺物の大部分は、これら人骨の上もしくは側邊から出土しており、磨石8、凹石2、石皿4、石鍬1、石鎌16、土製耳栓1、壺形土器1、壺形土器破片2、壺形土器破片などとともに石刀1、石棒4、



第2図-1. 野口遺跡

第2図-2. 新堂遺跡

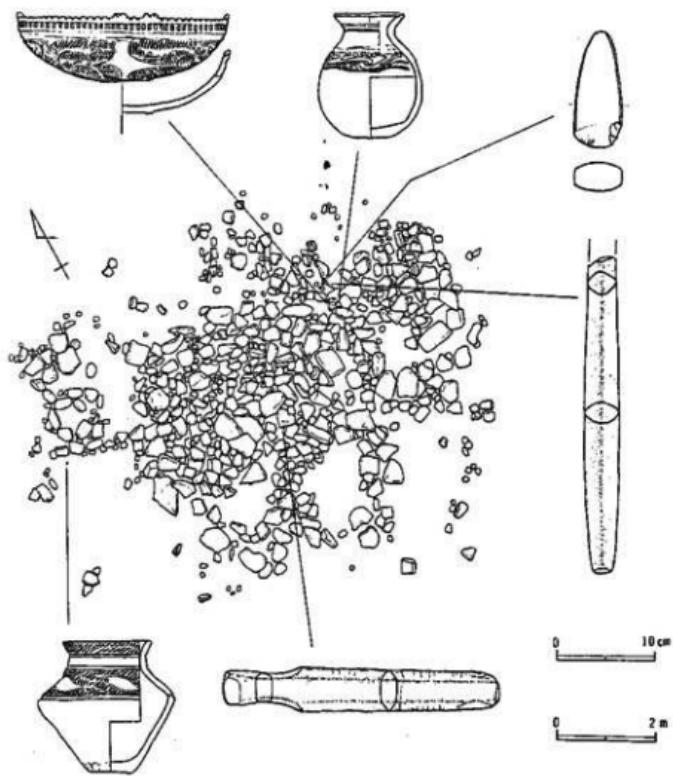
石劍4がみられる。石劍は、1本が柄部の作られた扁平両刃の完形品であるが、他は小破片である。石棒は大形のものと報告されている。なお、土器を始めとして遺物の多くが破損品であることから、林茂樹氏は、意図的に破壊された副葬品とみなしている。この中で1点ながら完形の石劍がみられることは注目すべきである。これが副葬品であるならば、少なくとも破損品と完形品という2つの副葬のしが考えられるからである。あるいは、副葬以外の機能を考えるべきなのであろうか、いずれ検討せねばならない。時期は晩期前半である。<sup>(36)</sup>

人骨の出土はないが、配石墓と報告されている多摩市新堂遺跡の石劍はすべて破損品である。<sup>(37)</sup> 配石墓に伴う副葬品であるかどうかは明らかではないが、5号配石墓の覆土、18号配石墓横から出土したものは、接合するものである（第2図2-1）。これら以外にも、配石墓の上面やその付近から破片が出土しているが、遺構に伴うものは少ないようである。これら石劍の出土は、石刀、石棒と合せて、配石墓の密集するいくつかのブロック間に散在する傾向が認められる（第2図2）。時期は安行Ⅲc式期を中心とする後期後半～晩期前半期とされている。

一方、完形の石劍が出土する例には山梨県金生遺跡がある。ここからは写真1-2～4にみるような完形の石劍が出土している。<sup>(38)</sup> 2、3については遺構への帰属は今のところ不明であり今後の検討を要するが、4は5号配石から出土したものであり、第3図に示したとおり扁平両刃で、基部は柄の如く、握り易く作られている。緑色片岩製のものである。ちなみに1は、断面形状楔形の石刀破損品である。ところで、5号配石の概略及び出土遺物の一部は第3図及び写真2、3に示したとおりである。ここからは磨製石斧を枕にした状態で、基部を欠する緑色片岩製の石劍も出土している。他に、ほぼ完形の皿形土器1、完形の壺形土器2点も出土している。但し壺の1つは第15号石組に伴うものかもしれない。図示したもの以外にも、碗形や高杯形土器なども出土している。この配石は、金生集落内でも住居群の北側に位置している。平面の状況からみて、いくつかの配石墓が集まっているという考え方もある。そうした場合、図示した土器や石器類を副葬品と見なすことは可能であろう。但し、これらは必ずしも墓の内側から出土したものとは限らず、外側や、石を積む際に置かれた場合もあり得よう。いずれにせよ、野口遺跡の状況とは若干異なるのかもしれない。

その他の例ではどうであろうか。長野県大明神遺跡では、抜歯の認められる焼けた人骨10例以上が出土した集石状の遺構がある。<sup>(39)</sup> ここからは、発掘調査以前の分も合せて20点余りの石劍、石刀、石棒が出土している。石劍に関する詳細は不明であるが、いずれも破片のようである。報告書の図からすると片刃のいわゆる石刀が目立つが、石劍の基部（柄部）の破片も認められる。石鐵70点余、石斧、石冠等の石器類や多くの土器片も出土している。2～4m程度の集石の重複したものとされているが、配石墓の可能性がある。後期後半～晩期前半の時期であろう。

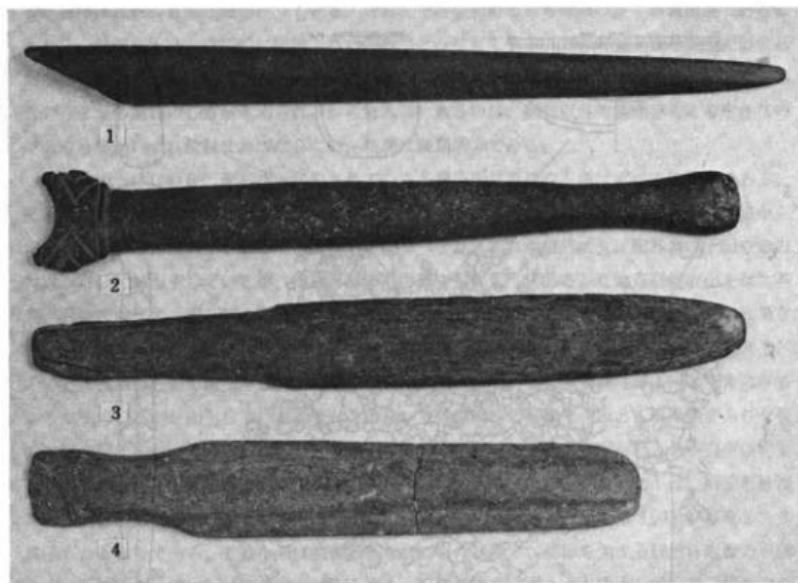
山梨県長坂上条遺跡出土の2点も破片である。粘板岩製及び緑泥片岩製のもので、後者は火を受け赤化している。焼けた人骨片も出土しているとのことであるが、石劍との関係は不明である。これら遺物の多くは「自然石の集塊」の付近や間から出土したとされており、恐らく配石遺構からの出土であろう。墓かどうかは不明である。後期後半～晩期が主体である。



第3図 金生遺跡5号配石と出土遺物

また、長野県離山遺跡の配石中からは10点程の石剣片<sup>(41)</sup>が出土している。いずれも小片であり、他に大小の石棒が16点出土しているが、これも破損品ばかりである。墓というよりも、祭祀にかかる配石と考えられている。後期後半を中心とした、後期中期～晩期の所産である。

こうしてみると、配石墓を含めて、配石遺構からの出土は破損品が多いようである。これらの破損品は、遺構へ特に配置するといった性格のものではなく、不規則に出土するというような状況であろう。一方、特殊な墓とみられる野口遺跡や、配石墓の集合体の可能性ある金生5号配石のように、完形あるいはそれに近いものが出土する例もある。従って、配石のうちでも、特に墓



1 金生遺跡の石剣・石刀



2 金生遺跡 5号配石



3 出土状況

に関するものについては、完形あるいはそれに類するものを副葬ないし供えるといったことが行なわれたのであろう。但し、野口例からもみるように、破片類も多く出土していることから、破損品の意味も同時に考えねばならない。

#### (4) 特定の遺構とは関係なく出土する場合

実際このような出土例が最も多いようであり、先に触れた諸遺跡でも遺構外から出土している。<sup>(42)</sup> ここではそれらも含め整理してみたい。まず市原市西広貝塚では、SN 561となづけられた23m×13mを測る範囲の晩期中葉を中心とした包含層から5片程が出土している(第4図1)。またE 4区晩期包含層という円形に並ぶ直径1~1.5mのピットや焼土の入る小穴等から構成される遺構の上部に形成された包含層からは10数片が出土している(第4図2)。そのほか各グリッド包含層中から多くの破片が出土している(第4図3)。以上の石剣はすべて破片で、特に小破片が多いことは注意が必要であろう。石質は粘板岩が最も多く、次いで緑泥片岩である。

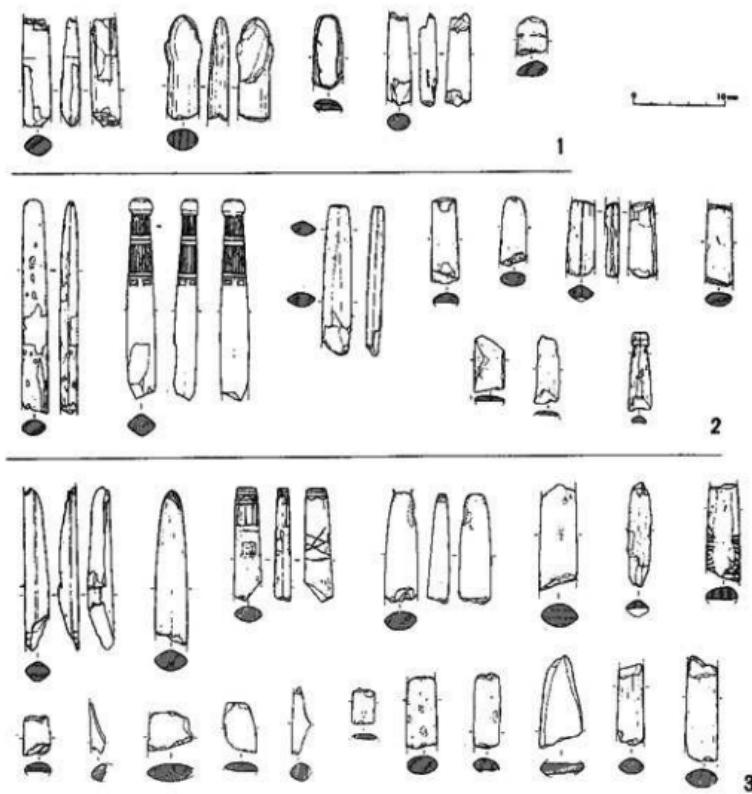
貝の花貝塚でも、すでに検討した住居址以外に、晩期の黒色土包含層地点から破片が出土している。

千葉市加曾利南貝塚では、貝層部から6点、貝層の内側から5点が出土している。<sup>(43)</sup> いずれも破片であり、緑泥片岩と粘板岩とが主体である。石棒と合せて貝層部13、内側15ということであり、出土位置に特定の場はない。しかし、貝層部分出土のものについても、貝層の上ないし下部から出土しており特に貝層との関係は認められないことから、石棒や独結石も含めて後藤和民氏は、遺構に伴わない点とともに「この石製品は貝層中に投棄又は遺棄されるべき特質のものではなかった」と指摘されている。但し、特に東京湾沿岸において、後期後半以降貝層の形成は縮少し、晩期にいたると西広貝塚のように歯骨は出土するものの貝層の形成は殆んどみられなくなるという傾向を考慮すると、むしろこの点に石剣と貝層との結び付きの弱さを求めるこも出来よう。

内陸部の遺跡の状況はどうであろうか。岩槻市黒谷田端前遺跡では石棒とみられるもの数点を含め、20点余りが出土している。<sup>(44)</sup> 晩期包含層を中心に出土したもので、完形ではなく小破片が大半を占める。このうち最も原形をとどめる1点は、端部を欠いているため、石棒様の頭部が付くのか、柄状に作り出されているのかは不明である。

桐生市千綱谷戸遺跡では、1977年の報告で先述した4号住居の完形品以外に16点、1978年報告では焼けた破片1点を含む数点がトレンチや石塚から出土している。<sup>(45)</sup> また、同じく先述した町田市なすな原遺跡でも、包含層中から破片10数点が出土している。殆んどが緑泥片岩製である。山梨県今生遺跡でも、最終的な数は今のところ不明であるが、石剣、石棒、石刀等合せて50点程出土している。多くは破損品で、焼けたものも多い。

以上、特定の遺構に伴わずに出土する石剣の量は多く、同時に破損品が多いという傾向をつかむことが出来る。石刀、石棒の類も同じ傾向で出土し、破片のため分類が困難な場合も多く、これら石製品の性格を検討する上で大きな要點となる。



第4図 西広貝塚出土石剣

#### 4 石剣の性格

前項で整理した出土状況から、石剣の性格を検討してみる。

住居から出土する状況には3つのあり方が認められたが、まず床面あるいは直上から出土する例を検討してみよう。

なすな原遺跡からは、15軒の晩期前半に属する住居が発掘されている。集落の全体が調査された訳ではないが、発掘区内でみる限り中央に墓壙群をはさみ、その東西に2群の住居がまとまる

という構造にある。未調査区に住居群があるとすれば、中央の墓壙群をとり囲む環状あるいは弧状の集落ということも考えられる。いずれにせよ現状は西10軒、東5軒で、石剣の出土する123号及び158・159号住居はこのうちの西群にある。特に123号は西群でも最も西南端に位置している。東群には床面から石剣を出す住居はないが、120号住居からは完形の石刀が1本出土している。この120号は東群の最も東端に位置している。つまり、東西両群の住居群のうち、両端の住居から柄部に文様のある似かよった石刀が出土しており、このうち西群の123号からは完形及び一部を欠損する石剣が出土しているのである。貝の花、奈良瀬戸では晚期の住居は1軒しか調査されていないためかのような点は不明であるが、少なくともなすな原の場合、石剣を出土するのは、石刀を出すものとともに特定の住居とみることができる。

次に、このような石剣を出す住居からの他の遺物をみてみよう。なすな原の場合、123号住居では完形の香炉形土器、硬玉製の玉なども出土している。石製の玉は、晚期では158・159号住居でしか出土していない。但し、これらの遺物についての詳しい出土位置は不明であるため、必ずしもこれらが住居に伴うものであるかどうかは不明である。しかし、少なくとも他の住居にはない特殊性を認めることが出来る。また、各住居とも主に覆土から焼獸骨片が出土しているが、特に石刀を出した120号では炉盤に多く、154号では鹿角分岐が床面上5cmから出土している。この154号は焼土、炭化材があることから焼失したものとされている。また、L6ビット群という遺構中のビットからは水銀朱の塗られた石刀が出土している。こうしてみると、焼獸骨と何らかの関係がありそうで、しかも赤彩の施された石刀とは、やはり日常一般の道具とは考えられないし、その石刀や他の特殊な遺物と関連を有しながら、特定の住居から出土するという石剣もまた、非日常的な用途にあったと見なすのが妥当であろう。この点、貝の花12号住居の石剣のセット、奈良瀬戸3号の独鉛石、東北原の亀形土製品の伴出などの諸例にも共通する状況である。以上のような出土状況にある石剣は、研究史に見るような非実用的な石製品という点に帰結することは確かであろう。その内容についてはまだ今後の研究に俟たねばならないが、少なくとも、集落内の特定の住居で、石剣を媒体とした何らかの祭祀が行なわれていたという指摘はできよう。

次に、高井東例のような覆土の同一層位からまとまって出土する場合も、やはり、特定の廐棄住居で行なわれた祭祀と見ることが出来る。但し、廐棄された住居が祭祀に利用されたのか、廐棄に伴う祭祀なのか、その辺は不明である。いずれにせよ、単に捨てられたという状況ではなさそうである。

住居内でのあり方の3番目、つまり覆土から破片が出土するといった状況は、実は特定の遺構とは関係なく、遺跡全体から破片で出土するという状況に共通するものであろう。石棒も含めて、最終的に破壊され時には火に投ぜられるという指摘<sup>(40)</sup>とおり破片で出土する石剣もまた多い。前項で挙げた西広の例に限らず、岩手県戸内遺跡、滋賀里遺跡など近畿以東に共通する出土状況でもある。祭りの終了時に破壊されるのか、あるいは破壊され撒き散らされることに意味があるのか、その点はよくわからない。配石遺構から出土する石皿や石棒の破片を、故意に破壊され置かれたものと把える高山純氏の指摘<sup>(41)</sup>も重要であり、送葬儀礼に伴う破壊行為以外にもその意義を考える

えねばならない。破壊行為自体は、例えば土偶、獸骨にも認めることが可能であり、実に検討の余地がある。

また、下沼部、乙女不動原北浦、千綱谷戸、長坂上条などでは、火を受けた石劍の例が報告されている。金生遺跡出土の石劍片にも焼けたものが多い。前に筆者は、焼けた獸骨について、火で浄化し撒くといった狩猟儀礼にかかわる行為の可能性を考えたことがある。<sup>(50)</sup>特に後晩期には火にかかわる祭祀が顕著であり、火を媒体とした祭りの一端に、かような石劍等もかかわりあるのかかもしれない。つまり、破壊したあと、一部のものは火で浄化し、再生を願うといった祈りが考えられないであろうか。

次に、配石でも特に墓に関する遺構から出土する石劍を検討してみる。ここでも、①完形あるいはそれに近い大形の破損品、②小さな破片、という2つの状況が認められる。まず①は少ないながらも、非常に特徴的な出土状況にあるといえる。複数の焼人骨が出土した野口遺跡、配石墓の集合体の可能性もある金生5号配石からみて、副葬品としての石劍を考えることができる。特に磨製石斧と組み合った出土状況は注目すべきである。地域的に離れるが、北海道千歳市美々4遺跡や美沢1遺跡など美沢川流域に位置する後期後半とされる土壙墓中からは、石棒と磨製石斧<sup>(51)</sup>とが出土する例がある。この地域では、この2種が同時にみられる以外にも、石棒あるいは石斧<sup>(52)</sup>が副葬される例が多い。磨製石斧に限れば、中国新石器時代の遺跡にも類例を認めることが出来る。これらの例からみると、磨製石斧を副葬する例は広く、北海道の土壙墓にみる石棒と石斧との組み合せをも参考にすると、石斧と石劍との組み合せもまた副葬品としてとらえられることになろう。同時に、石斧を伴わない石劍だけの場合もやはり副葬品とみなすことができる。但し、野口例では複数の埋葬にかかわるものであり、金生でも集合体としての墓に伴なう可能性があることから、個人所有としての石棒、石斧などの副葬品ととらえられる北海道の土壙墓でのあり方とは様相が若干異なっている。同時に、野口、金生とも晩期前葉という時期にあって、中部地方や関東地方における墓としてはやや特殊なむきもあり、ここから出土する石劍も、単に個人の副葬品とする以上の意味とともに、そこに葬られた者の生前の特殊な立場を意味するものなのかもしれない。

ところで、配石を伴わない墓壙とみられる遺構で、完形の石劍が出土している例に、乙女不動原北浦のNo2土壙墓がある。所有者と同時に埋葬されたと報告者によりとらえられている数少ない例の1つであるが、前にも述べた通り、北海道での石棒や石刀の出土する土壙に共通するような例である。今後かような例が増加すれば、副葬品としての石劍のあり方もより明確なものとなるであろう。

一方、新堂遺跡にみられるような、破片が墓域全体から出土するような例は、先に述べた、破壊して撒き散らすといった行為に共通するものであろう。18号配石墓東南角に近接して立った状態で出土した例については副葬という見方もあるが、検討を要しよう。但し、野口例のように、破損品でも副葬品とみなされる場合もある。破損してその一部は副葬し、他は撒き散らすといったことが行なわれたのかもしれない。その背景には、死者が生前に使用していたものを破壊する

といったことと同時に、前述したような、壊して撒き散らすことに再生を願う意味があったのかもしれない。大明神遺跡や離山遺跡での配石から出土する例も、これに該当するのではなかろうか。

以上のように、石劍を出土状態からみた場合、①祭祀が行なわれた場に置かれる、②墓に副葬される、③住居、配石、墓域等を含め、集落全体に撒き散らされる、といった、3つの状況に大きく把えられることになる。石劍自体のもつ詳細な機能及び祭祀の細かい内容については速断できぬが、少なくとも前述したような再生を願う祈りもその中に含まれると思われるるのである。

## 5. 石劍の流れ

「断面楕円或は菱形にして、先端尖るか或は両側縁に鈍い刃の附く劍様石器」を石劍の基調としてみた時、その発生、発達については注意すべきいくつかの点がある。まず、その成立については、石棒からの展開が最も一般的な見方としてとらえられている。中期以来の展開の中で、後期後半から晩期にかけて、屋内と屋外とに機能分化した石棒の一群が石劍、石刀であるとした山本暉久氏の見解は説得力あるものである。<sup>(46)</sup> 後期以降石棒が小形化扁平化し、石劍、石刀として出現するという見方は、すでに小林行雄氏、吉田格氏らによりなされている。山本氏の意見はこれに加え、更に個別および集団に関連したそれぞれの祭祀の展開といった点からとらえられたもので、後期後半に至り小形扁平化した石棒は屋内祭祀に、中期以来の大形石棒を屋外祭祀にそれぞれ関連したとする、石棒の機能分化をとらえられた訳である。これについては、すでにみた通り住居から石劍及び小形の石棒が同時に出土する場合もあること、遺跡全体から石劍、石棒が同じように破片で出土すること等から、厳密に小形石棒と石劍との機能の差を認めることは出来ず、機能論からみれば山本氏の指摘は正しいものであろう。但し、石棒が小形扁平化したものが石劍であるという点、若干問題が残る。なぜ石棒が小形扁平化し、「石劍」という名称にふさわしい形状となって出現するのであろうか。石劍の石質は、地域によりその比率が異なるが、緑泥片岩及び粘板岩が主流を占める。特に片岩類はその性質から、扁平な形状がつくりやすい。もちろん大形石棒にもこれらの石材も用いられているが、そこで多くみられる安山岩類の石材は、石劍では非常に少なく、その形状を作り出すのに適した石材が用いられることになる。つまり、扁平化し、しかも両側面に刃部がつけられるといった点は、そこに特別の意識が働いていたからではなかろうか。<sup>(47)</sup> 握言すれば、山本氏の言う石棒の機能分化を生ぜしめた要因を考えねばならないことになろう。

前項で挙げた石劍を個別にみると、大きく2つのタイプを認めることが出来る。1つは、貝の花、なすな原等にみられる石棒様の頭部を有するもの、もう1つは、金生、野口のような刃部は扁平で、しかも握ることが意識されたと見なされる「柄」部が作り出されているものである。仮に前者をA型、後者をB型としよう。A型は、他に奈良瀬戸、高井東、加曾利南、西広、新堂等にみられ、B型は野口、金生の他に乙女不動原北浦や、写真からではあるが東北原、それに群馬板

<sup>(49)</sup> 倉等にみることが出来る。地域的な差と同時に機能上の差——例えばB型は副葬として用いられることが多い傾向にあったのかもしれない。但し、現状では資料が少ないため、これらを明確にすることは出来ず問題は残る。ここでは石劍の2つの型の指摘にとどめておく。

ところで、これらの石劍の時期については、前項でみた限り、最も古いものが高井東13号住居出土の安行Ⅱ式期である。ここではA型と同時に、破片ではあるがわずかながら「柄」部を意識したかのような形状のB型のものが出土している。新しくは奈良瀬戸3号住居のA型が安行Ⅲc式期である。他は概ね安行Ⅲa～Ⅲb式期、大洞B～BC式期にあたり、全体として晩期前半が主体となるようである。こうしてみるとA型、B型とも時期的には余り差がない。石棒から石劍へと徐々に変化していくたとえば、B型は、石棒様の頭部を有するA型より後出するはずのものであろう。やはり、B型は石棒とは違った別の意識のもとに製作されたと見ることは出来ないであろうか。

ところで、この問題とは離れるが、石劍と同時に問題視されている石刀の起源についてふれる必要もある。昭和29年、山形県三崎山で発見された青銅刀について柏倉亮吉氏は、中国殷周を上限とし日本の縄文時代晩期を下限とした時期に大陸から渡來したものである可能性を打ち出した<sup>(50)</sup>。更に氏は、かような渡來は青銅鑄造技術の発生をもたらしたものではなく、石を素材とした模倣品の発達をうながしたという重要な見解をも示されたのである。もとより、石刀と金属器との関係はいくつか論ぜられており、特に内反りの石刀については、早く喜田貞吉氏による青森県宇鉄出土の著名な石刀一先秦刀説がある。また、剣の形は石器でも生ずることがあり得るのに対し、刀としての形は石器として自生するものではなく、金属器にしてはじめて出る利器の形態とした小林行雄氏等の指摘もみられた。ここでは弥生文化との関連から説かれたものであるが、いずれにせよ石刀は金属器の形態と無関係ではないという意見のあらわれである。近年ではすでにみた通り、野村崇氏、福野裕介氏らの詳細な研究が行なわれている。特に野村氏は、内反り石刀と青銅刀との関係に注目されると同時に、後期の刀状石器や、仙台湾、三陸に発達する骨刀の系譜にも注意せねばならないという慎重な見解を示されている。内反り石刀の時期は、野村氏によれば東北、北海道を中心とした地域の大洞C<sub>2</sub>式期が中心であり、直刀形式のものになると北日本全体にみられるものの時期的にはやはり大洞C<sub>2</sub>式期が中心となることである。仮りにこれらを金属器の模倣とするならば、晩期中葉ないし後半期に、かような状況をもたらす事態が生じたことになる。但し、長野県野口からは石劍とともに石刀とみなされる破片が出土しており、晩期前半に属すことから、時期的には早まる可能性はある。また、同じ石刀でもなすな原出土の直刀型は、東海から関西地方にかけての晩期前半期に主流となるものとのことで、内反り石刀とは異なる系譜にあるものかもしれない。問題は複雑である。しかし、少なくとも晩期前半期に石刀なる新しい形態の石製品が出現したことは確かであり、その背景に大陸からの影響を考える余地は残されている。

こうした中で、後期後葉に出現し晩期前半期に盛行する石劍についても、特に、それ自体完成された形態と見なされるB型については、石棒から変化したものとする以外に、外的の影響のも

とで形づくられた可能性も残されていよう。その影響が、山本氏の言う石棒機能の分化を生ぜしめたとすることが出来ないであろうか。

かような問題は、石刀、石劍に限らず、他の遺物や遺構からも検討せねばならない。個々の遺物のみならず、文化構成要素全体に関して從来の時期とは異なったある種の画期が認められねばならないからである。いずれにせよ、ここでは、石劍に関して、その生因の1つを検討したにすぎない。

#### 6. おわりに

以上、関東地方、中部地方を中心に、特に出土状況から石劍の性格をとらえ、その成因を若干ながら検討してみた。今後、より広域にわたり資料を集め、地域、時期による分類からその流れを辿ることも必要である。同時に、後晩期文化における石劍の位置づけも大きな問題になるところもあり、今後の資料の増加に期待する点は大である。

最後に、本稿をまとめるにあたり、高山純、大和修、小野正文、中山誠二、田中和彦の諸氏には文献、助言等で大変お世話になった。記して謝意を表する次第である。

#### 註

- 1 斎藤忠 1979 「日本考古学史資料集成」 I 江戸時代 吉川弘文館 P.75
- 2 T・KANDA 1884 「NOTES ON ANCIENT STONE IMPLEMENTS, &c., OF JAPAN」 Plate X, PP. 2~3
- 3 若林勝邦 1886 「石棒の比較研究」『東京人類学会報告』1~8 P.164  
若林勝邦 1886 「石棒の比較に就きて」『東京人類学会報告』2~10 PP.35~36  
若林勝邦 1887 「石棒彙報」『東京人類学会報告』2~15 P.198
- 4 佐藤伝蔵 1896 「陸奥国龟ヶ岡第二回発掘報告」『東京人類学会雑誌』第124号 P.409
- 5 羽柴雄輔 1888 「石棒の用法上篇」『東京人類学会雑誌』第31号 PP.403~404
- 6 大野雲外 1908 「石劍の形式に就て」『東京人類学会雑誌』第263号 PP.164~167
- 7 鳥居龍藏 1924 「東洋史」第1巻 鳥居龍藏全集第3巻所収 PP.93~98
- 8 八幡一郎 1933 「石刀の分布」『人類学雑誌』48~4 P.233
- 9 小林行雄 1951 「日本考古学概説」 P.72
- 10 吉田格 1959 「漁獵文化の展開」『世界考古学大系』I 日本 I PP.104~105
- 11 金子裕之 1982 「縄文時代Ⅲ」『日本の美術』4 PP.26~28
- 12 山本暉久 1983 「石棒」『縄文文化の研究』9 P.176

- 13 野村崇 1978 「北部日本における縄文時代晩期の石刀について」『北海道開拓記念館研究年報』第6号 PP.20~42
- 14 稲野裕介 1979 「亀ヶ岡文化における石劍類の研究—文様に基く分類」『北奥古代文化』11号 PP.10~16
- 稻野裕介 1980 「石劍類に施される刻みについて」『北上市立博物館研究報告』第3号 PP.1~12
- 15 柏倉亮吉 1961 「三崎山出土の青銅刀」『東北考古学』1、PP.1~12
- 16 註6と同じ
- 17 若林勝邦 1887 「日本彫製石棒」『東京人類学会雑誌』第19号 P.321
- 18 註5と同じ
- 19 註7と同じ
- 20 註9と同じ
- 21 註10と同じ
- 22 福田定信 1982 「縄文時代の石器」三沢正善『乙女不動原北浦遺跡』小山市教育委員会 PP.225~231
- 23 埼玉県文化財保護課文化財第二係 1975 「高井東遺跡調査報告書」埼玉県遺跡調査会
- 24 笹森健一 「石劍、石棒」註23と同じ P.147
- 25 下沼部遺跡調査団 1980 「下沼部遺跡」
- 26 桐生市教育委員会 1977 「千櫻谷戸遺跡発掘調査概報」桐生市文化財調査報告第2集
- 27 三沢正善 1982 「乙女不動原北浦遺跡」小山市教育委員会
- 28 八幡一郎 1973 「貝の花貝塚」松戸市教育委員会
- 29 「東北原遺跡」『大宮市史』第1巻 PP.185~204 図版76. 1970
- 30 大宮市教育委員会 1969 「奈良瀬戸遺跡」
- 31 成田勝範、小川忠秋、重久淳一 1984 「なすな原遺跡」No.1地区調査
- 32 註27と同じ
- 33 山田悟郎編 1976 「札茹」北海道開拓記念館
- 34 註31と同じ
- 35 林茂樹、本田秀明 1962 「野口墳墓遺跡調査概況」『伊那路』6~10 PP.1~14  
林茂樹 1983 「野口遺跡」『長野県史』全一巻(三) PP.894~897
- 36 中島庄一、楳生直彦 1981 「新堂遺跡」多摩市教育委員会
- 37 山梨県立考古博物館 1982 「展示概説」 P.15

- 38 新津、八巻、山下、奈良 1981 「八ヶ岳南麓・金生遺跡と縄文晚期の地域的諸問題」  
『どるめん』No29
- 39 橋口昇一 1983 「大明神遺跡」『長野県史』全一巻(三) PP.174~183
- 40 大山柏、竹下次作、井出佐重 1941 「山梨県日野春村長坂上条発掘調査報告」『史前  
学雑誌』13-3 PP.79~107
- 41 藤沢宗平ほか 1972 「雄山遺跡」穗高町教育委員会
- 42 海口宏 1977 『西広貝塚』
- 43 杉原莊介 1976 『加曾利南貝塚』
- 44 横川好富、宮崎朝雄 1976 「黒谷田端前遺跡」 岩槻市遺跡調査会
- 45 桐生市教育委員会 1978 『千網谷戸遺跡発掘調査報告』 桐生市文化財調査報告第3  
集
- 46 註11に同じ
- 47 岩手県埋蔵文化財センター 1982 『蔵内遺跡』岩手県埋蔵文化財センター文化財調査報  
告書第32集
- 48 田辺昭三 1973 『湖西線関係遺跡調査報告書』滋賀県教育委員会
- 49 高山純 1974 「配石遺構についての若干の考察」『大磯・石神台配石遺構発掘報告書』  
PP.62~67
- 50 小野正文 1985 「山梨県駅迎堂遺跡群」「探訪縄文の遺跡」東日本編
- 51 新津健 1985 「縄文時代後晩期における焼けた獸骨について」「日本史の黎明」八幡  
一郎先生頌寿記念考古学論集
- 52 註51に同じ
- 53 北海道教育委員会 1979 『美沢川流域の遺跡群』Ⅲ  
北海道埋蔵文化財センター 1981 『美沢川流域の遺跡群』Ⅳ
- 54 黑龍江省文物考古工作隊 1979-4 「密山新開流遺址」『考古学報』總第55期、  
四川省博物館 1981-4 「巫山大溪遺址第三次発掘」『考古学報』總第63期など
- 55 註11に同じ
- 56 註8に同じ
- 57 註12に同じ
- 58 これについて笠森健一氏は、両者のイメージする「もの」の差異を考えている。  
笠森健一前掲書註24
- 59 八幡一郎編 1959 『世界考古学大系』1 日本I PL 156
- 60 註15に同じ

- 61 喜田貞吉 1926 「奥羽地方におけるアイヌ族の大陸交通は既に先秦時代にあるか」『民族』1—2 PP.82~94
- 62 小林行雄、藤岡謙二郎、中村春壽 1938 「近江坂田郡春照村杉沢遺跡」『考古学』9  
—5 PP.221~235
- 63 註13に同じ
- 64 中山清隆 1984 「石劍・石棒」前掲書註31 所収

# 甲斐における弥生文化の成立

中山 誠二

- |                 |            |
|-----------------|------------|
| 1.はじめに          | 4.土器様相の変遷  |
| 2.研究史           | 5.遺跡の分布と立地 |
| 3.弥生文化波及期の遺跡の検討 | 6.まとめ      |

## 1.はじめに

東日本における弥生文化の波及は、東海地方西部に形成された水神平系条痕文土器の拡散と土着の縄文土器の変容の中で捉えられる。その祖源となる水神平系土器の出現は、尾張、三河地方の縄文時代晩期の土器群から系統的に把握されることが既に明らかにされており、五貫森式—（馬見塚式）—櫻王式—水神平式—岩滑式への変遷過程が定着しつつある。

甲斐においてもこれらの条痕文土器の伝播が弥生文化成立に密接にかかわることは、いくつかの遺跡の中で指摘されてきている。しかし、この土器群が具体的にどのような過程で甲斐地域に受容されていったのか、またそれらの土器群が弥生文化成立にどのように関与するのか、依然として不明な問題が多い。小篠は、甲斐の縄文時代晩期後半から弥生時代中期初頭の土器様相の変化を明らかにし、上記の問題について若干の考察を加えるものである。

## 2.研究史

甲斐における弥生文化成立期の遺跡の記述は、1931年に史前学雑誌に掲載された長坂上条遺跡の報文に初見をみる。<sup>(1)</sup> 同遺跡は、その前年に大山柏、竹下次作、井出佐重の3氏により発掘調査されたもので、調査の結果、縄文時代後・晩期を主体とする土器、石器、土製品や人骨が検出された。大山氏は出土土器を1~6類に分類し、特に4類を東北地方の亀ヶ岡式近似型式、5類を関西系統、6類を保美丘塚に類似する縄文式と弥生式の混合するものとして捉えた。そして、同遺跡を中部山岳地方における「縄文文化と弥生式との接触研究に対する一重要遺跡」として評価した。

その後20年余りを経た1952年、山内清男氏は愛知県吉胡貝塚の報文中において、本巣米倉山遺跡出土土器を吉胡貝塚第2トレンチ出土の「縄文式直後」の土器と併行することを明らかにした。<sup>(2)</sup> この知見は、山内、酒詰仲男、鎌木義昌の3氏がその前年に米倉山遺跡を試掘調査した結果に基づくものである。山内氏の言う「縄文式直後」の上器は、名古屋周辺では遠賀川式と伴出し、

それ以東の三河、遠江、駿河、甲斐、信濃等では遠賀川式を伴わざる型式をなすことが指摘されている。次いで、1957年山本寿々雄氏は、鶴の島遺跡、米倉山B遺跡の概要を示し、縄文時代晚期大洞A～A'式に西志賀系の条痕文土器が伴出する事実に注目した。<sup>(3)</sup>したがって、この1950年代までに、甲斐の弥生文化成立の問題が、東海地方西部の条痕文土器と密接にかかわることが印象づけられている。

1960年代では、鶴の島遺跡、島原遺跡、宝司塚遺跡、米倉山遺跡等で該期資料の蓄積がなされた。そして、これらの資料を基に山本氏は、本県弥生文化成立期の土器群が、東海地方西部の五貫森一樫王一水神平へ移行する過程と対比されるものであるとし、弥生時代中期以前に弥生文化の波及があったことを示唆した。これに対し上野晴朗氏は「山梨県などには弥生前期の遺跡や遺物はなく、縄文晚期に弥生中期が結びついて接触が行なわれるようになった」として、中期以降<sup>(4)</sup>の弥生文化成立論を掲げている。<sup>(5)</sup>その後の長谷川孟氏や山崎金夫氏の記述では、山本説を支持する立場がとられている。

一方、1977年蛭間真一氏は、県北部の八ヶ岳南麓における初期弥生土器について論考を加えた。<sup>(6)</sup>蛭間氏は、北巨摩地方の初期弥生土器が「縄文土器の伝統を強くのこしながらも縄文土器とはちがった手法で条痕文を形成する。すなわち東海地方の直移入という説ではなく、山梨の地方的なものに新しい要素が加わったもの」として捉え、土着の縄文土器との連続性についても言及している。さらに当該地域の初期弥生土器が東海地方に根本を置きながらも、天竜川から諏訪地方に展開する同時期の別要素の影響もその土壤となると考え、弥生文化波及経路についての見通しを明らかにした。この論文は、甲斐の弥生文化成立期の土器様相を明らかにしたばかりでなく、その波及にかかる問題点を一層明確化したのである。

1983年、筆者はその後追加された本県の初期弥生土器について概要を記したが、紙面の関係でその詳細を検討するまでに至らなかった。ここでは、研究史上に残る過去の資料を含めて、再度検討を加えてみたい。

### 3 弥生文化波及期の遺跡の検討

文章では、甲斐弥生文化成立期を前後する縄文時代晚期後半から弥生時代中期初頭までの土器群をI～V群に分類し、各遺跡の中での土器様相を明らかにする。

#### (1) 土器群の分類(第1図)

##### I 群 上 器

工字文土器とそれに伴う土器群で、中部地方佐野Ⅱ式、東北地方大洞C<sub>2</sub>式と一部併行する。

##### 盛 A 類

肩部に並行する付帯文を巡らし、その区画内に沈線による渦巻文、工字文風の文様、列点文などを施す。

### 浅鉢 A 類

肩部が「く」の字状に屈曲し、ほぼ直立する口縁をもつ浅鉢。肩部に長円形付帯文、肩部に沈線による工字文を施す。

### II 群 土 器

西日本の凸帯文系土器を一括する。

#### 壺 B 類

肩部が有段で、直立乃至内傾する口縁をもつ無文壺。口縁下に沈線を巡らす例もある。

#### 壺 C 類

頸部がくびれ、肩部に稜をもつ無文の壺。

#### 深鉢 A 類

口縁部に有刻凸帯を巡らし、その下部に貝殻条痕文を施す深鉢。

#### 深鉢 B 類

肩部が「く」の字状に屈曲し、口縁部が内傾する無文深鉢。

#### 浅鉢 B 類

肩部が「く」の字状に屈曲し、やや内傾する口縁を有する無文浅鉢。

### III 群 土 器

所謂浮線網状文土器とそれに伴出する土器群を一括する。中部地方水 I 式、北関東千綱式、東北地方大洞 A 式に比定される。

#### 壺 D 類

細長い頸部を有する壺で、頸部に浮線網状文を施す。肩下半については不明。

#### 浅鉢 C 類

口縁下に 2 ~ 3 条の平行沈線を巡らす精製の浅鉢。口縁平縁 (C 1) と波状口縁 (C 2) に分けられる。

#### 浅鉢 D 類

口縁下に浮線による変形工字文を施した精製の浅鉢。

#### 浅鉢 E 類

頸部がくびれ、肩部に稜を有する浅鉢。口唇端部および肩部に長円形の凹部を巡らす。

#### 鉢 A 類

口縁部に浮線網状文を施す鉢。

#### 深鉢 C 類

頸部がややくびれ、肩部にわずかに稜をもつ深鉢。口縁下に 2 ~ 5 条の平行沈線を巡らす。<sup>(13)</sup> 肩部下が無文のもの (C 1) と細密条痕文を施すもの (C 2) がある。

#### 深鉢 D 類

I 群	
II 群	
III 群	
IV 群	
V 群	

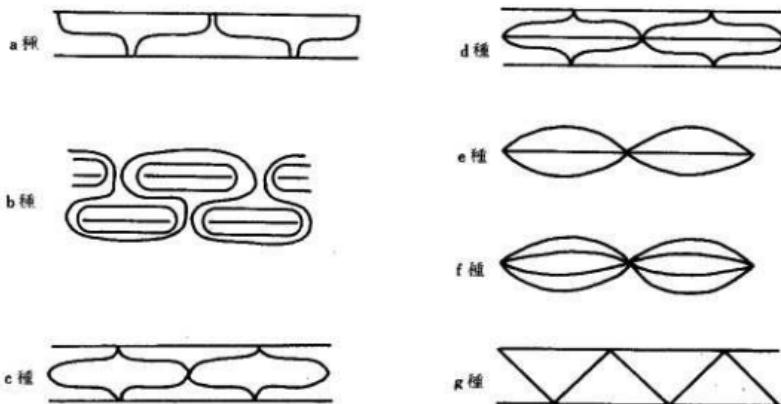
第1図 各群土器の器種別分類

胸部から口縁部にかけてほぼ直立乃至外反する深鉢。頸部のくびれはない。胴部を細密条痕が覆う。

#### 深鉢 E 類

器面にヘラゲズリ等の調整痕のみを残す無文の粗製深鉢。

以上の I 群、II 群土器に施される工字文や変形工字文の文様モチーフは、第2図に示した様に a 種～g 種が認められる。



第2図 工字文・変形工字文の文様モチーフ

#### IV 群 土 器

水神平系条痕文土器およびそれに伴う土器群を一括する。

##### 壺 E 類

口縁に太い凸帯を有する広口壺。胸部は長胴と推定される。凸帯下の施文によって3つに分類される。

- E 1 凸帯下の施文が、斜位又は横位の單一方向の条痕文であるもの。
- E 2 凸帯下の施文が、波状文のもの。
- E 3 凸帯下の施文が、網文のもの。

##### 壺 F 類

器面に条痕文を施す球胴形の壺。頸部は E 類と比べ細く、口縁が外反する。施文によって4つに分類される。

- F 1 縦方向の羽状条痕文を施すもの。
- F 2 横方向の羽状沈線文を施すもの。
- F 3 縦・横の条痕文を交互に施すもの。
- F 4 胴上部に横方向、胴下部に斜方向の条痕文を施すもの。

### 壺 G 類

繩文や撚糸文による文様を施す壺。

### 深鉢 F 類

直立乃至外反する口縁をもち、器面に条痕文を施す深鉢。頸部のくびれはない。条痕文は、斜位、横位、縱位の單一方向によるものが多い。口唇部形態により3つに分けられる。

F 1 平縁のもの。

F 2 口唇に指頭圧痕を巡らすもの。

F 3 口唇にヘラ状工具による刻目をもつもの。

### 深鉢 G 類

口唇に山形小突起を有し、胸部から口縁部へ外反乃至直立する深鉢。器面に条痕文を施す。

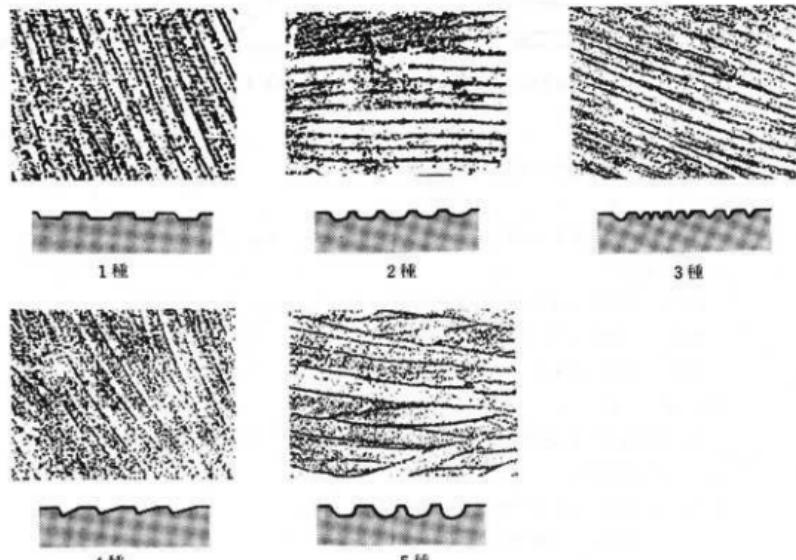
### 深鉢 H 類

口縁部が外反し、肩部にわずかな稜をもつ深鉢。頸部は無文帶で、胸部に条痕文を施す。

### 深鉢 I 類

器面にヘラケズリによる調整痕や擦痕を残す無文の深鉢。

### 壺 A 類



第3図 条痕文の分類

口縁部が外反し、頸部がゆるやかにくびれる条痕文の壺。口唇部形態により3つに分けられる。

- A 1 口唇部に指頭圧痕を施すもの。
- A 2 口唇部にヘラ状工具による刻目を施すもの。
- A 3 口唇部に長円形の凹みを巡らすもの。

#### 塊 A 類

長円形の小型壺。

#### 塊 B 類

口唇に山形小突起を有する。

IV群の指標ともなる条痕文は、詳細に観察すると施用具の違いにより、1種～5種に分類される（第3図）。

- 1種 二枚貝腹縫を用いた貝殻条痕文。条間は一定で、条溝が浅い。
- 2種 クシ状工具による条痕文。条間の幅は一定で、条溝が浅い。
- 3種 植物の枝茎を束ねた簡単な工具による条痕文。<sup>(14)</sup> 条間の幅は不揃いで、条溝が深い。
- 4種 ヘラ状工具による条痕文。条間の幅は不揃いで、条溝断面が「L」字状に切り込む。
- 5種 先端部の丸い棒状工具による条痕文。条溝の幅は広く、溝が深い。

#### V 群 土 器

遠賀川系土器群を一括する。

#### 壺 H 類

肩部に指頭圧痕を有する貼り付け凸帯を巡らす壺。

### (2) 各遺跡の土器様相

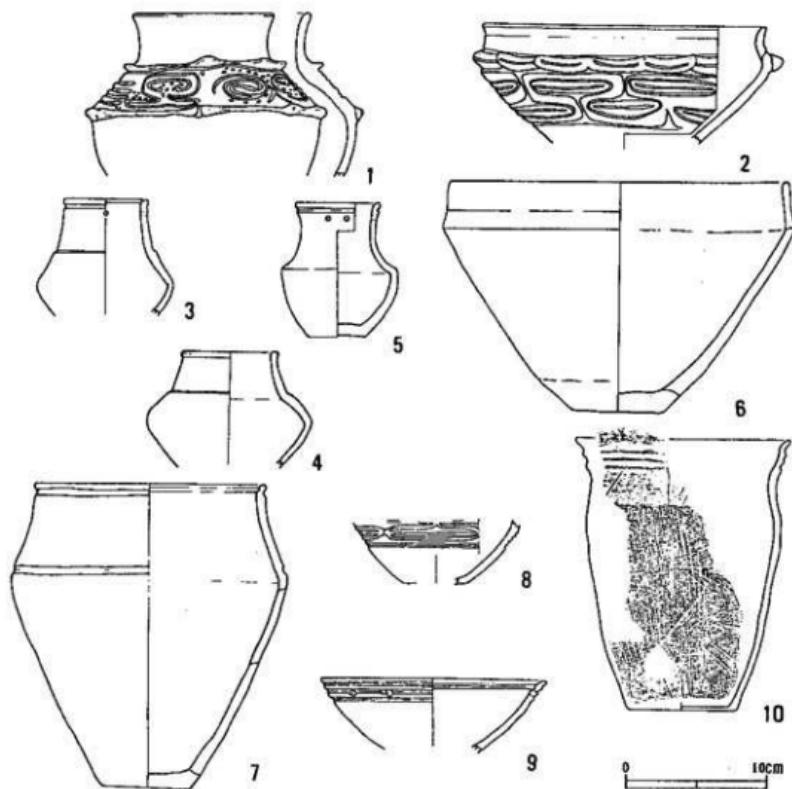
#### 八ヶ岳南麓地域

##### ① 金生 遺 跡（第4図・第5図）

該期に属する資料としてA区2号配石及び17号住居址出土土器が挙げられる。

2号配石遺構とその出土遺物については、新津健氏によって既にこの『研究紀要』Iで論考が加えられている。<sup>(15)</sup> 同遺構出土土器は繩文時代晚期前葉後半～後葉前半にわたる数時期のものが混在するが、新津氏はこれを遺構の性格に起因するものとして捉えた。ここでは、小稿に関係する晚期中葉後半期と後葉前半期のⅠ群～Ⅲ群土器を抽出する（第4図）。

I群土器は、壺A類（1）、浅鉢A類（2）が存在する。3は、沈線による工字文を特徴とし、その間に長円形凹みを施す。この区画内には、長軸方向に1条の沈線が走る。1は、肩部の工字文風文様を重視して本群に含めたが、時期的には晚期中葉前半に遡る可能性もある。II群土器は、壺B類（3・4）、壺C類（5）、浅鉢B類（6）、深鉢B類（7）がある。3～5の壺については、北九州地方の夜臼式に類似することが既に指摘されているが、東海地方西部の該期の

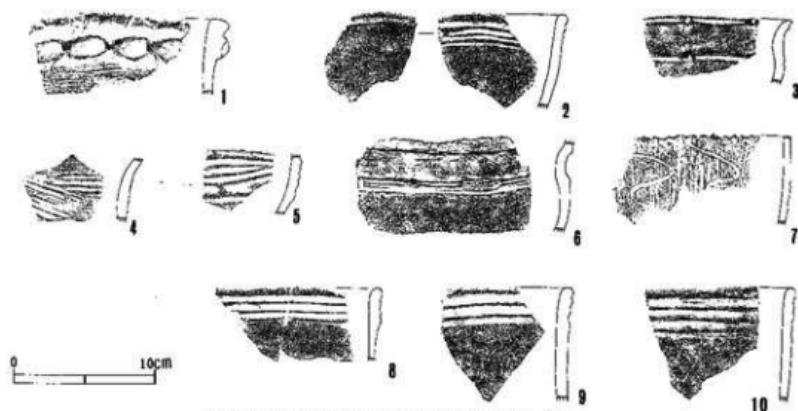


第4図 金生遺跡2号配石出土土器(1/4)

(新津 健 1984より抽出)

遺跡でも類例が存在する。7は、口縁下と肩部に一条の沈線を巡らすが、その形状はそれまでの中部地方の土器には認められないもので、やはり西日本凸帯文土器の影響を強く示している。口縁部が「く」の字状に屈曲する有肩浅鉢(6)にも同様のことが言えよう。Ⅲ群土器は、浅鉢C1類(9)、浅鉢D類(8)、深鉢C2類(10)が認められる。8は、口縁部欠損するが、肩上部に陽刻による△種の変形丁字文を施す。9は、口縁部外面に3条、内面に1条の沈線を巡らし、貫通孔を有する。10は、口肩部に小さな山形突起をもち、頸部がわずかにくびれる。肩部はほとんど後をなさない。頸部は、地文に縱方向の細密条板文が施され、その後にジグザグの稻妻状沈線文を施している。以上3点は、氷I式土器に一般的なものである。

次にA区17号住居址出土土器は、Ⅲ群およびIV群土器によって構成される(第5図)。Ⅲ群土器は、浅鉢C類(2)、浅鉢D類(5)、浅鉢E類(3・6)、深鉢C類(8~10)、深鉢D類



第5図 金生遺跡A区17号住居址出土土器 (1/4)

(7) の他無文の深鉢C類を含み、出土上器の主体をなす。2は、口線下に平行沈線を巡らすが、2段目の沈線は一本に連絡せず、刺突文によって数本にとぎれる。同様の施文は、3にも認められる。5は浅鉢胸部破片であるが、浮線による網状文の一部が認められる。文様モチーフは、f種と推定される。8~10は、口縁部片であるが、同遺構出土深鉢の胸部細片中に細密条痕文をもつものがほとんどないことから判断すると、深鉢C 1類に含まれるものと思われる。7は、小型の深鉢で、口唇部に刻目を巡らす。器面全体を縦方向の条痕が覆い、その上に蛇行する稻妻状沈線を施す。IV群土器は、E 1類(1・4)のみである。1・4は同一個体と考えられる。口唇端部および凸帯部に指頭圧痕を施す。口縁部が肥厚するのもこの指頭圧痕によるものであろう。凸帯下には、1種の条痕文を、横から斜位に施している。その特徴は、長野県荒神沢遺跡や御社宮司遺跡出土の条痕文上器とも共通し、東海地方西部の輕王式に併行するものと考えられる。

## ② 長坂上条遺跡

2章でも述べたように、同遺跡出土土器は1~6類に分類されている。4~6類の内、関西系統とされた5類土器は、多くが晩期前半の資料と思われる所以ここでは除き、4類および6類について検討する。なお、報文中の掲載資料は戦災によって焼失しているため、報告書中の図版に沿って記述する。<sup>(17)</sup>

報文第17図に掲載された第4類土器は、明らかに陽刻による浮線網状文とされるものであり、文様は工字文、変形工字文などいくつかのバリエーションが認められる。文様モチーフは、a種、c種、e種が存在し、若干の時間的な差を示すものと思われる。これらの土器は、いずれも浅鉢乃至鉢と考えられ、本稿III群浅鉢C類、同D類、又は鉢A類に該当する。

報文第6類土器は「器面全体に櫛目或は刷毛目様の條痕を有するもの」が括されている。第

19図に示された写真では、本稿Ⅲ群土器中の細密条痕文を施す土器が大半を占め、稲妻状沈線を垂下させるものも散見される。写真資料からは明確に判断できないが、口唇部に指頭圧痕を巡らす深鉢形の条痕文土器（報文第20図）や口縁部に縦位、胴部に横位の条痕を施した有肩の深鉢（報文第19図左上）など、一部にはIV群に含まれる可能性のあるものも混在している。

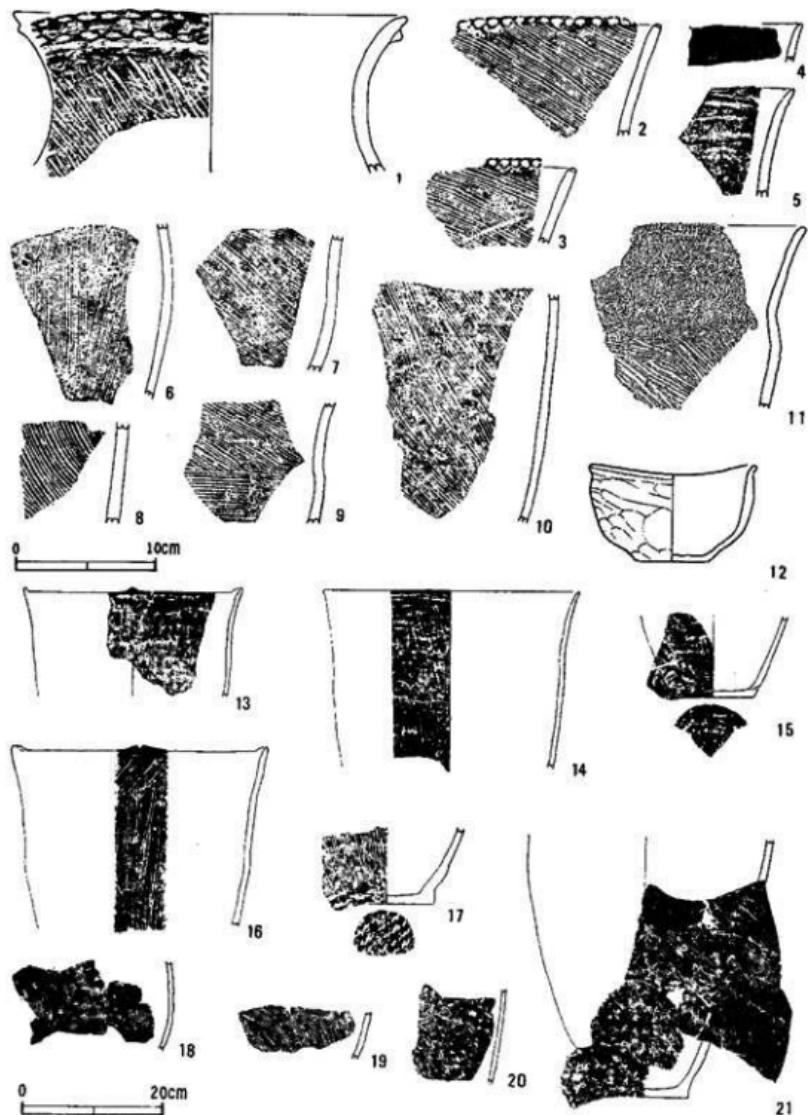
#### ③ 柳坪遺跡（第6図）

該期資料として、A地区16号住居址が知られる。同遺構内出土土器は、IV群土器のみによって構成される。器種は、同群壺E1類（1）、深鉢F2類（2・3）、深鉢G類（13・16）、深鉢H類（11）、深鉢I類（4・5・14）、塊A類（12）があるが、他に深鉢胴部乃至底部破片、壺胴部破片等を含む。1は、口縁部に指頭圧痕をもつ太い凸帯を2条巡らし、頸部に4種の粗い条痕を施す。6～10・15・17～21は、2種の条痕文である。条痕は、斜方向又は縦方向の単純なもののが多いが、9のみは斜位と横位を組み合せている。4・5は、口唇端が尖る無文深鉢で、蛭間氏により壓王式に伴出する無文土器との類似が指摘されている。<sup>(18)</sup>13は、口縁部に4単位の山形突起をもち、胴部に3種の縦位条痕を施す。16は、13同様に口縁に山形小突起を有するが、突起中央をへらで刻むため、2個1単位の突起をなす。胴部は、3種による斜位から縦位の条痕文が覆う。山形小突起を口縁にもつこの種の深鉢は、県内の寺所遺跡や葛原遺跡、長野県苅谷原遺跡、横山城遺跡出土土器中に認めることができる。11は、口縁部が外反し有肩となる深鉢で、口唇部に細かい刻目を有する。口縁部を無文帶で残し、胴部に3種の細かい条痕を施す。この土器は形態的にⅢ群深鉢C2類と類似し、系統的にも連続する可能性がある。類例は、長野県苅谷原遺跡出土土器の中に存在する。

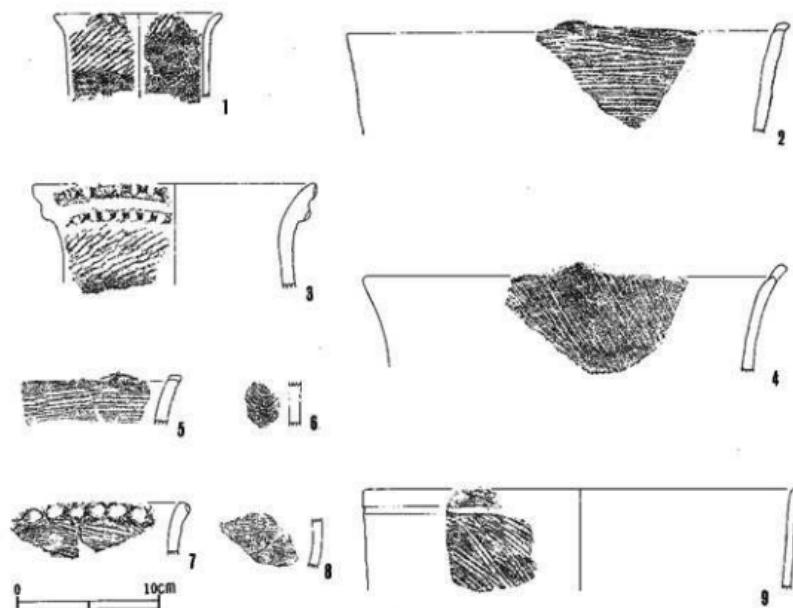
#### ④ 寺所遺跡（第7図）

同遺跡では、IV群土器を出土する土壤が5基発見されている。ここでは、2号土壙出土土器について述べる。出土土器は、IV群壺E3類（3）、壺G類（1）、壺F3類（8）、深鉢F類（9）、深鉢G類（2・4・5）、壺A1類（7）によって構成される。1は、LR繩文を口縁内外面に施す壺で、3と比べ器肉が薄く、細頸を呈する。類例は、長野県横山城遺跡や同県寺所遺跡に求められる。3は、口縁部に2条の凸帯を巡らす広口壺で、凸带上には棒状工具の側面を押捺して刻目を施す。頸部は条痕文ではなく、無節繩文をころがして条痕文の効果を出している。6は、壺の胴部破片と考えられるが、半截竹管による波状文が認められる。2・5は、口唇端部が平坦で、山形小突起を有する。胴部は3種の条痕が横走する。4は、口唇端部がやや丸味を含み、山形突起を有する。胴部の条痕は4種による。9は、口縁下に一条の沈線を巡らし、地文に5種の条痕文を施す。7は、口唇に指頭圧痕を巡らすため口縁部がやや肥厚する。胴部条痕は3種である。

同土壙は付近の土壙同様墓壙と考えられるが、出土土器の器種および個体数が多く、再葬墓の可能性もある。



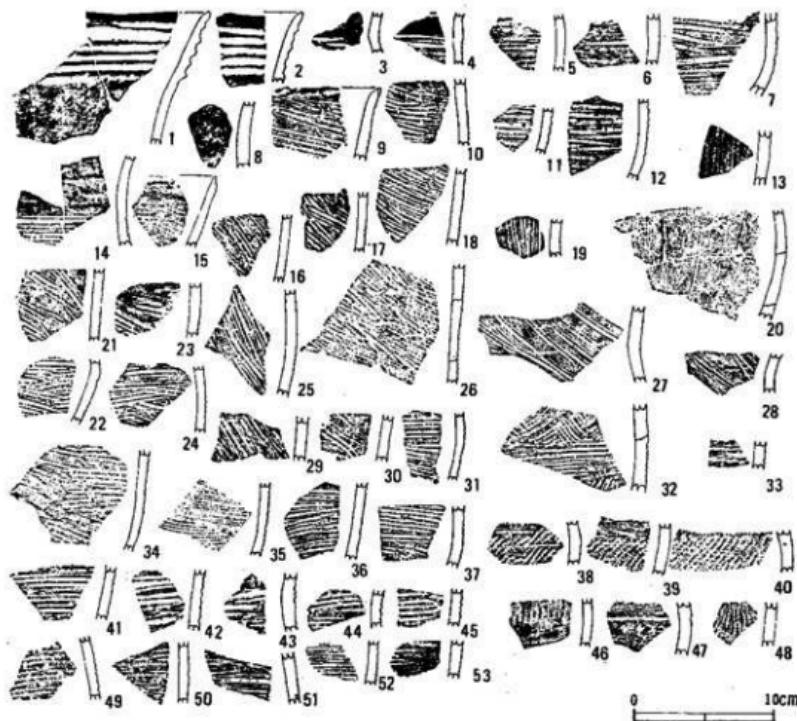
第6図 御坪遺跡A地区16号住居址出土土器（上1/4 下1/8）  
(蛭間真一 1977より作成)



第7図 寺所遺跡2号土塁出土土器(1/4)

⑥ 大豆生田遺跡 (第8図)

III群、IV群土器が存在する。III群土器は、深鉢C類(1~4・8・14)である。1・2は、口縁部に5条の平行沈線をめぐらし、頸部が研磨されている。2の口唇部には山形小突起が認められる。3・4・8・14は頸部から胴上部にかけての破片であるが、肩部の稜はほとんどみられない。胴部に横位の細密条痕が施され、深鉢C 2類と考えられる。IV群は、壺A 1類乃至深鉢F 2類と考えられる口縁部破片(9・15)を除いては、全て胴部破片である。条痕文土器の施文は、2種、3種、5種によるもので、大半が斜位又は横位の單一方向である。32だけは、2種による縱位羽状条痕と横位条痕を交互に施し、壺F類に含まれる破片と思われる。38~40・46~48は、本群壺G類に比定される。この内47は原体Rの撚糸文を斜位に施すが、その他はLR綱文をこころがしている。

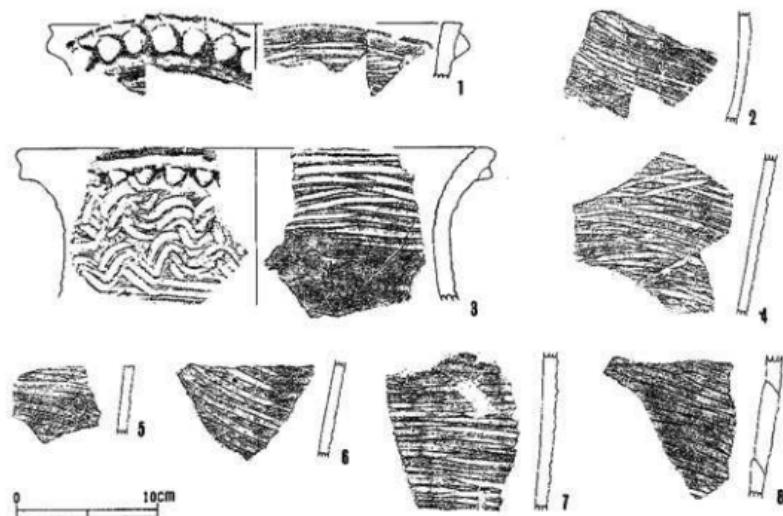


第8図 大豆生田遺跡出土土器 (1/4)  
(蛭間真一 1977より)

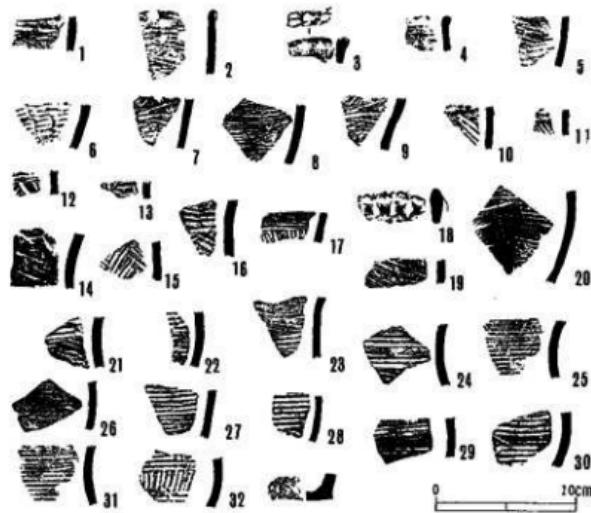
#### 甲府盆地とその周辺地域

##### ⑥ 金の尾遺跡 (第9図)

IV群壺E1類(1)、壺E2類(3)が存在する。1は、口唇端部が面取りされ、平坦となる。指頭圧痕を有する凸帯下には5種の条痕が施され、口縁内面に同一工具による条痕が横走する。3は、口縁下に1条の太い沈線が巡り、その下部に指頭圧痕をもつ凸帯がある。頸部には5種の波状条痕が施され、1と同様口縁内面にも条痕文を横走させる。2・4~8は、上記の広口壺胴部又は深鉢胴部破片と考えられ、いずれも5種の条痕文が認められる。8の外面には煤が付着し、煮沸にも使用されたことがうかがえる。



第9図 金の尾遺跡出土土器 (1/4)



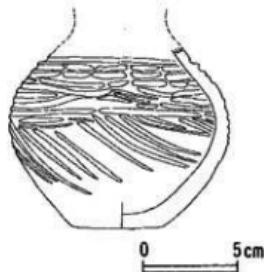
第10図 米倉山B遺跡出土土器 (1/4)  
(都留文科大学考古学研究会 1968より)

### ⑦ 米倉山日遺跡 (第10図)

IV群壺F 1類 (15)、壺F 3類 (17・32)、深鉢F 2類 (2) の他、条痕文土器破片を多く含む。2は、3種の斜位条痕文を有する。15は2種による縦位羽状条痕文、17・32は縦・横交互の条痕文が施される。22~31は、2種の横位条痕をもつ壺破片である。18は、口縁部にヘラ状工具による刻みをもつ凸帯を巡らす壺で、口唇部に小さな刻目を有する。口縁下は欠損しているが、類似した壺は後述する鶴の島遺跡出土土器の中に認められる(第14図13)。壺の施文等にみられる特徴は、静岡県丸子式土器や長野県庄の畠式土器に類似するものである。上記以外で3種条痕文を施す深鉢等の破片は、これらの壺と共に存するものであろうが、遺構に伴うものではないため断定はできない。

### ⑧ 城原遺跡 (第11図)

IV群壺F 4類に含まれる小型土器が出土している。口縁部は欠損しており、現存高9.7cm、胴部最大径11.7cmを測る。肩部に1条の沈線を巡らし、その下を棒状工具による2~3cmの平行沈線が横走する。胴下半部は、左上りの斜位条痕を施している。器壁は、比較的厚く、胎土には長石、石英、金雲母などが多く含まれる。球形土器として確立した形状を示しており、米倉山遺跡や生出山山頂遺跡出土の壺などとも類似する。



第11図 城原遺跡出土土器 (1/3)

### ⑨ 塩田地内出土土器 (第12図)

上野晴朗氏によって「接触土器」とされた壺形土器である。<sup>(19)</sup>

頸部から口縁部はほぼ直立し、胴部がわずかに膨らみをもつ形状である。口縁下に5条の平行沈線が巡り、胴部上半に平行沈線によって区画された文様帶を形成する。この区画内には、三角連繋文を基調としたg種の文様が認められる。文様の表現は、陰刻によるものではなく、平行沈線を2重~3重に施すことによってその間隙に浮線を表出している。頸部及び胴下半部は非常に細かいクシ状工具によって条痕文を施すが、これはⅢ群土器の細密条痕に近い。



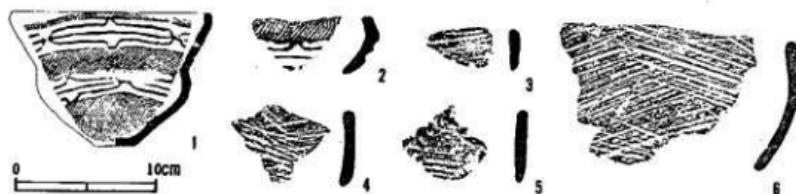
第12図 塩田地内出土土器 (1/4)  
(山崎金夫 1975より)

この帯にみられるg種の文様モチーフは、群馬県岩槻山遺跡、茨城県殿内遺跡、千葉県荒海遺跡など関東の初期弥生土器や、東北地方の大洞A式から初期弥生土器に特徴的なもので、本資料の年代的位置づけの拠り所となろう。また施文手法から、浮線文が崩れ沈線文化する過渡的な様相が看取される。

#### 富士五湖および桂川流域

##### ⑩ 熊井戸遺跡 (第13図)

III群およびIV群土器が出土している。1・2は、口縁部がやや内湾し、有肩となる浅鉢で、Ⅳ群土器浅鉢の中の1つのバリエーションをなすと考えられる。口縁部および肩部の横位文様帶に陽刻によるd種の変形工字文を表わし、他は器面全体に縦文が施される。3～6は、IV群土器破片であるが、条痕は3種によるものが多い。



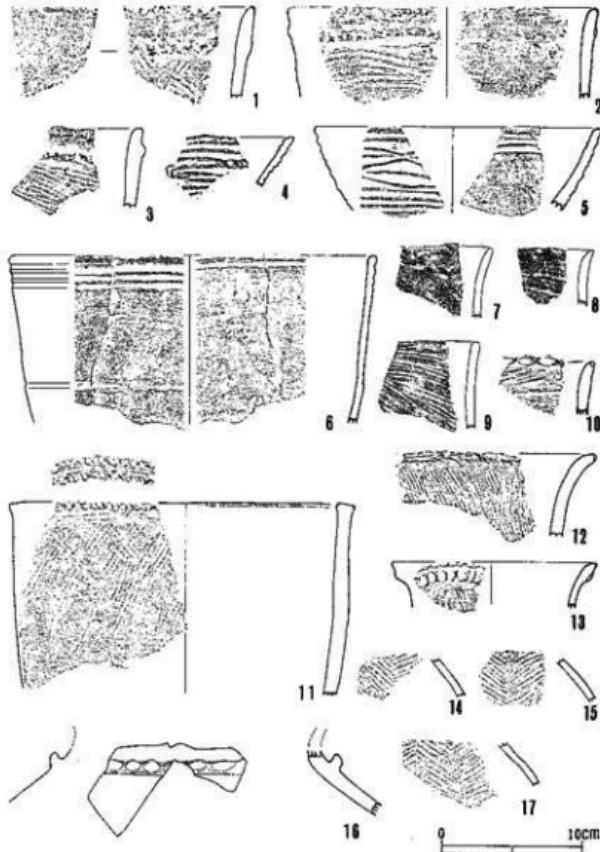
第13図 熊井戸遺跡出土土器 (1/4) (山本寿々雄 1961より)

##### ⑪ 鶴の島遺跡 (第14図)

本遺跡は、II群～V群に含まれる土器群が出土しており、豊富な内容を示している。<sup>(20)</sup>

II群土器は、深鉢A類(1～3)が存在する。1は、口唇部にヘラ状工具による刻目をもち、口縁部同一工具による斜めの刻目を入れた低い凸帯が巡る。凸帯下の頸部には、1種による格子状に交錯した条痕文が認められる。2は、1と同様口唇部に刻目、口縁部に有刻凸帯を有する。頸部には1種による横方向の条痕文が施されるが、口縁内面にも二枚目による調整痕がわずかに残る。3は、口縁部凸帯上にのみ刻目をもち、その下に1種乃至2種条痕を斜位に施す。III群土器は、浅鉢D類(4・5)、深鉢C1類(6)が認められる。4は、口縁外面に浮線網状文を有し、内面に3条の沈線を巡らす。5は、2よりやや厚手の浅鉢で、外面に浮線によるe種の変形工字文を施し、口縁内面に3条の平行沈線をもつ。また外部には赤色塗装が残存している。6は、肩部がわずかに屈折する深鉢で、口縁外面および肩部に沈線を巡らす。器面は、全体的に研磨され、細密条痕などは認められない。IV群土器は、深鉢F1類(9)、同F2類(10)、同F3類(11)、深鉢I類(7・8)、壺A3類(12)、壺F類(13～15・17)に分類される。7・8は、口唇端部が尖る。この種の土器は、本県柳坪遺跡A地区16号住居址出土土器中に類例がある(第6図4・5)。9は、口縁がほぼ直立し、口唇が平坦の深鉢で、器面に3種の条痕文を施す。

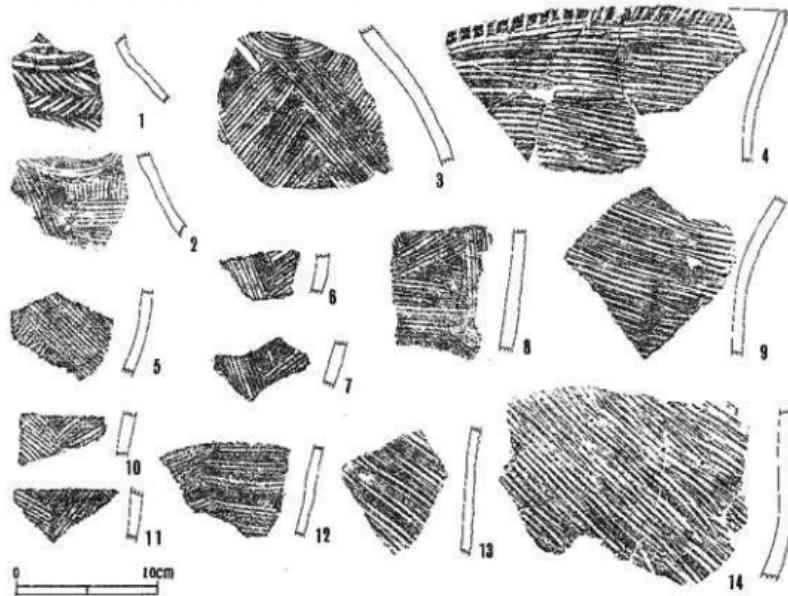
す。11は、直立口縁を有し、口唇端が面取りされ平坦面をなす。口唇部内外の角には刻目が巡る。胴部は1種条痕文を左右に交錯させ格子状に施している。口唇部の面取り手法は、東海地方西部では櫻玉式に顕著とされるが、口唇部の刻目や脚部の条痕文のあり方からⅡ群土器に含まれる可能性もある。13は、口唇部および凸帶上に刻目をもつ壺口縁で、頸部に綫方向の条痕を施す。14・15・17は、2種条痕文により継位羽状文を表わした壺で、生出山山頂遺跡、米倉山B遺跡出土壺などと共通する。16は越賀川系のV群土器と考えられる小破片であるが、肩部に指頭圧痕を有する高い凸帶が巡る。凸帶部の上下は無文で、全体の色調は茶褐色を呈する。貼り付けによる凸帶の特徴から畿内第1様式新段階に併行するものと考えられる。



第14図 猿の島遺跡出土土器 (1/4)

◎ 生出山山頂遺跡 (第15図)

同遺跡出土土器は、IV群土器壺F1類(3・5~7・10・11)、壺F2類(1)、壺F3類(2)、壺A2類(4)によって構成される。1は、肩部に弧状の平行沈線をもち、その下に棒状工具によって横方向の羽状文を施す。この種の土器は、さらに桂川を下った神奈川県三ヶ木遺跡の小型壺などにも類似する。2は、2種の条痕により肩部に弧状文、その下部に縦・横交互の文様が描かれる。3・5~7・10・11は、いずれも2種の条痕による縦位の羽状条痕文を特徴とする。使用されるクシ状工具の条数は6~10本程度である。これらの壺に認められる2種および5種の条痕文は、他遺跡の条痕文土器より文様的効果を一番顕著に示している点で注目される。4は、口唇部にヘラ状工具による刻目をもつ壺で、胴部には2種の横位条痕文が施される。9・14もこれと同一器種の胴部破片であろう。本遺跡出土土器は、全体的に静岡県浜沢遺跡や丸子遺跡の土器群と極めて類似した特徴を認めることが出来る。



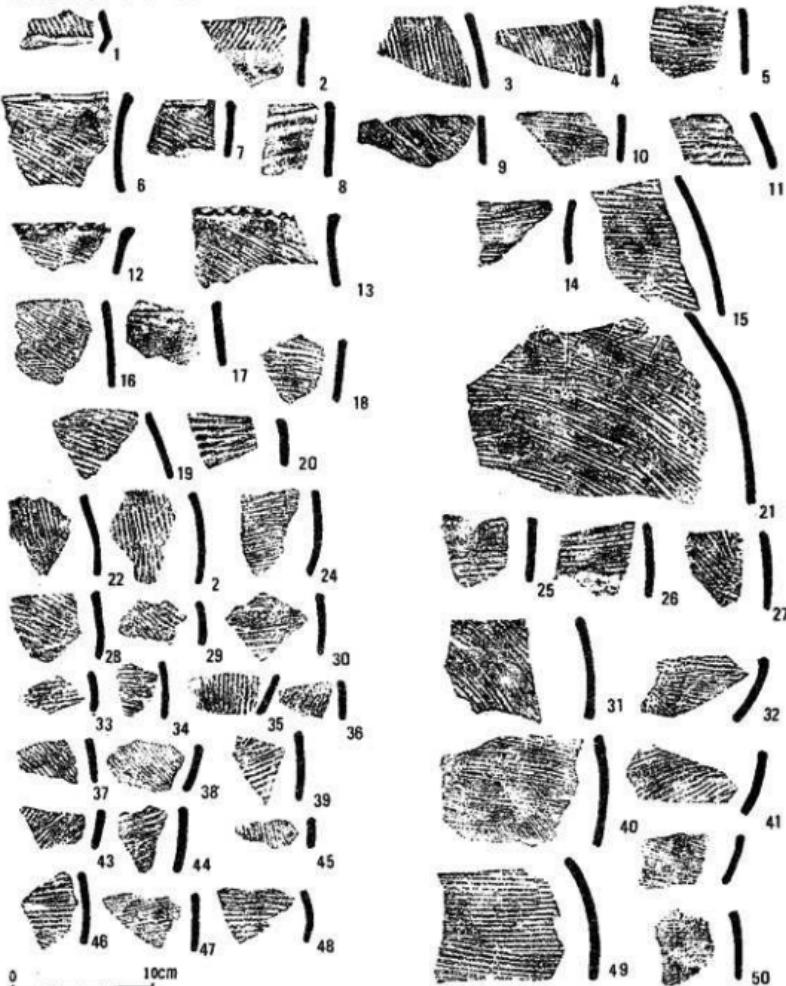
第15図 生出山山頂遺跡出土土器 (1/4)

◎ 宝司塚遺跡 (第16図)

山本氏により「富士国立公園博物館研究報告第15号」に報告された資料である。<sup>(21)</sup> 我念ながら筆

者は実見していないため、山本氏が掲載した拓本をもとに概観したい。

出土土器は、IV群上器に属し、口縁部に繩文を施す破片2点(1・2)と無文土器1点(8)を除いて全て条痕文土器である。1は、山形突起を有し、口縁部が屈曲する深鉢と考えられるが、胴部形態については不明である。口縁部にRL繩文を施す。2は、折り返し口縁をもち、そこにRL繩文をこころがしている。6・7はIV群甕A3類、12・13は同群甕A1類に含まれると思われる。

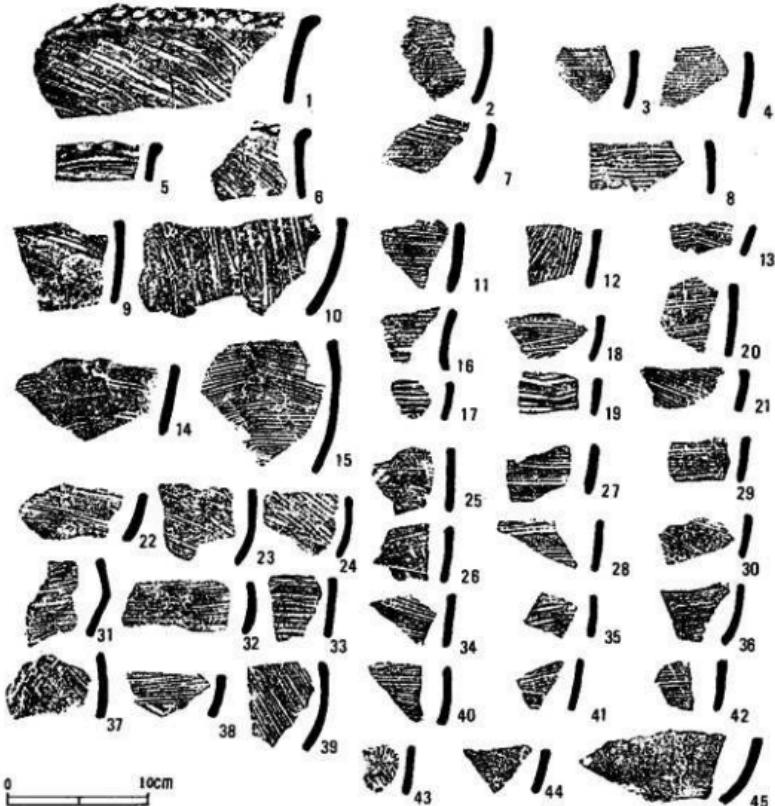


第16図 宝司塚遺跡出土土器(1/4) (山本寿々雄 1966 より)

本遺跡出土の条痕文土器は、2種および3種の条痕が主体を占める。条痕は、いずれも斜位、横位、縦位の单一方向に施されるものがほとんどで、羽状条痕文や縦・横交互条痕文などの文様的効果の強いものは全く認められない。この点、生出山山頂遺跡出土土器などよりも古相を示していると考えられる。

#### ④ 島原遺跡 (第17図)

本遺跡出土土器は、IV群土器のみである。同群甕 A1類 (1・5・6) の他は全て腹部破片のため器種の確定はできない。45点中、縄文1点 (43) 、無文2点 (44・45) 、その他42点は条痕文土器である。条痕文土器は、2種乃至3種による单一方向の条痕が多く、宝司塚遺跡などとも共通した特徴を認めることができる。



第17図 島原遺跡出土土器 (1/4) (山本寿々雄 1966 より)

## 4 土器様相の変遷

### (1) 各土器群の編年的位置

3章においては、甲斐出土の縄文時代晚期後半～弥生時代中期初頭に至る土器様相を、個々の遺跡の中で明らかにしたが、ここでは各群の土器の編年的位置を整理しておきたい。

工字文土器を指標とするⅠ群土器は県内では発見例が少なく、土器様相の全容を捉えることができない。金生遺跡2号配石出土の沈線による工字文、長円形区画文を肩部に施した浅鉢（第4図2）は、長野県佐野遺跡HⅢ類土器や愛知県馬見塚遺跡F地点出土土器に類似するもので、中部地方西部の佐野Ⅱ式、東海地方西部の五賀森式に比定される。

Ⅱ群土器は、金生遺跡2号配石および鶴の島遺跡出土土器群中に存在する。肩部が有段となる（24）B類、（25）C類は、愛知県五賀森遺跡B日塚、同県馬見塚遺跡F地点、同県吉胡目塚第三トレンチなど東海地方西部地域にも類例が求められる。新津氏は、「これらの土器を「北九州地方夜臼式」の器形を勢歸とさせる」として西日本に祖形を求めており、北九州地方では、佐賀県菜畠遺跡（26）8層上層～12層に至るⅡ式～IV式土器、福岡県板付遺跡G-7ab調査区下層出土土器などと対比される。金生遺跡出土の（第4図3・4）は、有肩部から口縁が直線的に内傾乃至直立する特徴がみられ、この種の壺形土器の中でも古相に属するものといえよう。つぎに、肩部が「く」の字状に屈曲する深鉢B類は、形状的に菜畠Ⅱ式～Ⅲ式の深鉢に類似するが、金生遺跡出土例は口縁部と肩部に凸帯をもたず、沈線を巡らしている。同様の特徴を有する有肩の浅鉢B類は、北九州地方菜畠Ⅱ～IV式、近畿地方滋賀里Ⅳ式、東海地方西部五賀森式などに主体的な浅鉢形土器と（30）近似する。このタイプの浅鉢は、中部地方では長野県上の平・網張遺跡や同県女鳥羽川遺跡においても出土例が存在し、特に後者では水Ⅰ式土器に先行する浮線文土器群に伴出することが指摘されている。したがって、金生遺跡2号配石中のⅡ群土器は、北九州地方の山ノ寺式～夜臼式単純、近畿地方の滋賀里Ⅳ式、東海地方西部の五賀森式に各々併行関係が求められる。

一方、鶴の島遺跡出土のⅡ群深鉢A類は、口縁下にヘラ状工具による刻目のある凸帯を巡らす点や、頸部に二枚目腹縁による条痕文をもつ点など、西日本凸帯文土器そのものの特徴が看取できる。この種の土器は、近畿地方滋賀里Ⅳ式、東海地方西部五賀森式に対比されるが、後者では凸帯部刻目が貝殻によるものが多く、若干の地域差が存在している。

以上2遺跡出土のⅡ群土器は、縄文時代中期後半期に位置付けられる。凸帯文土器に系譜をもつこれらの土器は、Ⅰ群土器やⅢ群の古相の中に客体的に混在すると考えられるが、県内では明確な伴出関係をもつ資料がほとんどなく、今後の資料の増加が待たれる。

Ⅲ群土器は、浮線網状文を特徴とする土器群で、県内では金生遺跡、鶴の島遺跡、熊井戸遺跡、長坂上条遺跡、大豆生田遺跡などで発見されている。同群深鉢形土器は、C類、D類の2つに分けられるが、その大半がC類中に包括される。深鉢C類は、有段の肩部を特徴とし、口縁部に2～5条の沈線を巡らすが、長野県水遺跡1類土器中の深鉢の様に、刻目をもつ外帯を口縁部に

巡らせる例はほとんど存在しない。口縁形態は、平縁あるいは山形突起を有するものの2種が知られ、長野県御社宮司遺跡第II群第1類土器や静岡県山王遺跡出土深鉢などにも類似する。点D類土器は、口縁部破片で胴部の形状は不明であるが、長い頸部に浮線網状文が認められる。類例はきわめて少ないが、群馬県千葉谷戸出土土器群中に存在する。しかし、千葉谷戸遺跡の壺は、「弥生黎明期土器」とされており、金生遺跡出土例とは若干の時期差がある様である。浅鉢は、C類、D類が主体をなし、有肩の浅鉢B類は相対的に少ない。

一方、本群土器を中心とする変形工字文の文様モチーフは基本的に7種類に分類することができる。c種およびd種は、長坂上条遺跡、金生遺跡、熊井戸遺跡等に認められるが、北陸、中部、関東地方の該期の浮線文に多い。遺跡名としては、新潟県藤橋遺跡、群馬県千葉谷戸遺跡、千葉県荒海遺跡、長野県水遺跡、愛知県下り松遺跡などがあげられる。e種は、長坂上条遺跡、鶴の島遺跡に存在する一方、周辺地域では新潟県鳥居遺跡、同県乙茂遺跡、愛知県西志賀遺跡、同県二反地遺跡、静岡県山王遺跡等に散見される。f種は、金生遺跡A区27号住居址や尼咲原遺跡などにみられるが、長野県水遺跡や静岡県山王遺跡においても浅鉢形土器に多用される。g種は、三角連繁文を基本とし、本県では塩田地内出土土器に類例が認められる。このモチーフは、一般的には陰刻される場合が多く、関東地方や東北地方の大洞A式～初期弥生土器に多く用いられる。塩田出土例は、浮線文が崩れ沈線文化する過渡的な手法がみられ、Ⅲ群土器の中でも最も新しい段階と言えよう。

したがって、Ⅲ群土器は、中部地方水I式、東北地方大洞A式に併行する位置付けがなされるが、塩田出土土器の如く大洞A式期に比定されるべきものもわずかに存在する。Ⅲ群とⅣ群土器との接触は、水I式の段階にはじめて認められる。次期において沈線文による変形工字文を特徴とする大洞A'式や水II式に比定される例がほとんど存在しない事実は、水神平系条痕文土器の普及、定着化の傾向が急速であったことに起因するものであろう。

IV群土器は、東海地方西部地域に祖源をもつ条痕文土器であり、甲斐での初現は先述したように金生遺跡にある。また、鶴の島遺跡においても、該期併行の条痕文土器や無文土器が存在していると考えられる。Ⅲ群土器、すなわち水I式に堅正式が伴う例は、長野県では波島島南遺跡、荒神沢遺跡など天竜川流域の伊那谷に多く認められる。また、静岡県では山王遺跡や見性寺貝塚、愛知県では古沢町遺跡や輕王貝塚などでも確認されており、両者の同時期性は確実視される。しかし、輕王式に先行する馬見塚式土器は、甲斐では今のところ全く発見されていない。この土器は、五貫森式から堅正式への過渡的な様相を示す土器群であるが、分布地域は伊勢湾沿岸地域に集中する。東限は、駿河山王遺跡にわずかに出土例が知られるが、富士山北麓の瀬の島遺跡のように数時期におよぶ遺跡においても存在しないことは、馬見塚式土器の存続期間と分布範囲が比較的短かく狭かったことを暗示しているのではなかろうか。

水神平式併行期の条痕文土器は、Ⅲ群土器を凌駕し、該期の土器様相の主体となる。条痕文の特徴は、施文方向が横位・斜位・縱位の単純なものがほとんどで、羽状条痕文や縱横交互条痕など装飾効果の高いものがみられないことである。条痕は、2種、3種、5種によるもので、1

種目般条痕はほとんど存在しない。これは、逆に海をもたない甲斐の地に条痕文土器が定着化したことを示唆する現象として捉えられる。該期の器種構成を最も良く示す例は、柳坪遺跡 A地区 16号住居址が挙げられる。同遺跡出土土器は、IV群壺 E 1 類、深鉢 F 2 類、深鉢 G 類、深鉢 H 類、深鉢 I 類、甕 A 類などによって構成されるが、口縁部に山形突起を有する深鉢 G 類や有肩で胴部に細かい条痕を施す深鉢 H 類は、Ⅲ群土器など在地の縄文土器にみられた手法が、条痕文土器の中に残存しているものと考えられる。また、壺形土器は、伊那地方の林里遺跡の出土例の如く口唇部に貝殻押引文を巡らす純粋な水神平式ではなく、条痕文土器伝播と定着の過程での変容がうかがえる。一方、金の尾遺跡出土広口壺にみられる頸部波状文と口縁内面の条痕は、紅村氏の編年<sup>(50)</sup>によれば水神平 II 式に出現する手法であるが、これとは逆に、水神平式当初から存在するとする意見もある。しかも、第9図一の口唇部の様に断面を平坦に面取りする手法は、水神平式以前の特徴であり、これらの土器を一概に水神平式の新相と断定することはできない。したがって、金の尾遺跡出土広口壺を、ここでは紅村氏の水神平 I、II 式を含めた広義の水神平式に併行するものとして捉えておきたい。

この時期の遠賀川式土器は、鶴の島遺跡に存在している。壺形土器の肩部破片と思われるが、指頭圧痕をもつ高い凸唇を貼り付けている特徴から、畿内第 I 様式新段階に比定される。色調は茶褐色で、東海地方西部の所謂赤焼遠賀川式土器に対比される可能性もある。

IV群土器中、岩滑式や丸子式土器に併行するものは、寺所遺跡、米倉山 B 遺跡、生出山山頂遺跡、鶴の島遺跡などで検出されている。寺所遺跡は、細頸壺の出現や施文手法の点において柳坪遺跡よりも新しい要素が認められる一方、山形突起を有する深鉢 C 類など伝統的な要素も残している。生出山山頂遺跡出土土器は、壺 F 類と甕 A 類により基本的に構成され、その土器様相は静岡県浜沢遺跡と極めて類似する。該期の壺 F 類は、球胴形で貯蔵用容器としての機能を完全に確立したことを見出している。

以上の I 群から V 群土器の編年的位置を踏まえて、甲斐における該期の土器様相の変化と初期弥生土器の受容の過程を明らかにしたい。

## (2) 土器様相の変化

八ヶ岳南麓地域では、金生遺跡 2 号配石においてわずかに工字文を特徴とする I 群土器が存在する。これらは東北地方大洞 C<sub>2</sub> 式期や西日本凸蒂文土器前半期と併行するものであり、II 群土器とも共伴関係をもつ。次いで、浮線網状文を特徴とする氷 I 式土器は、金生遺跡 2 号配石遺構、同 17 号住居址、長坂上条遺跡などで発見されている。特に金生遺跡 17 号住居址では、座玉式の条痕文土器を伴出しており注目される。中村五郎氏や設楽博己氏は、近年氷 I 式土器の細分を試みているが、該期の資料の少ない甲斐ではこれらの土器を新旧に分けることは今のところ困難である。次の柳坪遺跡では、それ以前の在地の伝統を色濃く保ちながらも、条痕文土器が主体を占め、浮線文系の土器は姿を消す。したがって、この段階と浮線網状文土器を主体とする前段階との間には、土器様相上の大きな変化が認められる。柳坪遺跡に続く時期の遺跡には寺所遺跡があるが、

表1 遺跡別器種構成

(○は存在するもの、△は存在する可能性があるもの)

分類		I群			II群			群			III群			群			IV群			群		
遺跡名	類	A	B	C	D	E	F	G	H	A	B	C	D	E	F	G	H	I	A	B	C	
金牛2号配石	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
金牛A17住						○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
長板上条	△					○	○	△	○					○	○	○	○	○	△	○	△	
柳原A16住										○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
寺所2号十三塗										○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
大豆生田						○				○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	△	
金の尾										○												
米倉山B										○				○		○						
城原										○												
船井戸															○							
瀬の島				○			○							○		○		○	○	○		
生川山山頂															○		○		○	○		
宝司家																	△	△				
島原																	△	△	○			

表1 遺跡別器種構成

その出土土器は長野県庄の畠遺跡4類や同県横山城遺跡出土土器などに類似し、弥生時代中期初頭に位置づけられよう。以上のことから当該地域では、金生遺跡2号配石（一部）—金生遺跡A区17号住—柳坪遺跡A地区16号住—寺所遺跡という変遷過程が考えられる。中でも、金生遺跡A区17号住と柳坪遺跡A地区16号住の間は、土器様相上の大きな画期として捉えることができる。西日本ではすでに畿内第I様式新段階に比定される時期である。

甲府盆地とその周辺地域では、I～III群を主体とする遺跡の調査例はない。金の尾遺跡は、条痕文土器が主体をなしているが、その特徴は米倉山B遺跡出土土器よりは1段階古く位置づけられる。米倉山B遺跡出土土器は丸子式に近似しており、弥生時代中期初頭に比定されよう。

富士丘湖から桂川流域では、かつて山本氏が指摘したように鶴の島遺跡において、縄文晚期後半から弥生時代中期初頭にいたる連続性が看取できる。島原遺跡、宝司塚遺跡出土の条痕文の手法は、県北部の柳坪遺跡出土土器に共通するものである。これに次ぐ生出山山頂遺跡は、先述したように東海地方中・東部の丸子式土器との関係が強く、米倉山B遺跡などとも併行する位置づけがなされる。

各地域の土器様相の変化を整理したのが、表2である。この中で、土器様相上の大きな画期は、浮線文系土器から条痕文土器への転換期にあることが指摘される。また、西日本凸帯文土器の影響が、甲斐地域の周縁部にあたる富士五湖地方と八ヶ岳山麓地域に確認できることは、次期の条痕文土器の波及経路を考える上で示唆的といえる。

近畿	東海四国	信濃	東		
			八ヶ岳南麓	甲府盆地周辺	富士五湖～桂川流域
滋賀里山	近賞舟	佐野日	金生2号配石 （一部）		鶴の島
船橋 I(古) 第I様式(中)	馬見塚 櫛王	木I	長坂上条 金生A17件		箱井日
第I様式(新)	木神平	木日 林重	柳坪A16住	金の尾	宝司塚 島原
第II様式	岩舟	庄の郷	寺所	木曾山B	生出山山頂

表2 甲斐における縄文晚期後半～弥生中期初頭の土器編年

### (3) 土器組成の検討

(2)で明らかにした土器様相の画期を前後する時期の土器組成上の変化は、いかなるものであろうか。

金生遺跡A区17号住居址内出土の土器は、第5図に掲載したものを含め口縁部破片が205点存在する。この内訳はIII群深鉢158個体(77%)、壺9個体(4.3%)、浅鉢35個体(17%)、壺

1個体（0.5%）、IV群広口壺1個体（0.5%）である。煮沸形態である深鉢、甕が全体の8割を占め、次いで供膳形態の浅鉢が2割近く存在する。深鉢の多くは無文であるため、該期資料以外の混入も想定されるが、それを考慮しても、煮沸形態の割合が非常に高いことがうかがえる。一方、柳坪遺跡A地区16号住居址では、前資料と比較して個体数が少なく、器種の判別可能な数は17点である。この内、深鉢は15個体で全体の88%を占め、広口壺1個体（6%）、塊1個体（6%）を大きくうわまわっている。しかもこの段階の広口壺が、煮沸と貯蔵の機能が未分化であるとする佐藤由紀男氏の指摘を考慮すれば、煮沸形態の占める割合は、さらに高い占有率を示していることになる。他方、ここで注目されるのは、前段階に全体の2割弱を占めていた供膳形態の浅鉢が、ほとんど存在しなくなっている、両段階での土器組成に相違が認められることである。これに続く段階で定量分析が可能な資料はないが、生出山山頂遺跡や寺所遺跡などでは、貯蔵形態とされる壺が煮沸形態の甕に次いで多くなり、それ以降の弥生土器の器種構成が基本的に確立したことが指摘できる。

農耕という新たな生産基盤の画期を背景にもつ弥生文化の成立については、土器組成変化からアプローチする方法論が、各地で成果をあげている。<sup>(58)</sup> 中でも、確実な水稻栽培の開始と土器組成変化についての中島直幸氏の論文は、非常に興味深い内容をもっている。この論文は、佐賀県菜畑遺跡における山ノ寺式から板付II式にわたる土器組成の変化を、山ノ寺式期に導入された水稻耕作が定着していく現象として捉えているものである。中島氏によれば、深鉢や甕などの煮炊の機能が山ノ寺式から板付II式にかけて常に4～6割を占めるという。食器の機能をはたす鉢は、山ノ寺式、夜臼式単純、夜臼式の中で全体の1割を保っていたものが、板付I、II式になるとほぼ存在しなくなる。供膳用の機能をもつ浅鉢は、山ノ寺式まで4割を占めるが次第に減少し、板付II式では約1割となる。これとは逆に、貯蔵形態である壺は山ノ寺式以降夜臼式まで1割であったが、板付I、II式になると3割に急増する。これらの事実は、水稻耕作の開始による生活様式の変化が、着実に土器組成の上に反映されると同時に、それが土器組成の大変革とはならず漸移的な変容過程をたどることを示している。そして、甕、壺、高坏というそれ以後の弥生土器の器種構成の基本が確立する型式前に水稻耕作の導入が行われている点に注目したい。

甲斐地域では、浮線網状文を主体とする土器群から水神平系条痕文土器群への転換期が土器組成上の第1の変革期と一致する点は、重要な意味をもつものと考えられる。さらに、弥生時代中期初頭にみられる以後の弥生土器の基本的構成の確立は、菜畑遺跡の例を参考にすれば、さらに数時期前に生産活動の変革が存在した可能性も否定しない。水神平系条痕文土器の伝播は、単に外来系の土器群が甲斐に波及したという意味ばかりでなく、それを作り使用した人々が既に水稻耕作という情報を手にいれていたことに、より重要な歴史的意義が隠されているのである。次章では水稻耕作導入の問題を遺跡分布と立地から探ってみたい。

## 5. 遺跡の分布と立地

3章すでに記述した遺跡を含め、甲斐の縄文時代晚期後半～弥生時代中期初頭に至る遺跡数は50を数える（第18図、表3）。この内、IV群土器を主体とする初期弥生遺跡は、県北部の八ヶ岳南麓地域、甲府盆地底部とその周辺地域、県東部の富士五湖から桂川流域の3地域に集中している。前章の編年作業においてこの3地域に分離した理由も、各地域の遺跡の時期別動態を明らかにする目的による。分布図からも理解されるように、甲斐の周縁部にあたる八ヶ岳山麓や富士山麓に遺跡が集中する現象は、甲斐地域への弥生文化の波及過程を反映した結果と考えられ、両地域に条痕文土器以前の凸搭文土器文化の影響がまず認められる事実もこの見通しを補強するものである。東日本という巨視的な立場にたてば、弥生文化の東漸は、東海西部・南・中信・北・東信・北関東・東北南部へと連続するものと、東海西部・東海中・東部・南関東へ至る2つの大きな流れが存在するが、甲斐地域ではその両者の流れの影響を受けて弥生文化が成立していったようである。富士川流域から甲府盆地を経て遺跡が未発見である現在、新文化の伝播は、先の周縁地域を媒介とした2つの経路であった可能性が高い。

該期の遺跡立地は、低湿地と近接する微高地や尾根上が最も多く、丘陵地帯の台地上がこれに続く。生出山山頂遺跡の如く、河川との比高差も大きい山の頂に立地するものは、これらの遺跡群の中ではむしろ特殊な方を示している。低湿地をひかえた尾根上に立地する遺跡は、八ヶ岳山麓などでは縄文時代後・晩期に増加することが指摘されているが、立地条件のみを抽出すればすでに水稻耕作の条件を満たしていたことになる。台地上の遺跡は、甲府盆地南縁の曾根丘陵に多く、各々の台地間を開拓する谷を含めた生産活動が弥生時代後期などにも一般化しており、初期農耕の段階においてもその活用を考えられる。また、台地上での陸稲や畑



第18図 縄文晚期後半～弥生中期初頭の遺跡分布図

遺跡名	所 在 地	立 地	標 高 (m)	出土及び散布する 土器群	文 献
1 小瀬沢中学 校校庭	北巨摩郡小瀬沢町宮久保	尾根上	910	IV群(?)	末木 1979
2 茶屋久保	北巨摩郡小瀬沢町宮久保	尾根上	870	IV群	
3 濱氏館	北巨摩郡小瀬沢町上笠尾	尾根上	800	III群	
4 神田	北巨摩郡小瀬沢町松向	尾根上	840	III, IV群	
5 鼠尾	北巨摩郡小瀬沢町上笠尾	尾根上	790	IV群	
6 雪車	北巨摩郡小瀬沢町上笠尾	尾根上	790	IV群	
7 田頭	北巨摩郡小瀬沢町下笠尾	尾根上	790	IV群(?)	
8 向原	北巨摩郡小瀬沢町下笠尾	尾根上	740	IV群	
9 須佐沢南	北巨摩郡小瀬沢町下笠尾	尾根上	710	IV群	
10 鳥原	北巨摩郡長坂町大井ヶ森	尾根上	820	IV群	森山 1979
11 西下屋敷	北巨摩郡長坂町白井沢	尾根上	810	IV群	末木 1975
12 寺所	北巨摩郡大泉村西井手	尾根上	800	IV群	
13 金生	北巨摩郡大泉村谷戸	尾根上	770	I, II, III, IV群	新津 1984 中山 1983
14 柳坪A	北巨摩郡長坂町大八田	尾根上	720	IV群	森山 1975
15 長坂上条	北巨摩郡長坂町長坂上条	尾根上	680	I, III, IV群	大山 1931
16 押野	北巨摩郡白州町	台地上	650	IV群	新津 1984
17 枝古原	北巨摩郡白州町台ヶ原	河岸段丘上	580	IV群	
18 大豆生田	北巨摩郡須玉町大豆生田	自然堤防上	470	III, IV群	越間 1977
19 板井	蘆崎市藤井町板井	台地上		容器形土偶	森 1978
20 久保屋敷	蘆崎市旭町大字上条北割	台地上	400	IV群	末木他 1984
21 金の尾	中巨摩郡數鳥町大下条	自然堤防上	285	IV群	末木他 1979 中山 1983
22 後屋敷	山梨市			IV群(?)	
23 横田	東八代郡一宮町神沢	扇状地上	370	IV群	山本 1976
24 堀田	東八代郡一宮町堀田	扇状地上	約370	III群	上野 1967 山崎 1975
25 岡	東八代郡八代町岡	河岸段丘上	343	容器形土偶, IV群	森沢 1984
26 女沢C	東八代郡中道町下向山	台地上	370	IV群	
27 米倉山A	東八代郡中道町下向山	台地上	370	IV群	
28 米倉山B	東八代郡中道町下向山	台地上	330	IV群	山本 1982, 山本 1987 鶴見 1986
29 金沢天神	東八代郡中道町下向山	台地上	310	IV群	
30 織原	東八代郡糸富村大島居	台地上	300	IV群	

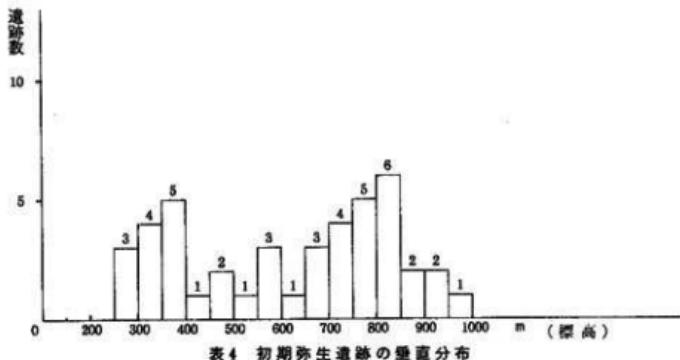
遺跡名	所 在 地	立地	標 高 (m)	出土及び散布する 土器群	文 献
31 大島居	東八代郡豊富村大島居			V群(?)	山本 1970
32 二ツ池	西八代郡三珠町大冢	台地 上	350	IV群	
33 浜井場	東八代郡豊富村関原	台地 上	300	IV群	
34 君 越	北都留郡上野原町犬目	山 腹	550	IV群	
35 恋 家	北都留郡上野原町犬目	山 腹	450	IV群	長谷川他1975
36 宮 谷	大月市富浜町宮谷	河岸段丘上	360	IV群(?)	山本 1968
37 生出山山頂	都留市四日市場	山 頂	700	IV群	都留市教委 1976
38 宮 原	都留市汰能	河岸段丘上	470	IV群	
39 熊井戸	都留市熊井戸	河岸段丘上	約400	III, IV群	山本 1961
40 寺 野	南都留郡西桂町下暮地	山 腹	730	IV群	
41 尾 死	南都留郡西桂町下暮地	河岸段丘上	600	IV群	
42 上の海 戸	南都留郡西桂町下暮地	河岸段丘上	600	IV群	
43 休 場	南都留郡西桂町下暮地	山 腹	680	IV群	
44 古屋敷 A	富士吉田市大明見	尾根 上	775	IV群	富士吉田市教委 1982
45 山ノ神戸	富士吉田市大明見	河岸段丘上	870	IV群	
46 善 場	南都留郡忍野村善場	溶岩台地上	940	IV群	忍野 教委 1983
47 潮 の 島	南都留郡河口湖町大石	潮 島	840	II, III, IV, V群	山本 1957
48 宝 司 墓	南都留郡河口湖町小立	潮 島	840	IV群	山本 1966a
49 島 原	南都留郡河口湖町小立	潮 島	840	IV群	山本 1966b
50 南 二 条	西八代郡上九一色村富士ヶ嶺	尾根 上	960	IV群	中山 1985

表3 遺跡一覧表

作などの農耕活動も考慮する必要があろう。むろん、この様な推定は、土器様相や組成変化の背景にある生活様式の変化、すなわち水稻耕作を中心とする農耕の波及と定着を積極的に評価した上で成立することは言うまでもない。この意味で該期の生産活動を具体的に示す水田跡等の1次資料の発見が待たれる。

さて、ここで再度遺跡分布に注目すると、これらの遺跡の垂直分布には表4の様に標高300~400メートル（以後A地域とする）と700~850メートル（以後B地域とする）の地点に2つのピークが認められる。大まかに見ればA地域は、甲府盆地周辺の丘陵上に立地する遺跡群であり、B地域はハケ岳山麓や富士五湖周辺の高所に存在する遺跡群である。該期に水稻耕作等の農耕が導入されたとすれば、それらの生産活動は各々の地域の自然環境や気象条件などの影響を強く受けたと考えられる。特にイネに限定した場合、様々な気象条件の中でも日照時間と毎日最高平均気温に最も影響されることが知られている。<sup>(6)</sup>それでは、A、B両地域間の気象条件の差は、どれほどのものであろうか。

〔62〕『山梨県の気象』によれば、1956—1965年のA地域に該当する甲府周辺の年平均気温は14.6°Cであるが、B地域の八ヶ岳山麓（小淵沢）では10.8°C、富士五湖周辺（河口湖）では10.7°CとA・B地域間の差は約4°Cもある（表5）。また、耕作可能な時期と考えられる3月から10月までの毎日最高平均気温は、A地域が24.4°C、B地域が19.9°Cで、その差は約4.5°Cとなっている。これらの気温差が農作物にどれほどの影響を与えたか具体的なデータとして示す手段はないが、波及期の未だ未熟な農耕技術ではその収穫量は少なからず影響があったことは、想像に難くない。現在種のイネでは、発芽に必要な最低温度は8°C～10°Cとされ、当然A・B間で種播きの時期にずれがあったことが推定される。また、現在の田植え農法による場合、苗の活着可能な温度は最低でも12.5°Cとされており、直播き農法においてもイネの発育期の気温差による



より影響は無視できないものであったと思われる。その他、稻作に影響をおよぼす要素は、降水量、水温、霜、結氷等の気象条件が挙げられるが、初期農耕の段階ではA地域に比較してB地域が水稻耕作に不利な条件を備えていたことは否定しない事実である。にもかかわらず、B地域での該期の遺跡が多く、一時的に定着化する現象をどのように評価すべきであろうか。

水神平系条痕文土器が、浮線文系土器を凌駕し主体を占める稻作導入の初期の段階においては、水稻、陸稲などを含む種々の農耕が試行錯誤のうちに開始されたのであろうが、その生産性は、未だ非常に低いものであったと推定される。したがって、これが生産力の拡大に直接結びつかず、依然として縄文時代以来の動植物資源の獲得や植物質食料の加工が大きな比重を占めていた可能性が高い。八ヶ岳南麓に展開した初期弥生遺跡は、弥生時代中期中葉から後葉にその数が激減するが、これは水稻耕作を中心とした農耕の比重が高まるにつれて、冷害などにおそれられる危険性の高い地域を捨て、甲府盆地底部などのより農耕に有利な地域へと集落が移動した結果として、ネガティブに捉えられるのではなかろうか。小稿では問題提起の段階を出ないがこの問題は、縄文晩期農耕や弥生時代中期中葉以降の遺跡の動態を検討する中で明らかにしていく必要がある。

## A 地域 (甲府)

統計期間: 1956~1965

月		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	年
気 温	平均	2.5	3.9	7.5	13.8	17.8	21.8	26.2	26.9	22.7	16.4	10.7	5.1	14.6
	最高	8.5	10.1	13.9	19.9	23.7	26.6	30.5	31.9	27.2	21.5	16.6	11.5	20.2
	最低	-3.6	-2.4	1.0	7.6	11.9	16.9	21.9	22.0	18.1	11.2	4.8	-1.4	8.9
	年	19.8	25.4	26.8	31.2	33.7	36.1	39.0	38.3	35.6	33.3	29.6	23.8	39.0
湿 度	高 度	19	25	29	28	22	20	16	28	8	8	1	18	16日
	中 度	-19.5	-17.2	-11.4	-4.6	-0.6	5.4	13.0	13.2	6.0	-1.8	-6.0	-11.7	-19.5
	低 度	-16	3	4	12	5	3	3	20	22	31	24	10	16日
	年	1933	1938	1936	1902	1905	1921	1903	1956	1922	1926	1929	1920	1921年1月
降 水 量	年 量	42	40	53	55	127	149	93	114	161	114	47	40	1075
	大 日 量	60	69	59	62	110	182	145	168	202	243	83	97	245
	日 量	17	16	10	8	26	27	15	23	14	4	14	25	48
	年	1947	1923	1928	1908	1965	1961	1906	1907	1947	1945	1932	1901	1945年10月
積 雪	深 度	29	44	24	5	—	—	—	—	—	—	—	14	44
	天 数	25	14	13	17	—	—	—	—	—	—	—	20	14日
	年	1954	1928	1969	1969	—	—	—	—	—	—	—	1968	1928年2月
	日 数	10.8	9.6	5.2	9.6	14.0	17.6	22.1	22.6	16.6	12.6	7.5	2.5	10.8
天 气 日 数	晴	5.3	9.7	10.7	15.2	0.1	17.2	17.9	19.2	15.7	15.9	12.8	10.7	7.3
	曇	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	雨	0.1	0.1	0.5	0.0	0.0	0.0	0.2	0.2	0.0	0.0	0.0	0.3	0.0
	雪	0.5	1.3	2.0	3.0	3.0	3.5	0.5	0.2	0.2	0.0	0.1	0.3	14.8
	霧	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	2.2
	雷	0.0	0.0	0.0	0.1	1.1	1.8	2.7	3.8	1.0	0.1	0.2	0.1	10.6
	雲	20.6	19.1	18.9	8.3	2.0	1.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	8.8
	霧	2.4	0.1	0.2	0.0	0.0	—	—	—	—	—	—	—	5.8
	晴	27.5	22.5	15.3	2.5	0.0	—	—	—	—	—	—	—	90.2
	曇	17.6	17.6	13.3	8.6	4.0	4.5	5.8	8.6	6.2	6.2	6.6	24.6	17.6
	雨	10.0	9.5	13.5	18.9	10.5	22.0	16.8	14.6	15.5	18.5	15.7	9.2	17.8

## 寒候期季節現象

要 素	初 日	終 日	最	早	最	晚
霧	10月31日	4月22日	大正11年10月12日	昭和31年5月18日		
結 氷	11月12日	4月11日	昭和32年10月19日	昭和31年4月30日		
雪	12月24日	3月11日	大正11年11月16日	昭和44年4月17日		

## B 地域(小淵沢)

統計期間: 1956~1965

月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	年	
気 温	平均	-0.8	0.0	9.2	9.6	14.0	17.6	22.1	22.6	16.6	12.6	7.5	2.5	10.8
	最高	3.7	4.9	8.6	15.3	19.4	22.1	26.4	27.5	22.9	17.3	12.6	7.3	15.7
	最低	-5.3	-4.9	-2.2	3.9	8.5	13.1	17.8	18.0	14.3	7.8	2.4	-2.3	5.9
	年	17.0	16.7	21.6	27.5	29.4	30.0	34.5	33.9	31.6	27.5	23.0	18.6	35.4
湿 度	高 度	10	20	6	13	6	29	15	9	6	3	1	9	15日
	中 度	10.0	11.0	-9.0	-9.0	-0.5	5.0	10.4	9.5	3.7	-3.0	-6.5	-12.2	-19.5
	低 度	17	6	1	12	5	20	9	20	29	31	29	21	6日
	年	1957	1952	1926	1947	1947	1962	1945	1956	1960	1949	1948	1947	1952年2月
降 水 量	年 量	41	47	65	116	153	185	144	138	193	110	56	39	1285
	大 日 量	65	50	56	96	86	162	120	144	161	128	55	46	162
	日 量	26	1	19	7	3	27	31	1	26	4	17	31	27日
	年	1957	1937	1923	1964	1941	1961	1929	1939	1959	1945	1916	1948	1961年6月
積 雪	深 度	40	80	56	20	—	—	—	—	—	—	18	15	90
	天 数	15	8	13	17	—	—	—	—	—	—	27	10	8日
	年	1952	1958	1969	1969	—	—	—	—	—	—	1968	1953	1958年2月
	日 数	2.5	3.7	6.3	12.5	16.3	18.8	16.2	10.9	13.6	11.6	8.7	5.6	125.9
天 气 日 数	晴	5.0	6.6	0.0	0.0	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	1.0
	曇	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	雨	0.6	0.8	0.4	0.2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.2	0.1	0.1	3.4
	雪	0.0	0.0	0.0	0.0	0.2	0.2	0.2	0.4	0.4	0.1	0.1	0.1	1.9
	霧	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	雷	14.0	13.1	19.7	6.3	1.0	—	1.1	—	—	—	—	—	55.4
	雲	21.4	14.0	11.2	4.1	—	—	—	—	—	—	—	—	89.7
	霧	21.4	24.0	15.9	4.1	—	—	—	—	—	—	—	—	121.0
	雨	16.2	13.3	13.3	8.7	7.5	2.3	6.2	6.0	5.5	8.4	14.4	17.3	120.1
	雪	7.2	7.3	10.2	14.5	16.7	17.9	15.2	11.0	15.7	15.3	9.1	7.0	146.9

## 寒候期季節現象

要 素	初 日	終 日	最	早	最	晚
霧	10月24日	5月7日	昭和26年10月7日	昭和39年5月27日		
結 氷	11月9日	4月19日	昭和32年10月19日	昭和32年5月4日		
雪	11月30日	9月31日	昭和37年11月5日	昭和28年4月23日		

表5 A・B 地域の気象条件の差

(甲府地方気象台『山梨県の気象』より)

## 6. まとめ

本稿では、甲斐の弥生文化成立期を前後する土器様相の変化について検討し、その編年的位置を明らかにしてきた。甲斐地域は、縄文晚期前半期に清水天王山式土器を主体とする独自の小文化圏をなし、東北、関東、北陸、中部高地西部など多地域からの影響が混在するが、晚期後半期（大洞C<sup>(65)</sup>式併行期）以降は、本稿で示したように工字文あるいは浮線網状文系土器を主体としたながら西日本の文化的影響が少なからず影をおとしている状況が看取された。近年では、水I式土器などの浮線網状文系土器の成立について、西日本の晚期前半の資料の中に祖源を求める考え方<sup>(66)</sup>が強くなっていることを考え合せると、中部地方縄文晚期文化が東北地方の亀ヶ岡文化圏の1つとする従来の説は、その後半期については再考を余儀なくされているのが現状であろう。

東海地方西部に祖源をもつ条痕文土器は、甲斐では蛭式土器に初見をみ、以後浮線網状文系土器を凌駕して主体をなすことが明らかにされたが、八ヶ岳南麓の金生遺跡と柳坪遺跡の出土土器は、その間の変化を明瞭に示すものと言える。本稿ではこの西期を前後とした土器様相の改変と上器組成の変化を、水稻耕作を中心とする農耕社会成立への第1歩として捉えてきたが、なおも問題は山積みにされている。弥生文化成立の背景となる生産活動や生活様式の変化は、生産手段に密接した石器組成の検討など、総合的な文化内容の変化の中で今後明確にしていかなければならぬと思う。

最後に、本稿を草するにあたって資料を提供して戴いた山本寿々雄氏、奈良泰史氏をはじめ、貴重な助言を戴いた小野真一、末木健、武藤雄六、小林安典、長谷川孟、鈴木敏則、佐藤由紀男、堀内真、喜多圭介、数野雅彦、畠大介、日向千恵の諸氏ならびに埋蔵文化財センターの諸先輩に心から謝意を表する次第である。

### 註

- 1 大山柏・竹下次作・井出佐重 1931 「山梨県河口湖村長坂上条発掘調査報告」『史前学雑誌』13-3 PP 1~27
- 2 山内清男 1952 「第二トレンチ」『吉胡貝塚』 PP 123~124
- 3 山本寿々雄 1957 「山梨県南都留郡河口湖町の島遺跡（第1次）」『日本考古学年報』5 PP 49~50、同 1957 「山梨県東八代郡米倉山B遺跡」『日本考古学年報』5 P 50
- 4 山本寿々雄 1961 「山梨県河口湖町鶴の島出土の土器の例」『富士国立公園博物館研究報告』第6号 PP 37~40
- 5 山本寿々雄 1966 「南都留郡河口湖町小立島原出土の弥生式土器」『富士国立公園博物館研究報告』第16号
- 6 山本寿々雄 1966 「南都留郡河口湖町小立字宝司ケ塚出土の土器について」『富士国立公園博物館研究報告』第15号

- 7 都留文科大学考古学研究会 1968 「山梨県東八代郡中道町米倉山遺跡第1トレンチ出土  
遺物について」『甲斐考古』5の1 PP 47~48
- 8 山本寿々雄 1968 「弥生式文化」『山梨県の考古学』 PP 183~224
- 9 上野晴朗 1967 「弥生時代」『甲州風土記』 PP 26~30
- 10 長谷川益ほか 1975 「弥生時代の上野原町」『上野原町誌』(上) PP 235~240、  
山崎金夫 1975 「弥生式土器資料について」『甲斐考古』12-1 PP 5~6
- 11 鰐間真一 1977 「山梨県北巨摩地方の弥生時代初頭土器について」『信濃』29-8  
PP 51~60
- 12 中山誠二 1983 「山梨県の初期弥生土器」『東日本における黎明期の弥生土器』  
PP 283~287
- 13 水Ⅰ式土器の深鉢に施される条痕文は、条間が狭く不規則で、条溝が鋭く深い特徴をもち、  
IV群中の3種条痕と類似する。しかし、ここでは貝殻条痕文の系譜をひく水神平系条痕文  
土器の条痕とは区別し、横山浩一氏の提唱する「細密条痕文」の名称を使用する。; 横山  
浩一 1979 「駒毛目技法の源流に関する予備的検討」『九州文化史研究所紀要』 第24  
号 PP 223~245
- 14 小林行雄・佐原真尚氏のいう櫛Ⅱ種に類似する。; 小林行雄・佐原真 1964 「柴雲出」  
P 25
- 15 新津健 1984 「金生遺跡発見の中空土偶と2号配石」 山梨県立考古博物館・山梨県埋  
蔵文化財センター『研究紀要』1 PP 25~40
- 16 註5に同じ。
- 17 註1に同じ。
- 18 註11に同じ。
- 19 註9に同じ。; 上野晴朗 1967 「先史時代」『一宮町誌』 PP 179~195
- 20 第14図7~9は、鶴の島に保管されている資料で、それ以外は山本寿々雄氏所蔵の資料を  
掲載させていただいた。
- 21 註6に同じ。
- 22 長野県考古学会 1969 「佐野」掲載図版18~77。
- 23 渡田正一・大曾義一・岩野見司 1970 「馬見塚(MAMIZUKA)遺跡」『新編一宮市史  
資料編1 織文時代』掲載図版第39~13・15・16。
- 24 杉原莊介・外山和夫 1964 「豊川下流域における織文時代晩期の遺跡」『考古学集刊』  
第2巻第3号に掲載される第20図-27。
- 25 馬見塚遺跡報文(註23に同じ) 図版34。
- 26 古賀貝塚報文(註2に同じ) 図版10~1。
- 27 註15に同じ。

- 28 唐津市教育委員会 1982 「菜畠遺跡」; 中島直幸 1982 「初期稻作期の凸帯文土器」  
「森貞次郎博士古稀記念古文化論集」 PP 297 ~ 354
- 29 山崎純男 1980 「弥生文化成立期における土器の編年的研究」『鏡山猛先生古稀記念古  
文化論叢』 PP 117 ~ 192
- 30 註28報文では、攢Lに分類される。
- 31 註28報文では、浅鉢Hに分類される。
- 32 家根祥多 1981 「近畿地方の土器」『圓文文化の研究』4 PP 238 ~ 248
- 33 馬見塚遺跡F地点出土土器中に多く存在する。
- 34 長野県考古学会 1968 「シンポジウム弥生文化の東漸とその発展」『長野県考古学会  
誌』第5号掲載第2図。
- 35 長野県松本市教育委員会 1972 「長野県松本市女鳥羽川遺跡緊急発掘調査報告書」
- 36 設楽博己 1982 「中部地方における弥生土器の成立過程」『信濃』第34巻第4号  
PP 87 ~ 129
- 37 小林秀夫・百瀬長秀ほか 1982 「御社宮河遺跡」 長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘  
調査報告書 茅野市その5
- 38 富士川町教育委員会 1975 「駿河山上」
- 39 金生遺跡A区27号住居址出土上器である。
- 40 平野進一 1983 「群馬県における初期弥生土器」『東日本における黎明期の弥生土器』  
P 190掲載の千飼谷戸出土「弥生式黎明期土器」の2
- 41 山本寿々雄 1960 「石造遺構の新例—山梨県都留市旭の場合—」『富士國立公園博物館  
研究報告』第4号 PP 15 ~ 20
- 42 丸山敏一郎 1966 「長野県下伊那郡天竜村平岡南遺跡出土遺物について」『信濃』第18  
巻第4号
- 43 気賀沢進・小原晃一 1979 「荒神沢遺跡」
- 44 註38に同じ。
- 45 半野吾郎ほか 1974 「遠江見性寺貝塚の研究」
- 46 吉田富夫・和田英雄 1971 「名古屋市中区吉沢町遺跡発掘調査報告Ⅰ 繩文時代編」
- 47 紅村弘ほか 1961 「櫛王遺跡」『藤東一篠東第2次、櫛王・行明調査報告』 PP 25 ~  
51
- 48 愛知県下り松遺跡、同県馬見塚遺跡D地点、三重県納所遺跡など伊勢湾沿岸地域に多く遠  
江などにおいても存在が確認されている。
- 49 註38標図第69の右下2個体の深鉢。
- 50 神村透 1967 「豊丘村林里遺跡」『長野県考古学会誌』第4号 PP 9 ~ 17

- 51 紅村弘 1978 「水神平式土器の諸問題」『東海先史文化の諸段階 資料編Ⅱ』 PP 425 ~ 437
- 52 佐藤由紀男 1983 「東海地方東部における畿内第Ⅰ様式・第Ⅱ様式に並行する土器の編年について」『東日本における黎明期の弥生土器』 PP 296 ~ 309
- 53 紅村弘 1981 「弥生時代成立論の展開」『東海先史文化の諸段階 本文編・補足改訂版』 PP 123 ~ 145
- 54 中村五郎 1982 「畿内第Ⅰ様式に並行する東日本の土器」; 設楽 註36前掲論文
- 55 藤森栄一ほか 1966 「岡谷市庄之畠遺跡」『松本蹴訪地区新産都市地域内埋蔵文化財緊急分布調査報告』 PP 1 ~ 32
- 56 藤沢宗平 1966 「松本市横山城遺跡」『信濃』第18巻第7号
- 57 佐藤由紀男 1985 「静岡県三ヶ日町殿畠遺跡出土の土器について(下)」『古代文化』第37巻第1号 PP 17 ~ 26
- 58 須藤隆 1973 「土器組成論」『考古学研究』第19巻4号 PP 62 ~ 89 ; 中島 註28前掲論文
- 59 註28前掲論文
- 60 新津健 1984 「八ヶ岳南麓における縄文後・晩期の遺跡について」『甲斐考古』21の2 PP 1 ~ 15
- 61 山梨県甲府測候所 1928 「米作と気象の関係」『山梨県気象と農作物の関係』 PP 27 ~ 36
- 62 甲府地方気象台 1970 「山梨県の気象」
- 63 尾川清親 1975 「発芽の形態と環境条件」『イネの生長』 P 51
- 64 尾川清親 1975 「活着と環境条件」『イネの生長』 P 89
- 65 泉拓良・家根祥多 1982 「縄文時代の終末」『日本歴史地図原始古代編』(上) P 94 ; 坪井清足 1962 「縄文文化論」『日本歴史』1 PP 111 ~ 138

#### その他の参考文献

- 永峯光一 1969 「水道跡の調査とその研究」『石器時代』9
- 小野貞一ほか 1962 「富士宮市浜沢遺跡出土の弥生土器・丸子式の新資料」『駿豆考古』第6号
- 駿豆考古学会 1979 「駿豆地方の弥生式土器集成」
- 杉原花介 1963 「駿河丸子及び佐渡出土の弥生式土器に就いて」『考古学集刊』第1巻-4

- 杉原莊介、岡本勇 1961 「愛知県西志賀遺跡」『日本農耕文化の育成』
- 神沢勇一 1960 「津久井町三ヶ木出土の弥生式土器」『神奈川県文化財調査報告』第26集
- 中村友博 1983 「土器様式変化の一研究」『考古学論考』
- 石川日出志 1981 「三河・尾張における弥生文化の成立」『駿台史学』第52号
- 大參義一 1971 「圓文式土器から弥生式土器へ—東海地方西部の場合—」『名古屋大学文学部研究論集』(史学) 56
- 佐原真編 1983 『弥生土器』 I・II
- 武藤雄六 1968 「長野県富士見町蘿畠遺跡の調査」『考古学集刊』第4巻1号
- 末木健 1975 「山梨県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—北巨摩郡長坂・明野・韭崎地内—」
- 末木健 1979 「山梨県小淵沢町の原始古代遺跡」
- 末木健 1983 「原始・古代」『小淵沢町誌』
- 山本寿々雄ほか 1976 「勝沼バイパス道路建設に伴う方形周溝墓等の調査」
- 西桂町教育委員会 1982 『寺野遺跡発掘報告書』
- 米田明訓・保坂康夫 1984 「久保原敷遺跡」
- 野沢昌康 1984 「甲斐・岡遺跡出土の容器形土偶」『山梨考古』第14号
- 都留市教育委員会 1976 「都留市の先史遺跡(上)」
- 富士吉田市教育委員会 1981 「富士吉田市の遺跡」
- 忍野村教育委員会 1983 「忍野の遺跡」
- 中山誠二 1985 「南二条遺跡」『上九一色村誌』
- 山本寿々雄 1970 「東八代郡豊富村大鳥居出土の西日本前期弥生式土器(遠賀川)について」『甲斐考古』7の3
- 森和敏 1978 「先史—古代」『韭崎市誌』上巻

# 辻金具・雲珠考

坂本 美夫

## 1. はじめに

## 2. 研究史

## 3. 辻金具・雲珠の形態

## 4. 辻金具・雲珠の編年検討

## 5. おわりに

## 1. はじめに

馬具の各装具は三繩によって連結され、はじめて本来の機能を發揮するものといえよう。三繩は革帯や組紐などを使用しているが、この革帯などの交差する辻の部分を連結する留金具が辻金具である。4脚を最も通的な形とするが、部位によっては3脚などの例も使用されている。

雲珠も辻金具の一種であるが、特に尻繩が馬の背の中央で交差する位置に取付けられた、5脚以上のものを限定して雲珠としている。

その形態は革帯を取付ける脚数を除けば、辻金具、雲珠とも同形態の例が多く見られ、かつ変遷状況も軌を一にしているといえる。しかし、例外的なものも存在する。

大きく環状形、板状形、半球形および円形の4形態に分類されるが、時期によって使用された形態に差違が見られる。

辻金具・雲珠は馬装具の中で比較的出土例が多い。この中で尻繩構造の復元や、あるいは他の馬装具との組合せなど、辻金具、雲珠に係る研究がなされている。本稿では、これらを一層進めるとともに、辻金具、雲珠などが単独で出土する例も多々見られることから、この位置付けができるように、辻金具、雲珠の編年に焦点をあてて検討を加えてみたい。

## 2. 研究史

辻金具、雲珠については、古くより馬装具の1つとして取上げられてきたものの、その体系的な論考はそれほど多くなく、かつ馬具の研究が活発になる1951年以降のことといえる。

小野山節氏は1959年、「馬具と乗馬の風習」の論文において、古墳時代の馬具を四期に分けて編年した。その中で第三期の6世紀後半から7世紀の雲珠について具体的に触れている。「半球形が大きく高く、うえに花形座をおき、宝珠のような球形飾をつけ、腹に数条の回線をめぐらす」というように、いちじるしく装飾的になった例が多い」と指摘し、さらに巻末の「馬具の編年略表」で雲珠の編年を示している。これがその最初のものといえる。

1964年、小野山氏は「剣菱形杏葉をともなう馬具の性格」と題する論文の中で、「字形鏡板付  
轡と剣菱形杏葉の編年を行ない、これらに伴う雲珠3形態を明らかにした。

- a. 鉄環に帯を巻き返して、貴金具と爪形金具で留めたもの。
- b. (a)の上に低い半球体の鉄地金銅張金具をのせたもの。
- c. 低い半球体に脚をつけたもの。

であり、a → b → c の順序が見られるとした。f字形鏡板付轡や剣菱形杏葉からすれば、5世紀  
～6世紀前半にかけての雲珠の変遷となる。

1982年、大谷猛氏は「馬具」の中で辻金具などについて触れ、「初期のものは、環に脚をつけただけのもので実用本位のもので、辻金具と区別がむずかしいが、後には半球形をした中心部の周囲に脚をつけたものが主体となり、次第に装飾性と大きさを増す。中心部の半球形部分の頂点に鈴・花形座などをつけたものも出現する。脚は6～12本ほどつけられ、鉄製あるいは鉄地金銅張のものが多く見られる」とした。

小野山節氏は1983年に、「花形杏葉と光背」の中で、花形鏡板付轡に伴う辻金具について触れた。環状鉄製品と貴金具ならびに留金具を用いる方法と、中央が方形の十字形またはX字形のもの、これには方形台状の中央部に宝珠を飾りつける例も見られる。さらに半球形に四脚をつけた金具で、貴金具と紙で革または帯を留める形態で、これには頂部に宝珠を飾るものと宝珠を持たないものがあるとした。特に「6世紀後半から7世紀前半にかけて多く用いられた辻金具は、中央の半球形が高い」と指摘した。

千賀久氏は、1982年に「古墳時代の初期馬装」で、伴出した雲珠の脚数に注目して尻繁構造の復元を試みた。尻繁構造には、雲珠を伴うものと伴わないものとが当初より存在したとして、これらは基本的には朝鮮半島での風習に共通し、同一文化圏内での現象と考えた。

### 3. 辻金具・雲珠の形態

雲珠は、そのほとんどが辻金具と共通する形態のものであり、これらはセット関係にある。これに対して辻金具の中には、雲珠と形態的にセット関係にない形態のものも多く存在するという違いが見られる。この違いは尻繁の有無など馬装の違いに起因するものと考えているが、まず辻金具・雲珠にどのような形態があるのか触れてみたい。

辻金具・雲珠は既に述べたように大きく分けて、鉄の環に留金具と貴金具とをつけた簡素な環形、あるいは辻金具の専用の形態ともいべき板状形、円形、それに最も量的に多い半球形の4形態が知られる。これらの中には、さらに細部に違いを持つ形態のものがあり、次にその概略について整理しておきたい。

#### (1) 環状形辻金具・雲珠(図1・2)

最も簡単な構造のもので、環に革ないし帯をからませ、その上から留金具と貴金具とによって

固定する形態である。留金具の形態に多少の違いが見られるものの変化に乏しく、形態的には1形態でまとまる。鉄製。

## (2) 板状形

板状を基本とするものであるが、交差部などに違いが見られ幾つかの形態が知られる。

### ア 梱合せ十字形辻金具（図3・4）

中央に方形の座金具を置き、その四辺に足金具（爪形金具）を配し、責金具が取付けられる形態である。鉄地金銅張。

### イ 板状十字形辻金具

一枚の板状で、十字形の形態を取る。交差部の形態に違いが見られ、細分される。

#### a類（図5・6）

幅の広い脚で、その交差部が脚と同様に平坦に作られ、交差部と脚部とにそれぞれ紙を取付ける形態。鉄製で、黒漆を塗ったものも見られる。

#### b類（図7・8）

脚が爪形ないし花弁形を呈し、交差部が方形状に突出する形態である。脚に紙が取付くが、交差部は紙の有るものと無いものとが見られる。鉄地金銅張。

#### c類

脚の交差部および脚部に鈴を取付けた形態。脚部の鈴は紙の機能をもとう。群馬県八幡觀音塚古墳出土例で、鈴付辻金具とされているが、この中に6脚のものが見られ、他の4脚の辻金具よりも大形品であることから、雲珠の可能性も考える必要があろう。金銅製。

#### d類（図9）

脚の交差部が脚の幅を出ない範囲で半球形に突出する形態。脚部に若干の違いの見られるものがある。従って有脚半球形に入るものかも知れないが、脚部の形態から、板状形の中に入れておくこととする。

## (3) 半球形辻金具・雲珠

半球形の鉢部をもつものであるが、脚や鉢部に違いが見られ細分される。

### ア 無脚半球形雲珠（図10）

直径6～13cm前後の低い半球形の裾に、平坦面の縁を回すもので、脚の取付けはない。縁に紙が認められ、この紙を用いて革帶などを留めたものと考えられる。縁に列点文を回す例もある。このほか鉢部に蓮弁文を毛彫りする例もあるが、これは蓮弁文様辻金具・雲珠として取扱う。

本形態の辻金具は、岡山県九日場古墳で小形のものを辻金具としているほか、類例に乏しいようである。

#### イ 有脚半球形鉢金具・雲珠

鉢部の形態の違いなどから、幾つかに細分される。ほとんど鉄地金銅張である。

##### a類（図14・15）

鉢部に凹線や花形座あるいは頂部に飾紙（宝珠）等の装飾が全く見られない形態。鉢部の断面は半球形と低い偏円形のものとが見られる。鉢部の裾に脚が見られるが、角形ないし隅丸形の形態のものがほとんどである。

##### b類（図16・17）

鉢部の上部に花形座、頂部に飾紙（宝珠）が取付けられ、そのほとんどに鉢部の下部に数条の凹線の施された形態である。

鉢部の断面は半球形、偏円形ないし天井部がやや平坦な形態、頂部が強く平坦となり角張る形態とが見られる。

花形座は1～2段が、花弁数は5～8枚ほどが数えられる。また花弁に毛彫りの施される例もある。

脚の形態には角形、隅丸形、花弁形などが見られる。なお脚に取付けられる資金具に刻目が施された例は、ほとんど知らない。

##### c類（図18・19）

鉢部の下半に数条の凹線を施したものである。鉢部の頂部に飾紙（宝珠）を取付ける例と、取付けない例とが見られる。

鉢部の断面形態は半球形、偏円形それに角形の3形態が知られる。

脚の形態は角形、隅丸形、花弁形などが見られる。なお脚に取付ける資金具には、刻目がほとんど施されていない。

##### d類（図20・21）

鉢部の断面が2段に渡って角形に折れる形態のものである。大きくはc類に括されるものであろう。しかし鉢部の下半には凹線が見られないこと、また頂部に花形座の見られないことから有脚半球形（角形）として、1形態とすることもできよう。

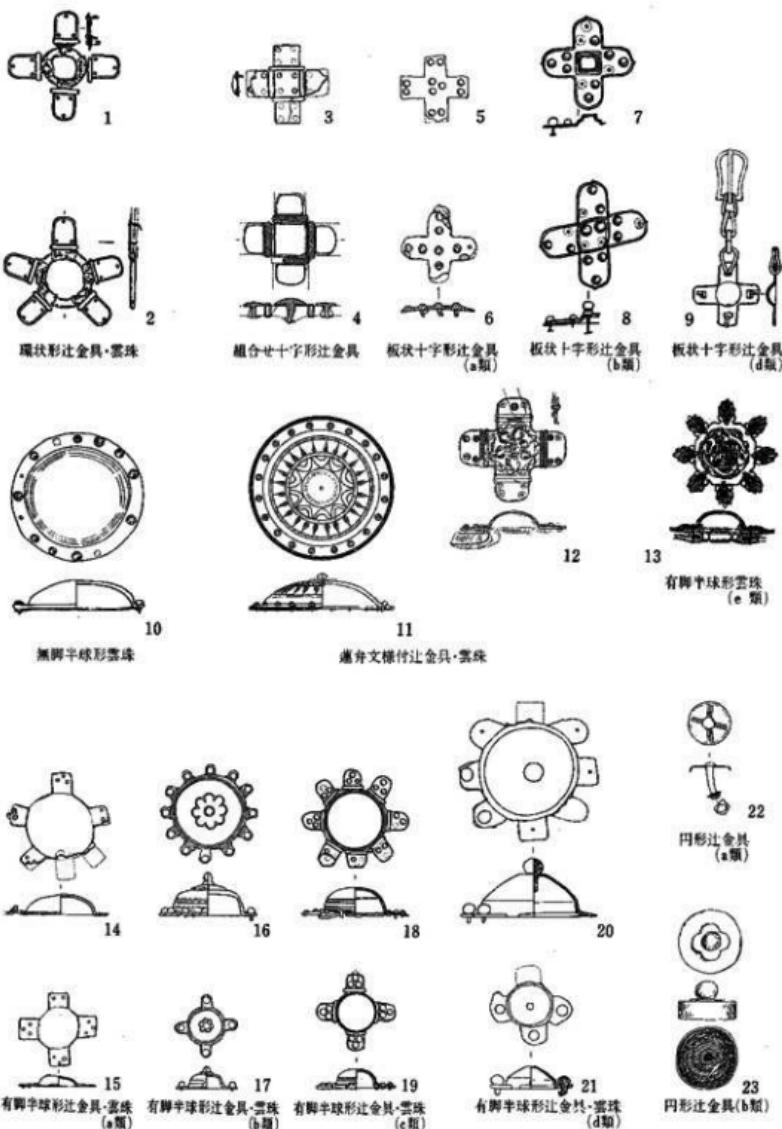
脚の形態には角形、隅丸形、花弁形のものが知られる。

##### e類（図13）

和歌山県大谷古墳あるいは宮崎県西都原古墳出土例などのように、鉢部に透彫りを施した形態。これら2例は、いずれも竜文を表現しているものとされ、西都原古墳出土例がやや形態のくずれた表現とされている。なお、西都原古墳出土例には、鉢部に鈴が挿入されている。

脚の形態は西都原古墳例が脚の付け根が凹む隅丸形（爪形）で、大谷古墳例がバルメット風の葉文という違いを見せている。

このほか本形態とは違うが透彫りの看点からすれば脚部に心葉形の透彫りを施した例も見られ



辻金具・雲珠形態図 (縮尺不同)

る。この脚の形態は、花弁形を呈するものである。

#### f類（図11・12）

鉢部に蓮弁文様を彫り込んだ形態のものを一括した。このため無脚半球形雲珠のほかに、有脚半球形の辻金具・雲珠との2形態が見られる。なお、半球形というものの中には、断面形態の低い偏円形のものが多い。

#### (4) 円形辻金具

##### a類（図22）

毛彫馬具に伴う辻金具と考えられるものである。径 2.5 cm、高さ 2.5 %前後の円筒形で、一見座金具の形態を呈する。この中央に太くて長い鋸が見られ、この鋸で、革帶などを留めたものと考えられる。またその上面には毛彫りにて文様の施される例が多い。金銅製。

##### b類（図23）

イモガイや巻目などを輪切にして、中央に鉄製の金具を貫通させ、飾紙（宝珠）あるいは四葉座などを取付けたものである。

#### (5) そ の 他

以上、辻金具、雲珠の主だった形態について取上げてみた。だが、このほかにも、たとえば静岡県藤枝山古墳出土例に見られるような半球形辻金具（雲珠）の鉢部に稜の認められる形態など、今回触れなかった幾つかの形態が存在する。これらについては、今後資料の収集をまって検討を加えて行く所存である。

### 4 辻金具・雲珠の編年的検討

#### (1) 環状形雲珠（辻金具）

内部形式を壺穴式石室、木棺直葬、粘土棺とする古墳からの出土例が圧倒的に多く、横穴式石室例は少ない。前者が8割前後を占める状況であり、このことは本形式が古い時期を中心に存在したことを意味している。須恵器を伴出する古墳例がいくつか見られ、その最も古い時期の例は兵庫県印南野2号墳、埼玉県稻荷山古墳例などであり、5世紀第4四半世紀頃のものと推定される。初現は一層古い時期の古墳である大阪府七觀古墳、滋賀県新開1号墳などに求められ、おおよそ5世紀第1～第2四半世紀頃に置かれるものといえよう。逆に下限は、愛知県豊田大塚古墳、兵庫県西宮山古墳などの6世紀第1～第2四半世紀の前半頃が、須恵器などから明確に捉えられる時期である。しかし、下限の時期については、なお問題が残る。たとえば、栃木県愛宕塚古墳からも環状形雲珠・辻金具が出土している。切石積の横穴式石室を内部形式とする帆立貝式の

古墳であり、中より環状形雲珠・辻金具、墳丘より花形座の有脚半球形雲珠、辻金具、金鈕製轡、花形杏葉、鞍破片、綱、鐵繩、前庭部より須恵器大甕が出土している。本墳から出土した馬具には、雲珠・辻金具、綱にそれぞれ2形態が認められ、2組の馬具が副葬されたことになろう。須恵器大甕の時期は明確にならないが、おおよそ6世紀代のものかと考えられる。花形杏葉は立聞形態などからすれば6世紀第4四半世紀以降に置かれるものと考えられ、花形座の有脚半球形雲珠・辻金具も、この時期で矛盾はないといえる。綱では、倒卵形の座金具に小形の鉤具を取付ける形態が、6世紀第3～第4四半世紀に置かれる。一方は円環形式で鉤脚が環体と分離する形態であり、6世紀第1四半世紀以降の形態を示している。

福岡県向山4号墳からも環状形雲珠ないし辻金具と考えられる金具が出土している。須恵器からは6世紀第3四半世紀以降の年代が求められる。一方、馬具の中の轡に2形態が知られる。1つは板状立聞素環鏡板付轡で、おおよそ7世紀第1四半世紀頃が推定される。今1つは立聞空連素環鏡板付轡と見なされるものであり、6世紀第1～第3四半世紀の時期が推定される。

これらからすると、いずれも6世紀第2四半世紀以前まで、通り得る資料が存在することになる。須恵器があまりにも少なく、欠落した可能性も残っていよう。従ってここでは、とりあえずその下限を6世紀第2四半世紀前半として捉えておき、前述の古墳の石室構築方法などからの検討をまって、下限の時期の下降を必要とするのか、あるいは形態変化をみせたものなのか、伝世品として捉えるのか考えてみたい。

環の断面形態では、若干の違いが見られるが、その変化を明確にするまでには至っていない。

留金具となる爪形金具の形態には、花弁ないし隅丸形と角形とが見られる。花弁形は七觀古墳、新開1号墳などの古い時期に集中する傾向が、角形は印南野2号墳など5世紀第3四半世紀以降に集中する傾向が窺える。

脚の鉢は、別造りの鉢を取付ける形態がほとんどであるが、5世紀第4四半世紀頃から脚に鉢を鑄造する形態のものが見られるようになる。

爪形金具に1～2条の貴金属が取付けられている。この中で特に5世紀第4四半世紀以降になると、刻目を施す例が多くなる傾向を捉えることができる。

雲珠の脚数は5～8脚が確認されている。相対的で、かつ例数が少ない中であるが、時期の下降するに従って脚数が多くなる傾向が窺える。

雲珠と辻金具の組合せは基本的には同形態のものであるが、5世紀第4四半世紀以降～6世紀第2四半世紀頃において、組合せ十字形辻金具が組合せの中に入ってくることが捉えられる。

## (2) 板状形辻金具（雲珠）

### ア 組合せ十字形辻金具

環状形雲珠・辻金具同様に、古墳の内部形式の様相としては、竪穴式石室、木棺直葬、粘土椁、横穴式石室などから出土している。この中で横穴式石室例は僅かであり、比較的古い時期を中心と使用された形態といえる。

福岡県浦谷C-5号墳、埼玉県稻荷山古墳例などが現在最も遅る例と考えられ、おおよそ5世紀第4四半世紀にその初現を求めておきたい。京都府鞍塚古墳出土品とされる中にも本形式の辻金具が存在する。伴出した須恵器は5世紀第2～第3四半世紀頃に位置付けられると考えられるもので、これからすると本形式の最も遅る例といえる。しかし、出土品の中に収蔵経過の違いが見られ、他の伴出馬具とともに後日再検討を加え、編年的位置を考えてみたい。

下限の例としては、兵庫県西宮山古墳、島根県上島古墳などをあげることができる。おおよそ、6世紀第2四半世紀の前半頃を境として、以後その類例がほとんど見られないことから、この時期を下限として求めておきたい。

留金具の紙形態には、別個に取付ける例と直に鋲造された例とが認められる。

雲珠との組合せは、前述のように環状形雲珠と組合はほかに、6世紀第1四半世紀以降には無脚半球形雲珠との組合せも認められる状況であり、本形態の辻金具は最初から組合は雲珠はないものといえよう。

#### イ 板状十字形辻金具

##### a類

脚の形態は隅丸ないし角形を呈し、紙を打ちつけて革帶などを留めるものである。

知り得た資料から見る限り、木棺直葬、粘土棺などを内部形式とする古墳からの出土例がほとんどである。

岐阜県天王神社古墳、奈良県新沢千塚312号墳などから須恵器が出土しており、5世紀第4四半世紀頃より6世紀第1四半世紀頃の時期が求められる。また須恵器を出土していない古墳についても、他の馬具などから求められる年代は、須恵器から求められた年代に大方一致する状況といえる。したがって本形式の存在期間は、比較的短期間といえそうである。

雲珠との組合せは明確なものが見られない。おそらく組合せ十字形辻金具と同様に、元来から組合はく雲珠は無かったものと考えられる。存在時期からすれば、環状形雲珠あるいは無脚半球形雲珠と組合せになるものと推定できる。

なお、本形式はこれまでに鉄製梢円形鏡板付轡と一緒に出土した例が意外と多く見られ、鉄製梢円形鏡板付轡と組合せになる可能性がある。しかし類例に乏しく、今後に待つところが大きいといえる。

##### b類

内部形式を横穴式石室とする古墳からの出土がほとんどで、他に横穴が僅かに知られる。また、副葬品中に須恵器を一緒に含んでいることから、比較的新しい時期のものといえる。おおよそ6世紀第2四半世紀頃から、6世紀第3四半世紀頃が、須恵器より求められる時期である。従ってa類同様に、その存在期間は短かいものといえる。しかし、静岡県駿河郡山古墳、島根県古鬼宅裏横穴、千葉県金鈴塚古墳などが主だったもので、知見例が少ない。

##### c類

群馬県八幡觀音塚古墳出土の金銅鉢付辻金物とされているものである。

横穴式石室を内部形式とする古墳で、2～3組の馬具の存在が知られ、辻金具・雲珠にも複数の形態が見られる。その中で板状十字形辻金具（d類）は、造りなどから光背杏葉・鉸具立間素環鏡板付轡との組合せが想定できる。板状十字形辻金具・光背杏葉と共に鑄銅製・渡金であり共通性を求める。又、光背杏葉の立間は鉸具立間であり、素環鏡板付轡の立間が鉸具立間であることと共通性が求められ、組合せになる可能性は高いものといえよう。鉸具付心葉杏葉は、おおよそ6世紀第4四半世紀頃から7世紀第3四半世紀頃まで、その存在が知られ参考となろう。また鉸具立間素環鏡板付轡も鉸具付心葉杏葉と同じ時期であるが、特に立間孔が扇状、引手が振りをもつ形態と考えられることから、7世紀第2四半世紀以降に中心が置かれるものといえる。従って7世紀第2四半世紀以降が共通年代と考えられ、よって本形態の辻金具類もこの時期に位置付けることが、可能といえよう。伴出した須恵器も、6世紀第4四半世紀から7世紀第3四半世紀頃に位置付けられるもので、矛盾は無いものといえる。

このほかに脚半球形辻金具・雲珠が見られ、これは鉢の腹部に凹線を回す形態で、6世紀第2～第4四半世紀に中心が置かれる。鉄地金銅張製であり、同じ鉄地金銅張製の花形鏡板付轡および花形杏葉と組合せの可能性もある。しかし轡や杏葉は小野山節氏によって7世紀第2四半世紀頃の時期が考えられており、船軸が認められることになる。いずれもの位置付けが妥当とするならば、元来より組合わなかったと見なすことができよう。なお、花形鏡板付轡・花形杏葉と、先の板状十字形辻金具の組合せになる可能性は、造りなどから低いものと考えられる。

#### d類

静岡県賤機山古墳、群馬県惠下古墳に知られるが、細部に違いが見られる。特に脚部においては、前者が鉢留であるのに対して、後者は脚に方形の孔を穿ち、兵庫鎖を取付ける形態である。また交差部に見られる半球形にも、前者が小形で後者がやや大形という違いがある。形態からすれば、前者がa類に近いものといえる。

前者は横穴式石室であり、後者は豎穴式石室を内部形式としているが、いずれも須恵器と一緒に出土している。6世紀第1四半世紀から6世紀前半頃の時期が、須恵器などから想定される。

本形態を有脚半球形に含めるとすれば、有脚半球形辻金具のa類に属し、しかも最も古い時期に位置付けられることになろう。そこには鉢部の発展過程を捉えられるかもしれない。しかし、今のところは、板状形と半球形の中間形態として、とりあえず板状形に含めておく。

### (3) 半球形辻金具・雲珠

#### ア 無脚半球形雲珠

横穴式石室を内部形式とする古墳から出土し、かつ須恵器を作出する例がほとんどといえる。大阪府芝山古墳、岡山県中宮1号墳などが代表的なものといえる。しかし見例は少ない。須恵器から求めた共通年代では、おおよそ6世紀第1四半世紀から、6世紀第2四半世紀前半頃を中心

心として存在しているようであり、使用期間としては比較的短かかったといえる。

この間、形態的な変化を明確に捉えることはできないものの、編年的序列が妥当とすれば法量の上で若干の変化を知ることができる。それは相対的といえるが6世紀第1四半世紀後半頃を境として、雲珠の直径に変化が見られ、以前は10cm未満、以後は10cm以上の法量の形態となる。また合せて身の高さも2cm未満のものが6世紀第1四半世紀前半、2cm以上のものが6世紀第1四半世紀後半以降の傾向が窺える。

福井県十善ノ森古墳からも、本形態の雲珠が出土している。横穴式石室を内部形式とする古墳であり、馬具の中には双竜透文鈴金銅鏡板付轡、木心铁板張輪鉗などが見られる。築造年代については馬具などから5世紀後半頃とする見方と、6世紀前半代とする見方がある。従って、本形態の初現についても5世紀後半代に遡る可能性もある。しかし、本形態の雲珠のこれまでの初現が6世紀第1四半世紀といっても、その後半の時期に傾斜が強い状況であることから、なお6世紀第1四半世紀を遡る可能性は薄いものといえよう。

#### イ 有脚半球形辻金具・雲珠

##### a類

福岡県寿命王塚古墳例などが代表的なものといえる。横穴式石室を内部形式とする古墳からの出土がほとんどを占める。従って、副葬品中に須恵器の存在が顕著である。この須恵器から上限を求める6世紀第1四半世紀頃、下限は6世紀第4四半世紀頃ということになり、比較的長期に渡る形態といえる。特に6世紀第2四半世紀に顕著になるようである。

鉢部の断面形態には偏平のものと、半球形のものとが見られるが、前者が主流である。6世紀第2四半世紀以降に半球形の形態が現われ、以後併存するようであるが、量的には少ない。

雲珠は直径5~9cm、辻金具は3~6cmほどの大きさを中心としていて、雲珠の中に特に大形品は認められないようである。雲珠の脚は5~7個の例が確認されており、6個が主流といえるようである。

本形態における雲珠と辻金具との出現時期には齟齬が見られ、辻金具が幾つか先行するものではないかと考えられる。6世紀第1四半世紀における本形態の組合せを見ると、雲珠には無脚半球形雲珠が、辻金具は本形態が使用され、本形態と同じ雲珠・辻金具の組合せは見られないようである。これから本形態の辻金具・雲珠の組合せは、6世紀第2四半世紀頃に成立するものではないかと考えられる。従って本形態の雲珠は、無脚半球形雲珠との関連が強いものと考えることもできよう。

##### b類

滋賀県稻荷山古墳出土品を代表例とするもので、横穴式石室を内部形式とする古墳から、ほとんど出土している。須恵器の伴出は顕著であり、6世紀第2四半世紀頃に初現が求められるようである。下限の時期は、およそ7世紀第2四半世紀頃が想定される。本形態も長期間に渡り存在が認められ、特に6世紀第3四半世紀以降に顕在化するようである。

鉢部の断面形態では、半球形が主流といえる。古い時期に僅かに偏円形が、また時期が下降す

ると角形を呈する状態も見られる。また6世紀第4四半世紀頃から花形座金具に毛彫りの施される例が確認される。

雲珠の大きさは、直径4cm台の小形品も見られるが、10cmを超えるものが多い。特に栃木県下石橋愛宕塚古墳出土例は、17cmほどの大形品である。脚数は5、8、10、12脚のものがあり、8以上とする例が多い。

#### c類

横穴式石室を内部形式とする古墳から、ほとんど出土する。須恵器の出土する例も顕著であり、その初現を6世紀第2四半世紀頃に位置付けられる。下限は6世紀第4四半世紀頃を想定できる。これは花形座付有脚半球形雲珠に比べ、その存在期間が短い状況といえる。

鉢部の断面形態にも幾つか見られる。このうち偏円形の例は6世紀第2四半世紀頃までを中心（滋賀県鶴稻荷山古墳例）、半球形の例は6世紀第2四半世紀、同第3四半世紀を中心に（福岡県釣崎3号墳例）、また断面が2段に渡る角形の例は6世紀第4四半世紀頃を中心に（奈良県珠城山1号墳例）、それぞれ存在していた状況が窺われる。

存在期間の短いことを指摘したが、これが資料不足によるものか否か今後にまたなければならない。この中で終りころに見られるようになる2段に渡る角形を呈する形態に注目したい。それは次に取り上げるが、2段に渡る角形を呈しながら、鉢部の裾に凹線を回さない形態が7世紀代に目につくようになることであり、これらとの関連の上で、その下限を見極める必要があろう。

雲珠の大きさは、小形品として直径5cm台の例も見られるが、8～10cm台が多数を占めるようである。脚数は6～12脚が知られ、8脚以上の例が半数以上を占めている状況といえる。

#### d類

凹線有脚半球形雲珠の特に6世紀第4四半世紀頃の鉢部裾から凹線を取り除いた形態であり、あるいは凹線有脚半球形雲珠の変遷の中で捉えることができる形態ともいえる。

横穴式石室を内部形式とする古墳や、横穴などから出土する。従って須恵器と一緒に出土するのが一般的である。福島県中田横穴などが代表例とされ、その上限を6世紀第4四半世紀頃に求めることができよう。下限については7世紀第2四半世紀頃が求められる。

例数が少なく、全体的傾向を現わすか否か疑問のところもあるが、雲珠の大きさは6～8cm台とやや小振りといえる。脚数は、今のところ8脚のものが知られる。

従って、本形態が凹線有脚半球形雲珠の1形態とすれば、7世紀第2四半世紀頃まで確認でき、花形座有脚半球形雲珠の存在期間と同じになる。

#### e類

大谷古墳、西都原古墳などの、極く僅かな出土例が確認されているにすぎない。特に大谷古墳例は、轡鏡板、杏葉の文様と共に通する文様を持つもので、セットとして製作されたものといえる。しかし、馬装具の中では、孤立した形態といえる。大谷古墳例は6世紀第1四半世紀頃の製作と考えられる。

このほか形態は違うが静岡県須津村の古墳出土例に、脚部に心葉形の透彫りを持つ辻金具がある。古墳の内部形式は不明であるが、孔が棒状に突出する鰐を一緒に出土しており、7世紀前半代頃の時期が想定される。この時期が出土古墳の全体年代を指していないことは言うまでもないが、一定点として捉えることはできよう。

脚に見られる花弁状の透彫りの形態は、他の馬具類にも認めることができる。透彫心葉形鏡板付轡および杏葉の鉤金具に同形態の透彫りが認められ、これらは6世紀第4四半世紀から7世紀第2四半世紀の馬装具と考えられるものである。また7世紀第1～第3四半世紀に渡かれる毛彫馬具の中にも心葉形の文様が知られる。これからすると、本形態の辻金具は、7世紀代を中心が置かれたことを想定することができ、透彫りにも時間的に開きのあることが分る。

#### f 類

ほとんどが横穴式石室を内部形式とする古墳から出土しており、須恵器の存在も顕著である。無脚半球形（岡山県九日場古墳例）と有脚半球形（埼玉県宮西古墳例）とがあるが、およそ6世紀第1～第2四半世紀を中心に存在した形態と考えられる。群馬県白石福荷山古墳出土例は6世紀第3四半世紀頃が想定されており、最も新しい時期のものとなるかも知れない。

有脚半球形の雲珠の脚数は、8脚の例が確認されている。

#### (4) 円形辻金具

##### a 類

山梨県御崎古墳出土例に知られ、特に毛彫馬具に伴って発見されており、毛彫馬具に組合うものといえる。従って、ほとんどが横穴式石室を内部形式とする古墳であり、須恵器の存在は顕著といえる。7世紀第1～第3四半世紀頃に存在期間が求められ、古墳時代における最も下限を示す辻金具と考えられる。なお、毛彫馬具における雲珠の形態は、今のところ全く不明である。あるいは辻金具のみによる尻繋構造を考える必要もある。

##### b 類

福島県笠谷古墳は複数の馬具を出土している。このうち板状立闇素環鏡板付轡は有脚半球形辻金具・雲珠（C類）に、本形態の辻金具は鉤具立闇素環鏡板付轡に組合うものと考えられる。前者は6世紀第3四半世紀頃に共通年代が求められる。後者は轡の形態から、7世紀第2四半世紀頃以降に位置付けられよう。

神奈川県諭訪脇9号横穴からは、須恵器と共に本形態の辻金具が出土している。須恵器はフラスコ形長頸壺と环身で、前者が7世紀第1四半世紀後半以降、後者が7世紀第1四半世紀後半～第2四半世紀頃に位置付けられよう。

資料の収集不足により、総体的な年代は今後に残すが、それでも7世紀第1四半世紀後半頃から第2四半世紀にかけての期間に、1時期が存在するものといえる。したがって、本形態の辻金具は新しい時期に中心が置かれるのではないかと推測することができよう。

年代	形態	環状形	板状形				半球形						円形	
			組合十字形 セ字形 (a)	十字形 (b)	十字形 (c)	十字形 (d)	無脚 (a)	有脚 (b)	有脚 (c)	有脚 (d)	有脚 (e)		(a)	(b)
5世紀	1													
	2													
	3													
	4													
6世紀	1													
	2													
	3													
	4													
7世紀	1													
	2													
	3													
	4													

辻金具・雲珠変遷表

### 5. おわりに

辻金具、雲珠について色々な変遷を検討してきたが、資料の欠落しているものが多くあるものと考えられる。今後、一層の補充が必要であることを痛感している。

辻金具、雲珠の存在期間については、前述の状況にあるものの、一応納得できるものと考えている。しかし、当初目指したところの細分した形での編年までには至らなかった。すなわち、長いものでは1世紀以上の存在が知られるが、この間の変化を整理するまでにはならなかったことである。今後この点に重点を置いて、検討を加えてゆきたいと考えている。

大方の御叱正をお願いする次第である。

### 参考文献及び使用図版文献

- 小野山節 1959 「馬具と乗馬の風習」『世界考古学大系』3
- 同 1964 「剣菱形杏葉をともなう馬具の性格」『日本考古学協会昭和39年度大会研究発表要旨』
- 大谷 猛 1982 「馬具」『古墳辞典』  
小野山節 1983 「花形杏葉と光背」『MUSEUM』 383
- 千賀 久 1982 「古墳時代の初期馬装」『福原考古学研究所論集』第4集
- 上田哲也ほか 1965 「印南野」
- 埼玉県教育委員会 1981 『福荷山古墳』(図4)
- 橋口隆康・岡崎 敬 1961 「和泉国七觀古墳調査報告」『古代学研究』第27号
- 鈴木博士・西田 弘ほか 1961 「新開古墳」『滋賀県史跡調査報告』12 (図1・2)
- 久永春男ほか 1966 「豊田大塚古墳」
- 八賀 齐 『富尾丸山古墳、西宮山古墳出土遺物』 京都国立博物館
- 常川秀夫 1974 「下石橋愛宕塚」『東北新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 福岡県教育委員会 1977 『九州総貿易車道関係埋蔵文化財調査報告』XII (図14・15)
- 池田満雄 1954 「山雲上島古墳調査報告」『古代学研究』10号
- 各務原市 1982 『各務原市史』
- 福原考古学研究所 1981 『新沢千塚古墳群』(図3)
- 後藤守一・斎藤 忠 1958 『静岡県駿河山古墳』
- 滝口 宏ほか 1952 「上総金鎧塚古墳」  
小野山節 1980 「上毛野・伊勢崎市恵下下方墳出土とガラス玉と須恵器と馬具」『MUSEUM』 357 (図9)
- 尾崎喜左雄ほか 1963 「上野國八幡觀音塚古墳調査報告書」
- 小野山節 1983 「花形杏葉と光背」『MUSEUM』 383
- 大塚初重 1977 「大阪府芝山古墳出土遺物をめぐる諸問題」考古論集、広島大学
- 近藤義郎編 1952 『佐良山古墳群の研究』第1冊
- 齐藤・優 1970 「若狭上中町の古墳」
- 梅原末治・小林行雄 1940 「筑前国嘉穂郡王塚装飾古墳」京都帝国大学文学部考古学研究報告 15
- 浜田耕作・梅原末治 1923 「近江国高島郡水尾村の古墳」京都帝国大学文学部考古学研究報告 8

- 小田富士雄 1971 『菅の谷墓跡群』 (図18・19)
- 小島俊次・伊達宗泰 1957 『珠城山古墳』
- 渡辺一雄ほか 1971 『中田装飾横穴』
- 橋口隆康ほか 1959 『大谷古墳』 (図13)
- 静岡県 1930 『静岡県史』 1
- 栗野克己ほか 1974 『岡山県埋蔵文化財報告』 4 (図11)
- 埼玉県 1982 『埼玉県史』 2 (図12)
- 拙稿 1979 「毛彫馬具の予察」『甲斐考古』16の2 (図22)
- 金井塚良一ほか 1970 『諏訪山古墳群』 (図6)
- 千賀 久ほか 1977 『平群・三里古墳』 (図16・17)
- 望月董弘 1968 『駿河池田山古墳』 (図20・21)
- 浜田信也ほか 1970 『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告』 第1集
- 赤星直忠 1973 『神奈川県埋蔵文化財発掘調査報告』 4 (図23)
- 堀田啓一ほか 1975 『天理市石上・農田古墳群』 (図10)
- 山本 清 1984 『横穴被葬者の地位をめぐって』『高根県考古学会誌』第1集 (図7・8)
- 日高正晴ほか 1972 『九州縦貫自動車道埋蔵文化財調査報告』 (1) (図5)
- 中村 浩 1981 『和泉陶邑窯の研究』
- 田辺昭三 1981 『須恵器大成』
- 拙稿 1984 『板状立脚素環鏡板付甕』『甲斐考古』21の1

1985年11月30日 印刷

1985年12月2日 発行

## 研究紀要 2

発行所 山梨県立考古博物館  
山梨県埋蔵文化財センター  
印刷所 株式会社 少国民社

